

指宿駅西部土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 Vol.3

橋牟礼川遺跡

(IV区)



2021

指宿市教育委員会

指宿駅西部土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 Vol.3

橋牟礼川遺跡

(IV区)

2021

指宿市教育委員会



序

大正5(1916)年に発見された橋牟礼川遺跡は、平成28(2016)年に発見から100年を迎えました。その発見には、指宿出身で旧制志布志中学校で学んだ西牟田盛健氏が大きな役割を果たしました。遺跡の発見後、瀬之口傳九郎、山崎五十麿、喜田貞吉、濱田耕作、長谷部言人、鳥居龍藏など当時の日本の考古学、人類学をリードしていた学者たちによって調査が行われてきました。その調査の中でも、京都帝国大学の濱田耕作による発掘調査において、縄文土器と弥生土器に時期差を見出したのは、日本考古学史に残る重大な成果として知られています。そして、大正13年に「国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡」として国指定史跡に指定されました。

昭和50年代に入ると、指宿駅西部土地区画整理事業の計画が立ち上がり、国指定史跡の北側隣接地に幹線道路が敷かれることとなりました。そこで、事業に伴う発掘調査を実施したところ、874年3月25日の開聞岳噴火で埋没した平安時代の倒壊建物跡や畠跡が検出され、さらに下層からは古墳時代の大規模な集落跡がみつかりました。これらの発掘調査成果から、国指定史跡の追加指定へ繋がるとともに、本市の歴史資料館構想は、考古博物館建設へ方向転換し、平成8年に指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれが開館しました。開館から現在まで、指宿市内の発掘調査成果や文化財情報を広く市民の方々へ公開・活用しているところです。

本報告書は昭和61年から平成元年に実施された発掘調査の成果を再構成し、報告書にまとめたものです。この調査では、多くの遺物が出土した「土器集中廃棄所」が確認され、その多くは博物館の常設展示室で展示されているものです。本成果が、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の更なる理解につながり、指宿市の文化財が市民の方々に保護・活用されることを祈念いたします。

令和3年3月

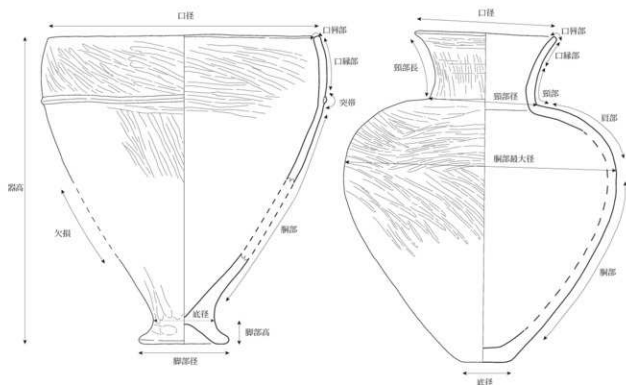
指宿市教育委員会
教育長 吉元 鈴代

例 言

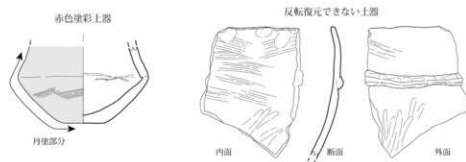
1. 本書は鹿児島県指宿市十二町に所在する橋牟礼川遺跡の発掘調査報告書である。起因事業は指宿駅西部土地区画整理事業である。
2. 発掘調査は昭和61年6月1日から平成元年1月30日まで実施した。
3. 発掘調査は鹿児島県教育委員会文化財課の応援を得て、指宿市教育委員会が実施した。
4. 報告書作成主体は指宿市教育委員会、報告書作成は松崎大嗣が担当した。
5. 本書の編集は松崎大嗣、上田洋子が行い、川畑一晴、芝原万季の協力を得た。遺物実測は、松崎、上田が行い、一部を株式会社九州文化財研究所へ委託した。遺物写真のうち、巻頭写真は鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得た。他の写真については、松崎、川畑、芝原で撮影した。
6. 出土土器については中村直子（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）、大西智和（鹿児島国際大学国際文化学部）、鐘ヶ江賢二（鹿児島国際大学博物館実習施設）に所見をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。
7. 報告書作成に要した経費のうち、50%は国、3.7%は県からの補助を得た。
8. 本報告書におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
9. 出土遺物については観察表を作成した。寸法の表記のなかで復元によるサイズは（ ）をつけた。
10. 層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
11. 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。
12. 発掘調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれで保管し、活用する。橋牟礼川遺跡の遺物注記の略号は「HS」である。

凡 例

1. 本書で用いる土器の部位名称は以下のとおりである。



2. 本書で用いる土器の表現は以下のとおりである。



目次

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査の至る経緯	1
第2節 発掘調査の組織	4
第3節 整理・報告書作成の組織	4

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 基本層序	12

第3章 IV区の調査

第1節 遺構	15
第2節 遺物	30

第4章 総括

第1節 土器集中廃棄所の「廃棄単位」について	217
第2節 土器集中廃棄所の年代的位置づけ	219

挿 図 目 次

図 1 橋牟礼川遺跡の調査範囲	3	図 16 土器集中廃棄所平面図8	25
図 2 指宿市の位置	5	図 17 土器集中廃棄所平面図9	26
図 3 指宿市の火山地形	6	図 18 土器集中廃棄所平面図10	27
図 4 指宿市南部の遺跡地図	7	図 19 土器集中廃棄所平面図11	28
図 5 橋牟礼川遺跡の範囲と周辺遺跡	8	図 20 土器集中廃棄所平面図12	29
図 6 橋牟礼川遺跡の基本層序	14	図 21 土器集中廃棄所出土遺物(甕)1	31
図 7 調査区配置図	15	図 22 土器集中廃棄所出土遺物(甕)2	32
図 8 土器集中廃棄所(全体)	16	図 23 土器集中廃棄所出土遺物(甕)3	33
図 9 土器集中廃棄所平面図1	18	図 24 土器集中廃棄所出土遺物(甕)4	34
図 10 土器集中廃棄所平面図2	19	図 25 土器集中廃棄所出土遺物(甕)5	35
図 11 土器集中廃棄所平面図3	20	図 26 土器集中廃棄所出土遺物(甕)6	36
図 12 土器集中廃棄所平面図4	21	図 27 土器集中廃棄所出土遺物(甕)7	37
図 13 土器集中廃棄所平面図5	22	図 28 土器集中廃棄所出土遺物(甕)8	38
図 14 土器集中廃棄所平面図6	23	図 29 土器集中廃棄所出土遺物(甕)9	39
図 15 土器集中廃棄所平面図7	24	図 30 土器集中廃棄所出土遺物(甕)10	40

挿 図 目 次

<p>図 111 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 14……124</p> <p>図 112 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 15……125</p> <p>図 113 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 16……126</p> <p>図 114 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 17……127</p> <p>図 115 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 18……128</p> <p>図 116 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 19……129</p> <p>図 117 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 20……130</p> <p>図 118 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 21……131</p> <p>図 119 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 22……132</p> <p>図 120 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 23……133</p> <p>図 121 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 24……134</p> <p>図 122 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 25……135</p> <p>図 123 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 26……136</p> <p>図 124 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 27……137</p> <p>図 125 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 28……138</p> <p>図 126 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 29……139</p> <p>図 127 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 30……140</p> <p>図 128 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 31……141</p> <p>図 129 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 32……142</p> <p>図 130 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 33……143</p> <p>図 131 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 34……144</p> <p>図 132 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 35……145</p> <p>図 133 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 36……146</p> <p>図 134 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 37……147</p> <p>図 135 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 38……148</p> <p>図 136 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 39……149</p> <p>図 137 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 40……150</p> <p>図 138 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 41……151</p> <p>図 139 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 42……152</p> <p>図 140 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 43……153</p> <p>図 141 土器集中廃棄所出土遺物 (壺) 44……154</p> <p>図 142 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 1……155</p> <p>図 143 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 2……156</p> <p>図 144 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 3……157</p> <p>図 145 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 4……158</p> <p>図 146 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 5……159</p> <p>図 147 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 6……160</p> <p>図 148 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 7……161</p> <p>図 149 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 8……162</p> <p>図 150 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 9……163</p>	<p>図 151 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 10……165</p> <p>図 152 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 11……166</p> <p>図 153 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 12……167</p> <p>図 154 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 13……168</p> <p>図 155 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 14……169</p> <p>図 156 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 15……170</p> <p>図 157 土器集中廃棄所出土遺物 (高杯) 16……171</p> <p>図 158 土器集中廃棄所出土遺物 (埴) 1……173</p> <p>図 159 土器集中廃棄所出土遺物 (埴) 2……174</p> <p>図 160 土器集中廃棄所出土遺物 (埴) 3……175</p> <p>図 161 土器集中廃棄所出土遺物 (埴) 4……176</p> <p>図 162 土器集中廃棄所出土遺物 (鉢) 1……178</p> <p>図 163 土器集中廃棄所出土遺物 (鉢) 2……179</p> <p>図 164 土器集中廃棄所出土遺物 (鉢) 3……180</p> <p>図 165 土器集中廃棄所出土遺物 (鉢) 4……181</p> <p>図 166 土器集中廃棄所出土遺物 (鉢) 5……182</p> <p>図 167 土器集中廃棄所出土遺物 (鉢) 6……183</p> <p>図 168 土器集中廃棄所出土遺物 (鉢) 7……184</p> <p>図 169 土器集中廃棄所出土遺物 (蓋) 1……186</p> <p>図 170 土器集中廃棄所出土遺物 (蓋) 2……187</p> <p>図 171 土器集中廃棄所出土遺物 (手捏)……188</p> <p>図 172 土器集中廃棄所出土遺物 (その他)……189</p> <p>図 173 土器集中廃棄所出土遺物 (石器) 1……190</p> <p>図 174 土器集中廃棄所出土遺物 (石器) 2……191</p> <p>図 175 土器集中廃棄所出土遺物 (石器) 3……192</p> <p>図 176 土器集中廃棄所出土遺物 (石器) 4……193</p> <p>図 177 土器集中廃棄所のグルーピング……218</p> <p>図 178 宮之前遺跡の土器集中廃棄所……220</p> <p>図 179 成川式土器編年……221</p>
---	---

表 目 次

表 1	橋牟礼川遺跡調査履歴	1	表 20	遺物観察表 18	212
表 2	橋牟礼川遺跡調査履歴 2	2	表 21	遺物観察表 19	213
表 3	遺物観察表 1	195	表 22	遺物観察表 20	214
表 4	遺物観察表 2	196	表 23	遺物観察表 21	215
表 5	遺物観察表 3	197	表 24	遺物観察表 22	216
表 6	遺物観察表 4	198			
表 7	遺物観察表 5	199			
表 8	遺物観察表 6	200			
表 9	遺物観察表 7	201			
表 10	遺物観察表 8	202			
表 11	遺物観察表 9	203			
表 12	遺物観察表 10	204			
表 13	遺物観察表 11	205			
表 14	遺物観察表 12	206			
表 15	遺物観察表 13	207			
表 16	遺物観察表 14	208			
表 17	遺物観察表 15	209			
表 18	遺物観察表 16	210			
表 19	遺物観察表 17	211			

図 版 目 次

図版 1-1	土器集中廃棄所写真	225	図版 5-6	出土状況 (軽石製品)	229
図版 1-2	土層断面図写真	225	図版 5-7	出土状況 (中型壺)	229
図版 2-1	土器集中廃棄所遺物出土状況	226	図版 5-8	出土状況 (舟形軽石)	229
図版 2-2	土器集中廃棄所遺物出土状況	226	図版 6-1	調査区土層断面	230
図版 3-1	出土状況 (小型壺)	227	図版 6-2	調査風景	230
図版 3-2	出土状況 (甕)	227	図版 7-1	出土遺物写真 (26)	231
図版 3-3	出土状況 (高杯)	227	図版 7-2	出土遺物写真 (18)	231
図版 3-4	出土状況 (甕と中型壺)	227	図版 7-3	出土遺物写真 (46)	231
図版 3-5	出土状況 (壺)	227	図版 7-4	出土遺物写真 (110)	231
図版 4-1	出土状況 (中型壺と埴)	228	図版 8-1	出土遺物写真 (45)	232
図版 4-2	出土状況 (中型壺と埴)	228	図版 8-2	出土遺物写真 (25)	232
図版 4-3	出土状況 (土製紡錘車)	228	図版 8-3	出土遺物写真 (25・1025)	232
図版 4-4	出土状況 (瓢形土器)	228	図版 8-4	出土遺物写真 (101)	232
図版 4-5	土器集中廃棄所断面	228	図版 9-1	出土遺物写真 (98)	233
図版 5-1	出土状況 (甕)	229	図版 9-2	出土遺物写真 (102)	233
図版 5-2	出土状況 (埴)	229	図版 9-3	出土遺物写真 (33)	233
図版 5-3	出土状況 (中型壺)	229	図版 9-4	出土遺物写真 (122)	233
図版 5-4	出土状況 (高杯)	229	図版 9-5	出土遺物写真 (131)	233
図版 5-5	出土状況 (埴)	229	図版 10-1	出土遺物写真 (甕)	234

图 版 目 次

图版 10-2 出土遗物写真 (甕).....234	图版 22-5 出土遗物写真 (879).....246
图版 11-1 出土遗物写真 (甕).....235	图版 22-6 出土遗物写真 (787).....246
图版 11-2 出土遗物写真 (甕).....235	图版 22-7 出土遗物写真 (813).....246
图版 12-1 出土遗物写真 (甕).....236	图版 22-8 出土遗物写真 (804).....246
图版 12-2 出土遗物写真 (甕).....236	图版 23-1 出土遗物写真 (829).....247
图版 13-1 出土遗物写真 (甕).....237	图版 23-2 出土遗物写真 (818).....247
图版 13-2 出土遗物写真 (甕).....237	图版 23-3 出土遗物写真 (823).....247
图版 14-1 出土遗物写真 (甕).....238	图版 23-4 出土遗物写真 (825).....247
图版 14-2 出土遗物写真 (甕).....238	图版 23-5 出土遗物写真 (854).....247
图版 15-1 出土遗物写真 (甕).....239	图版 23-6 出土遗物写真 (856).....247
图版 15-2 出土遗物写真 (甕).....239	图版 23-7 出土遗物写真 (861).....247
图版 16-1 出土遗物写真 (甕).....240	图版 23-8 出土遗物写真 (859).....247
图版 16-1 出土遗物写真 (壺).....240	图版 24-1 出土遗物写真 (580・575).....248
图版 17-1 出土遗物写真 (561).....241	图版 24-2 出土遗物写真 (757・759・760).....248
图版 17-2 出土遗物写真 (546).....241	图版 25-1 出土遗物写真 (913).....249
图版 17-3 出土遗物写真 (582).....241	图版 25-2 出土遗物写真 (907).....249
图版 17-4 出土遗物写真 (554).....241	图版 25-3 出土遗物写真 (945).....249
图版 17-5 出土遗物写真 (628).....241	图版 25-4 出土遗物写真 (916).....249
图版 18-1 出土遗物写真 (560).....242	图版 25-5 出土遗物写真 (935).....249
图版 18-2 出土遗物写真 (559).....242	图版 25-6 出土遗物写真 (933).....249
图版 18-3 出土遗物写真 (629).....242	图版 25-7 出土遗物写真 (908).....249
图版 18-4 出土遗物写真 (562).....242	图版 26-1 出土遗物写真 (921).....250
图版 19-1 出土遗物写真 (579).....243	图版 26-2 出土遗物写真 (993).....250
图版 19-2 出土遗物写真 (567).....243	图版 26-3 出土遗物写真 (915).....250
图版 19-3 出土遗物写真 (573).....243	图版 26-4 出土遗物写真 (948).....250
图版 19-4 出土遗物写真 (578).....243	图版 26-5 出土遗物写真 (918).....250
图版 20-1 出土遗物写真 (140).....244	图版 27-1 出土遗物写真 (977).....251
图版 20-2 出土遗物写真 (576).....244	图版 27-2 出土遗物写真 (1015).....251
图版 20-3 出土遗物写真 (556).....244	图版 27-3 出土遗物写真 (984).....251
图版 20-4 出土遗物写真 (563).....244	图版 27-4 出土遗物写真 (975).....251
图版 20-5 出土遗物写真 (649).....244	图版 27-5 出土遗物写真 (967).....251
图版 21-1 出土遗物写真 (650).....245	图版 27-6 出土遗物写真 (970).....251
图版 21-2 出土遗物写真 (564).....245	图版 27-7 出土遗物写真 (973).....251
图版 21-3 出土遗物写真 (763).....245	图版 27-8 出土遗物写真 (996).....251
图版 21-4 出土遗物写真 (764).....245	图版 28-1 出土遗物写真 (992).....252
图版 21-5 出土遗物写真 (791).....245	图版 28-2 出土遗物写真 (991).....252
图版 22-1 出土遗物写真 (773).....246	图版 28-3 出土遗物写真 (990).....252
图版 22-2 出土遗物写真 (868).....246	图版 28-4 出土遗物写真 (1019).....252
图版 22-3 出土遗物写真 (870).....246	图版 28-5 出土遗物写真 (1001・1002・1004・ 1005・1006).....252
图版 22-4 出土遗物写真 (866).....246	

図版 29-1	出土遺物写真 (1012)……………	253	図版 306	出土遺物写真 (1029)……………	254
図版 29-2	出土遺物写真 (982)……………	253	図版 307	出土遺物写真 (1024 の内面)……………	254
図版 29-3	出土遺物写真 (981)……………	253	図版 308	出土遺物写真 (1024)……………	254
図版 29-4	出土遺物写真 (978)……………	253	図版 31-1	出土遺物写真 (手摺)……………	255
図版 29-5	出土遺物写真 (963)……………	253	図版 31-2	出土遺物写真 (1051)……………	255
図版 29-6	出土遺物写真 (964)……………	253	図版 32-1	出土遺物写真 (1087)……………	256
図版 29-7	出土遺物写真 (962)……………	253	図版 32-2	出土遺物写真 (1088・1089)……………	256
図版 29-8	出土遺物写真 (965)……………	253	図版 32-3	出土遺物写真 (1052)……………	256
図版 30-1	出土遺物写真 (1030 の内面)……………	254	図版 32-4	出土遺物写真 (1085)……………	256
図版 30-2	出土遺物写真 (1030)……………	254	図版 32-5	出土遺物写真 (石器)……………	256
図版 30-3	出土遺物写真 (1025 の内面)……………	254	図版 33-1	出土遺物写真 (石器)……………	257
図版 30-4	出土遺物写真 (1025)……………	254	図版 33-2	出土遺物写真 (石器)……………	257
図版 30-5	出土遺物写真 (1029 の内面)……………	254			

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

橋牟礼川遺跡は大正5年に指宿出身で当時旧制志布志中学校（現県立志布志高等学校）の生徒である西牟田盛健によって遺物が表採されたことを契機に遺跡の存在が明らかとなった。遺物は現在も遺跡公園内を流れる橋牟礼川の露頭で採集されており、この小河川が遺跡を東西に横断する形で流れていることから、遺跡発見につながった。その後、喜田貞吉が山崎五十旗に依頼するかたちで、大正6年に発掘

調査が行われた。

大正7・8年には京都帝国大学の濱田耕作、長谷部言人らによる本格的な学術調査がおこなわれた。この調査では、火山灰層を挟んで下層から縄文土器、上層からは弥生土器が出土した。この成果から、弥生土器よりも縄文土器が古い時代のものであることが国内で初めて実証された遺跡として知られる。大正13年には、国指定史跡に指定され、昭和53年には、史跡保存のための2.36haの公有地化が完了した。

その後、国指定史跡に隣接する北西側の土地から

表1 橋牟礼川遺跡調査履歴

西暦	和暦	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	調査区
1917年	大正6年		山崎五十旗	喜田貞吉の依頼で、縄文土器と弥生土器が出土する地点を確認。	
1918年	大正7年	1月	京都帝国大学	京都帝国大学による学術調査が行われ、縄文土器が弥生土器よりも古い時代の土器であることが日本で初めて実証された。	
1919年	大正8年	4月	京都帝国大学	京都帝国大学による学術調査によって、「日本のボンベイ成いはサントリン」と報告され、日本で最も早く火山灰遺跡であることが認識された。	T7・8A～F
1926年	大正15年		史跡名勝天然記念物調査委員（山崎五十旗）	濱田の調査を要約	
1930年	昭和5年	昭和5年3月13日	鳥居龍藏	京都帝国大学調査地点の周辺で調査。弥生土器や磁石が出土し、その東100mの地点で新たな貝塚を発見した。	
1948年	昭和22年	昭和23年2月	鹿児島県	鹿児島県立公園校補地学術調査が行われ、縄文土器、弥生土器の包含層に加え、古墳時代の貝塚が発見される。	
1974年	昭和48年	昭和49年2月25日～3月11日	指宿市教育委員会	史跡指定現状変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、平安時代の土壘墓から幼児骨などが発見される。	S48 I～IV
1975年	昭和49年	昭和50年2月3日～2月18日	指宿市教育委員会	史跡指定現状変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代に至る各時代の文化層、火山灰層が確認される。また、縄文～弥生期の竪穴住居跡、古墳時代の土器中集薬所などが発見される。	S49V～VII
1979年	昭和54年	昭和54年10月22日～12月1日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う確認調査が行われ、遺跡の広がり約10ha以上に及ぶことが確認される。	S54T1～T18
1983年	昭和57年	昭和58年2月21日～3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の竪穴住居や貝塚が発見される。	S57T1～T7
1986年	昭和61年	昭和61年5月16日～6月30日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の竪穴住居跡やV字溝、鍛冶に伴う遺物が出土する。また、平安時代の鉄器、須恵器、土器などが出土する。	S61T8～T10
1986年	昭和61年	昭和61年7月10日～昭和62年3月20日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年（西暦874年）の開闢房壇火に伴う土石流で埋め尽くされた旧河川が発見される。	VIII区
1987年	昭和62年	昭和61年6月1日～平成1年1月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、国指定史跡内で発見されている古墳時代の竪穴住居跡と同期期の住居群が確認される。	IV区・VII区
1988年	昭和63年	昭和63年7月4日～平成1年1月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年（西暦874年）の開闢房壇火で埋没した建物跡が発見される。また、古墳V区時代の子持玉が出土する。	V区
1988年	昭和63年	昭和63年4月25日～5月20日	指宿市教育委員会	温泉源移転に伴う確認調査が行われ、古墳時代の集約の広がり確認される。	X区

表2 橋牟礼川遺跡調査履歴2

西暦	昭和	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	調査区
1989年	昭和63年	平成1年1月8日 ～1月28日	指宿市教育委員会	個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開園岳噴火で倒壊・埋没した建物跡の一部が発見される。	XIV区
1989年	平成1年	平成1年4月20日 ～6月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業による温泉源移転に伴う確認調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開園岳噴火で埋没した樹木痕が発見される。	X区
1989年	平成1年	平成1年4月20日 ～平成2年3月29日	指宿市教育委員会	都市計画事業による発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開園岳噴火に伴う土石流跡を確認。日本三代実録の「河水砂 Ⅱ区・Ⅲ区和」を実証する。	
1989年	平成1年	平成1年10月5日 ～12月10日	指宿市教育委員会	都市計画事業区内個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、平安時代の畠跡、建物跡、古墳時代の堅穴住居跡などが発見される。	XⅡ区
1990年	平成2年～3年	平成2年5月11日 ～平成3年7月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の集落跡、土器集中埋蔵所、道跡、平安時代の畠跡、建物跡などが発見される。	I区
1990年	平成2年～3年	平成2年7月4日 ～平成3年9月17日	指宿市教育委員会	下水道事業に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の集落、平安時代の畠が広範囲にあることが確認される。	下水1～28
1991年	平成3年	平成3年6月7日 ～11月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開園岳噴火で埋没した畠跡に隣接して、高床倉庫跡、道Ⅱ区跡、棚田跡などの遺構が発見された。	Ⅱ区
1991年	平成3年	平成3年9月27日 ～11月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業による発掘調査が行われ、古墳時代の堅穴住居跡、馬骨が出土する。	XⅢ区
1992年	平成4年	平成5年2月20日 ～3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、道跡等が発見される。	Ⅸ区
1992年	平成4年	平成4年8月17日 ～平成5年1月26日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、古墳時代の土器集中埋蔵所等が発見される。	H4T1～T5
1992年	平成4年	平成4年10月21日 ～平成5年3月20日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が実施され、平安時代の堅穴住居跡2基が発見される。	H4K1
1992年	平成4年	平成4年7月1日 ～平成5年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、旧河川の続きと平安時代の畠跡が発見される。	Ⅸ区
1993年	平成5年	平成5年4月1日 ～平成6年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、平安時代の畠跡、古墳時代の馬具痕跡、弥生時代の上器集中埋蔵所等が発見される。	Ⅸ区
1993年	平成5年	平成6年10月1日 ～平成7年3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が行われ、平安時代の堅穴住居跡2基が発見される。	H5K2・K3
1994年	平成5年	平成6年1月17日 ～平成7年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(片野田地点)によって、中世の畠跡、平安時代の道跡が発見される。	H5
1994年	平成6年	平成6年4月1日 ～5月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、縄文時代後期の柱穴群が確認される。	Ⅸ区
1994年	平成6年	平成6年7月15日 ～平成7年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(片野田地点)によって、中世～近世の墓、古墳時代の柱穴が発見される。	H6
1995年	平成7年	平成7年9月17日 平成8年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(向古地点)によって、弥生時代終末～古墳時代の祭祀遺構が発見される。	H7
1996年	平成8年	平成8年11月8日 ～平成9年3月31日	指宿市教育委員会	市道拡幅工事に伴い発掘調査が行われ、古墳時代の遺構・遺物が発見される。	
1996年	平成8年	平成8年12月1日 ～平成9年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、貞観16年(西暦874年)の開園岳噴火で埋没した樹木痕が確認される。	H8
1997年	平成9年	平成9年7月1日 ～平成10年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(南丹波地点)によって、古墳時代の柱穴が確認される。	H9
1998年	平成10年	平成10年7月11日 ～平成11年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、古墳時代の柱穴が確認される。	H10
1999年	平成11年	平成11年7月26日 ～平成12年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、道跡が確認される。	H11

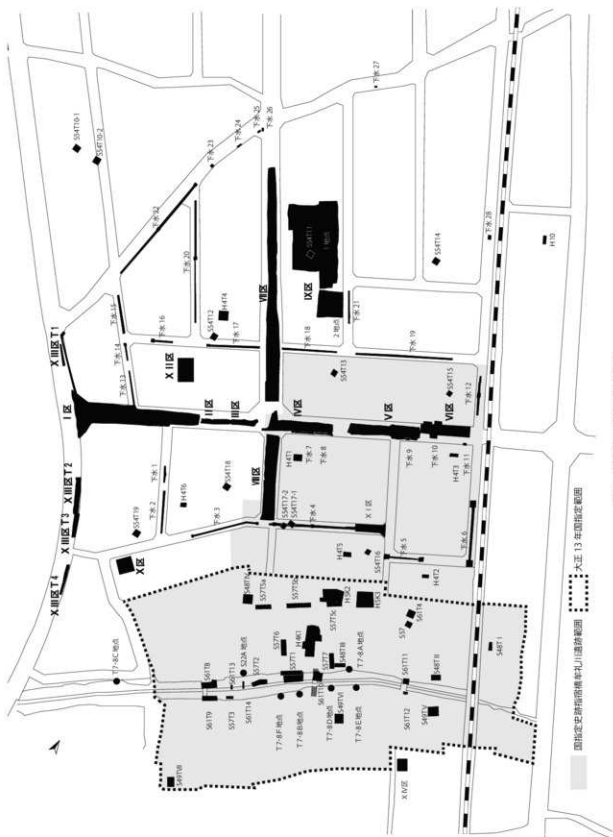


図1 橋本丸遺跡の調査範囲

JR 指宿駅付近に至る範囲まで土地区画整理事業がおこなわれることとなった。この事業に伴い、昭和61年から平成3年度まで、深さ1.5m以上の掘削を伴う道路部分と下水道が敷設される部分において発掘調査がおこなわれることとなった。

橋牟礼川遺跡の調査履歴は表1から表2のとおりである。本報告書に掲載する橋牟礼川遺跡における発掘調査の内容及び検出した遺構遺物等に関しては、図1に示した調査区名を用いた。

なお、本報告書で便宜上用いた調査区名については、下記のように付している。

- ・ I 区～X III 区：昭和54年度～平成6年度の指宿駅西部土地区画整理事業（以下「都市計画事業」）及び博物館建設に伴う調査
- ・ 下水1～下水28：平成2年度から平成3年度の下水道敷設に伴う発掘調査
- ・ 年度+トレンチ番号：大正年間以降に橋牟礼川遺跡及び隣接遺跡での確認調査及び緊急調査（T：大正，S：昭和，H：平成を示す）

第2節 発掘調査の組織

調査主体	指宿市教育委員会	
調査責任者	指宿市教育委員会 教育長	安田 新駒
調査事務責任者	社会教育課長	北方 耕蔵
	社会文化青少年係長	堀口 健一郎
	社会文化青少年係 主事	尾辻 隆
	社会文化青少年係 主事	板松 エイ子
	社会文化青少年係 主事補	肥後 俊明
調査担当者	指宿市教育委員会 鹿児島県教育庁文化財課主査	中村 耕治

第3節 整理・報告書作成の組織

作成主体	指宿市教育委員会	
作成責任者	指宿市教育委員会 教育長	吉元 鈴代
作成担当組織員	指宿市教育委員会 教育部長	鶴窪 誠作
	歴史文化課長	中摩 浩太郎
	主幹兼文化施設管理係長	上村 真史
	文化施設管理係 主査	内山 正人
	主幹兼文化財係長	鎌田 洋昭
	文化財係 主任	西牟田 瑛子
	文化財係 主任	松崎 大嗣
	文化財係 主事	西 恵美里
	文化財係 技師	新垣 匠
文化財係	臨時的任用職員 整理作業員	上田 洋子 清 秀子 鎌田 真由美 境 由希 堂園 綾

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

指宿市は、薩摩半島の南端に位置している。地形的には、山地、台地、平野、湖沼と大きく4つに分類できる。これらの地形は、約10万5千年前から約11万年前に噴火した阿多火山の噴火活動に伴うカルデラ内にほぼ収まる。約5万3千年前には、池田湖の東側に位置する清見岳が大きな噴火を繰り返した。約2万8千年前から約3万年前には、始良カルデラの噴出物である入戸火砕流が現在の台地部に厚く堆積した。

指宿市開闢地区から南洋を臨むと、硫黄島・竹島を目視することができる。この二つの島は約7,300年前に噴火した鬼界カルデラの北縁であり、指宿市から約50kmの距離に位置する。鬼界カルデラから噴出した「幸屋火砕流」は、指宿市新西方の幸屋で発見したことからこの名がついている（宇井1967）。

その後、新期指宿火山群（池田火山）が活発な火山活動を始めた。中でも、約5,700年前の池田火山の活動により、九州最大のカルデラ湖である池田湖が形成された。その噴出物は、指宿市全域の直接的な地形形成の要因となっている。池田火山が噴出した直後に松ヶ窪、池底、鰻池、成川、山川港が連続して噴火し、「爆裂火口」と呼ばれる一直線上に並ぶ火口を形成した。

さらに、池田火山の南西に位置するトロコニーデ型の開闢岳は、約4,700年前から約3,700年前に活動を始めた。開闢岳噴出物のうち、旧指宿市域では主に4回分の開闢岳噴火火山灰層を確認することができる。有史時代の噴火についてはいくつかの史料に記録されており、西暦874年（以下「874年」と表記）と885年の噴火とそれに伴う災害の状況等が『日本三代実録』に記録されている。特に、874年の開闢岳噴火に伴う固結火山灰層は広く市域を覆っている。

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は、指宿市街地に所在し、指宿市街地に並行し南北に走る山塊の山裾か



図2 指宿市の位置

ら海岸へ傾斜する海拔7m～20m程度の緩やかな火山性扇状地上に位置する。

扇状地上には、山裾を水源とする複数の河川が海岸に向かい東流するが、いずれも大地を深く削り、深さ数m～10数mに達するV字状の谷を形成している。大正13年に国史跡に指定された範囲の中央にも、上記のようにして形成された橋牟礼川が流れるが、V字状谷の側面には遺物包含層が露出しており、古墳時代の成川式土器や弥生土器、まれに縄文土器が表採される。

第2節 歴史的環境

(1) 旧石器時代

水追遺跡 指宿市の北西部にある標高401mの清見岳からゆるやかに北東へのびる山裾の東側端部に位置する。眼下に鹿児島湾を見下ろす標高約126m

の尾根の東南縁辺部で発見された。調査は平成5年度に鹿児島県教育委員会が行ったサンオーシャンリゾート開発に伴う分布調査で周知化された。平成8年には指宿市教育委員会により広域営農団地農道整備事業に伴う確認調査が行われ、縄文時代早期の遺構や遺物を確認した。発掘調査は平成11年度から14年度まで実施され、地層は18層41細分層を確認している。第1調査区では、第5・6層から縄文時代早期の集石や舟形配石炉、落し穴、柱穴等の遺構が確認された。また、岩本式土器や石皿、磨石、石鏃等の遺物が出土した。第7層からは縄文時代草創期の集石や舟形配石炉、落し穴、柱穴等の遺構が検出された。また、岩本式土器の古段階の貝殻文系

円筒形土器が出土し、「水迫式土器」と命名された。また、後期旧石器時代に位置づけられる遺構が確認されている。これらの遺構は、幅16m前後の狭い尾根の平坦部に集中していた。竪穴状遺構、道跡、炉跡はいずれも互いに重なりをもたず、同じ種類の遺構は切り合う状況がある。これは、ここで生活した人々が集落内の施設配置を考えた上で、空間を意識的に利用し回帰的な生活を行っていた結果と考えられる。

小牧3A遺跡 指宿市北部の標高65mの阿多カルデラの北端丘陵に立地する。国営畑地総合土地改良事業に伴って調査を実施している。旧石器時代の出土遺物は、ナイフ形石器文化期と細石刃文化期に分

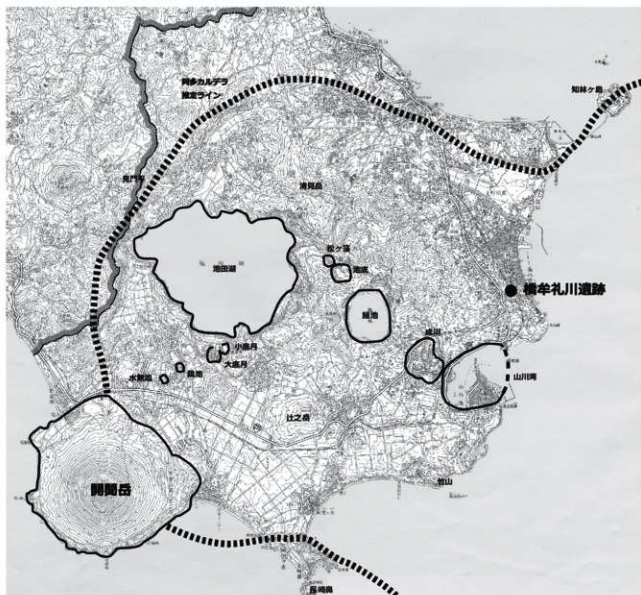


図3 指宿市の火山地形



図4 指宿市南部の遺跡地図

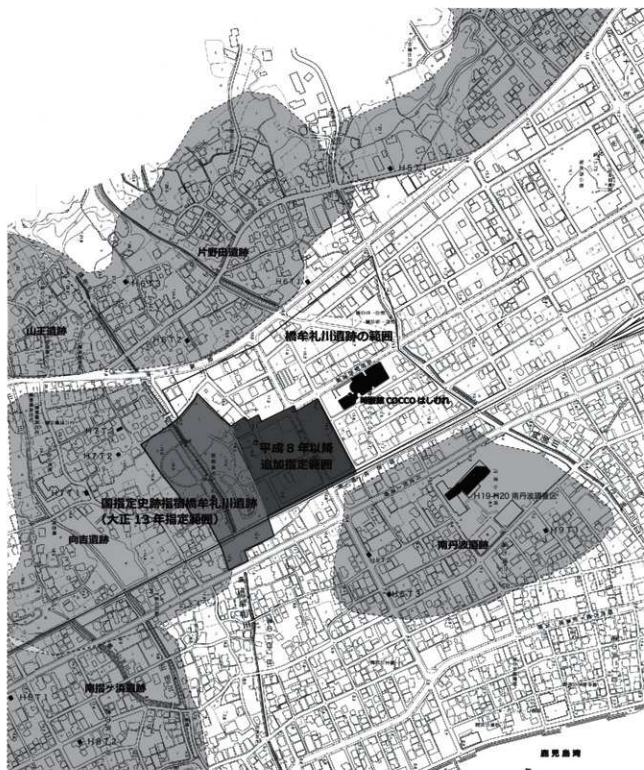


図5 橋牟礼川遺跡の範囲と周辺遺跡

けられ、大きく2つの石器文化期があったと考えられる。先行するナイフ形石器文化期の遺物は、ナイフ形石器98点・台形石器112点、薄片尖頭器22点、両面加工尖頭器5点、三稜尖頭器20点、スクレイパー18点、石核50点などがみられる。細石刃文化期の遺物は細石刃、細石核、楔形石器などが出土している(長野2005)。

(2) 縄文時代

岩本遺跡 上記の小牧3A遺跡と小河川で侵食された狭小な谷によって隔てられた断崖海岸の先端部に立地する。岩本地区県営畑地灌漑事業に伴って発掘調査が実施されている。発掘調査では岩本1～4類土器を中心に隆帯土器や押型土器、打製石礫、磨製石礫、石匙、局部磨製石槍などが出土している。隆帯土器は、口唇部を巡るように口唇部とその下に隆帯を貼り付け貝殻で文様を付けるものと、短い隆帯を縦方向あるいは横方向に貼り付けるもの、胴部に1本隆帯を巡らし貝殻で文様を付けるものがある。岩本1～4類土器はすべて円筒深鉢形で、平底になる。最大径は口縁部にあり、底部から口縁部にかけて開きながら直線的に立ち上がる形を呈する(長野2005)。

大渡遺跡 山川湾を見渡す台地状に立地する。指宿式や市来式土器が出土する縄文後期の遺跡であり、昭和32年の第一次および第二次の調査で4～5体分の縄文人骨が出土している。出土物は市来式土器が多く見られる。なかでも、奄美群島で見られるような注口土器と尖底土器が出土していることが特徴的で、南西諸島との関連性をうかがえる資料として注目される。

南摺ヶ浜遺跡 指宿市十二町及び湯の浜に所在する。遺跡は、指宿市街地海浜部に面した標高8mの海岸段丘上にあり、山裾から海岸へと傾斜する火山性扇状地の端部に位置する。橋牟礼川遺跡の南東約500mの位置である。平成5年に社員寮建設予定地の発掘調査において、宇宿上層式土器が出土した。宇宿上層式土器は、トカラ列島中之島付近を北限に沖縄本島まで分布する土器である。本遺跡で出土した宇宿上層式土器が、南西諸島からの搬入品か、当地で製作された土器かにわかに判別し難い。しかし、土器の胎土に着目すると、南西諸島の宇宿上層式土

器に見られる白色粒子(石灰あるいは貝殻片?)がほとんど含まれていない点を重視すれば搬入品である可能性は低いと考える。いずれにせよ縄文時代晩期に南西諸島との文化交流があったことを物語る遺物であり、南部九州本土における南島土器の存在の可能性を大きく広げた発見となった。今後の資料の増加が期待されるとともに、大渡遺跡の尖底土器の存在も合わせて注意すべき資料である。

(3) 弥生時代

横瀬遺跡 指宿市西方横瀬に所在し、指宿市北部の台地上に位置する。県営畑地総合土壌改良事業に伴い、発掘調査が実施されている。発掘調査では方形の竪穴住居跡が切り合う形で12基検出されている。2号住居からは多量の土器が出土しており、弥生時代後期に位置づけられる高付式土器に加え、多条突帯を有する長頸壺などが確認できる。また、これらの土器に共伴する形で、小型仿製鏡が出土している。

南丹波遺跡 指宿市十二町に所在し、橋牟礼川遺跡に東隣する遺跡である。丹波小学校の校舎建て替えに伴い発掘調査が実施された。発掘調査では花卉形住居跡を含む竪穴住居跡を14基確認した。これらの住居跡は2つの群に分かれており、その間には土器集中廃棄所が確認されている。土器集中廃棄所の出土遺物を見ると弥生時代終末期～古墳時代前期に位置づけられる甕や壺、高杯などが出土している。南丹波遺跡は橋牟礼川遺跡と隣接している集落であり、橋牟礼川遺跡が古墳時代後期を中心とする建物跡が多く検出されていることから、南丹波遺跡から集落の中心が橋牟礼川遺跡へ移行した可能性も考えられている。

(4) 古墳時代

成川遺跡 指宿市山川成川に所在し、成川マール西部の山裾から鳴川へ向かって下る傾斜部に位置する。弥生時代から古墳時代にかけての埋葬遺跡である。昭和32年に成川浜埋め立てのための土取り作業中に遺跡が発見され、昭和33年に国の文化財保護審議員によって学術調査が行われた。それにより、200体を超える人骨に加え、おびただしい量の土器や鉄製品が確認された。埋葬の形態は土墳墓と呼ばれるものであり、これらの埋葬施設の上部や周辺

に上記出土遺物が供献される形で出土した。また、土壌墓周辺には立石と呼ばれる板石が立てられた施設も確認されている。

令和元年度から鹿児島女子短期大学と鹿児島国際大学による発掘調査が実施されており、文化庁が調査した調査区の南部にも埋葬範囲が広がることが確認された。また検出された土壌墓は、弥生時代中期後半に噴火した暗紫コラを上層から掘り込む形で確認されている。

南摺ヶ浜遺跡 立地は上記の通り。ホテル社員寮の建設などに伴って調査が行われ、成川遺跡と同様の土壌墓群が広がることがわかった。その後、南摺ヶ浜遺跡の範囲内で道路新設工事が計画され、鹿児島県によって調査が行われた。この調査では、土壌墓や立石に加え、土器棺墓や円形周溝墓が確認された。また、墓域からは多くの供献土器や鉄製品が出土した。

弥次ヶ湯古墳 弥次ヶ湯古墳は、指宿市十町敷領一帯に広がる敷領遺跡地内から発見された。遺跡は山裾から海岸に向けて緩傾斜する海拔4～6mの火山性扇状地の末端部にある。平成8年の公営団地建設に伴う発掘調査に伴い、直径約17.5mの円墳が検出された。古墳は、現地表面から、わずか30cm前後の所に埋もれており、その大部分は、火山灰に埋没していた。調査区の西壁に接するかたちで墳丘の約1/2を確認することができた。残りは、生活道路となっている団地内の市道の下に隠れていたため、発掘できなかった。そこで、地下レーダー探査で地形を把握し、円墳であることを確認した。残存する墳丘の高さは最大で約1.3m、周溝は、幅2m前後、深さ約40～60cmで、埋土からは、甕、鉢、壺、高杯、埴、ミニチュア土器など800点の土器片が出土した。埋葬施設については検出し得なかったが、既に削平を受けた部分にあった可能性も考えられる。

弥次ヶ湯古墳の築造時期は、出土遺物の年代観より、5世紀後半から6世紀前半と推定される。古墳の「空白地帯」と呼ばれていた薩摩半島からの円墳の発見は、古墳分布の限界線を書き換えると同時に、古墳時代の薩摩半島の社会像に再考を迫る契機となった。

(5) 古代

敷領遺跡 指宿市十町に所在し、山裾から海岸に向けて緩傾斜する海拔4～6mの火山性扇状地の末端部にある。平成8年の公営団地建設に伴う発掘調査に伴い調査が行われた。発掘調査によって、貞観16年3月4日(西暦874年3月25日)の間聞岳噴火によって埋没した水田跡が検出され、橋本礼川遺跡と同様の火山災害遺跡であることが確認された。この時の火山性噴出物は紫コラと総称され、この下層からは掘立柱建物跡6棟、総柱の高床倉庫跡1棟、竪穴住居跡1基、杭列跡などの遺構群が確認されている。遺物は、古墳時代の成川式土器の伝統を色濃く残した甕形土器に加えて、須恵器、土師器、転用硯、「備」・「智」と書かれた墨書土器、鉄製品等が出土している。鉄製品の中には、鉄製甲冑と呼ばれるものもあり、その形態と鉄製品表面に残る有機質の形状から亀卜に関連する遺物であると考えられている。

平成7年度以降の開発に伴う調査や、学術調査によって中敷領地区では、建物遺構2基が検出されたことから、一帯に居住域が広がっている可能性が指摘されている。

平成26年度には、中敷領地点において3号建物跡の発掘調査がおこなわれた。この建物は間聞岳噴火によって埋没した状態で検出され、建物の中央付近には煙道をもたない造り付けのカマドや板石をコの字に組んだ石組炉などの調理施設が検出された。

平成30年度の調査では、3号建物跡の東側から幅10mを超える2状の溝跡が確認されている。溝内は紫コラ火山灰層で埋没しており、火山灰下層埋土はグライト壌が確認された。この溝跡は居住域を区画する区画溝である可能性もある。

宮之前遺跡 宮之前遺跡は指宿市西方に所在し、宮ヶ浜の西側の台地上に位置する。県営畑地帯総合土地改良事業に伴い、昭和55・56年に発掘調査が行われた。この調査によって、竪穴建物群やその周囲に土器集中遺構が確認され、台地縁辺部に集落が存在することがわかった。出土遺物は成川式土器に加えて、奈良時代の須恵器や土師器が出土しており、古墳時代から古代にかけての集落であることが想定

できる。

また、平成30年度に実施された発掘調査では、上記集落跡の南側で、紫コラ火山灰に直接被覆された畠跡が確認され、宮之前遺跡も橋牟礼川遺跡や敷原遺跡同様、火山災害遺跡であることが確認された。

(8) 中世

松尾城跡 松尾城は、指宿市西方字城ヶ崎とその周辺を含めた丘陵上のエリアに所在する山城である。城の東側は絶壁となっていて、錦江湾に面しているため、海城の性格もあわせもつといわれている。松尾城は、他の山城同様に複数の曲輪から成り立っており、どの曲輪の頂上も平坦に作り出されている。国道226号はちょうど曲輪同士を区切る空堀を通っており、また、JR指宿枕崎線が曲輪の間を走っている。城内には防御用の上塁や武者走り、武者揃いといった施設が名残をとどめ、大手門と思われる場所も推定されている。城の築城時期は、現段階でははっきりとはしていないが、指宿氏以来、指宿を治める武将が松尾城の城主となった。鎌倉時代から室町時代にかけての城主は指宿氏であったが、指宿を大隅守護の島津氏が領有してから、松尾城の城主は次々と変わっていく。

応永16年(1409)、指宿を領有していた島津元久が城代として阿多時成を松尾城に封じ、指宿氏は退去。その3年後には奈良氏が城番として入っている。しかし、奈良氏は島津久豊に倒されてしまう。文明7年(1475)には、島津久継が松尾城に地頭となったが、島津氏が内紛を始め、文明8年(1476)島津久継らと対立していた島津忠昌が、彌寝重清らに松尾城を攻め落とさせ、指宿は彌寝氏の領地となった。

その後、指宿は再び島津忠昌の孫である勝久の領地となり、大永6年(1526)に地頭として伊地知重弦がおかれ、その後、額氏の地頭を務めていた額娃兼洪が、天文4年(1535)に指宿を攻め、家来の津曲兼任を地頭として指宿に派遣。これ以降、天正16年(1588)に額娃氏が守護職の島津氏によって他の領地に移動させられるまで松尾城の城主は額娃氏の家臣が務めた。

(9) 近世

今和泉島津家墓所 指宿市北部に位置する岩本地区に所在している。墓地は東側と南側を市道に挟まれており、西側には南側市道につながる里道が通っている。東側市道の東には六地藏塔が3基設置されている。また、今和泉島津家墓地の南側斜面上の狭い平坦地には、墓地が多数置かれており、今和泉島津家の家臣及びその子孫の墓が多く含まれている。今和泉島津家の元となる和泉家は、島津家4代当主忠宗の子、忠氏を初代とし、2代忠直、3代氏儀、4代久親、5代直久まで続いた。直久が応永24年(1417)の第二次川辺戦争で戦死したため断絶した。延享元年(1744)、島津継豊が弟の忠卿に、327年ぶりに、断絶していた和泉氏を継がせ、今和泉家と称した。忠卿は、寛保2年2月12日に誕生した島津吉貴の次男である。同年12月に、指宿郡の内、小牧村、岩本村、西方村、額娃郡の内、池田村、仙田村を割って今和泉郷とし所領地とした。また、佐多郷柄山、伊作郷田尻村、飯野郷坂本村、串良郷岩広村を追加し、石高1万5093石となった。

今和泉家は、初代忠卿、2代忠温、3代忠厚、4代忠喬、5代忠剛、6代忠冬、7代忠敬、8代忠欽と続いた。今和泉島津家墓所では、初代から6代までの当主およびその親族が祀られている。墓石は五輪塔、宝篋印塔、家祠型墓石がみられる。近年の墓石の型式学的研究や源姓や源氏嫡流系図の再検討により、墓所内の墓石配列および基盤整備には複数のグルーピングができることが明らかになっている。

文献

- 宇井忠英 1967「鹿児島県指宿地方の地質」『地質学雑誌』73巻10号 pp.477-490
 長野真一 2005『岩本遺跡』『先史・古代の鹿児島(資料編)』pp.63-65
 長野真一 2005『小牧3A遺跡』『先史・古代の鹿児島(資料編)』pp.66-69

第3節 基本層序

橋本礼川遺跡の地層は、基本的に池田カルデラ噴出物と開間岳噴出物とそれらに挟まれる扇状地堆積物から形成される。ここでは、1991年に確認された橋本礼川遺跡の標準層位をもとに述べる。

第1層 黒褐色土層（表土）

耕作土。都市計画事業によってシラスや砂利、礫層がある場合がある。また土地利用の履歴により第1層の厚さや性状に差異が認められる。重機による掘削痕跡が下層に及ぶ場合がある。

第2層 暗灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

第3層 黒灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

第4層 黒色土層

中世（鎌倉～室町時代）の遺物包含層である。黒ボクのような腐食土が発達している。厚さは20cm～50cmと厚く、宋代の青磁・白磁や糸切り底の土師器が出土する。内黒土師器も出土していることから、上限は平安時代後期まで遡る可能性がある。紫コラ（貞観16年、仁和元年の開間岳噴出物）の堆積後の生活が再開される時期を考える上で重要な層である。

第5層 a 紫灰色火山灰層（紫コラ）

平安時代に堆積した開間岳噴出物層である。平安時代の旧地表面を覆う火山灰層の上位に存在することから、下位の火山灰層を貞観16年に、上位の第5a層を仁和元年の開間岳噴出物に対比させる説もあるが、近年の地質学的調査の成果から、下位と上位の噴出物は一連の火山活動に伴うものであるとする考えがある。

第5層 b 紫灰色火山灰層二次堆積物

次に説明する紫灰色火山灰堆積物 第5層 c（874年開間岳噴出物）の二次堆積層で、水流作用で形成された層と考えられ、砂が多く混在し、クロスラミナが発達する。

第5層 c 紫灰色火山灰層（紫コラ）

874年の開間岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて強く固結し、フオール・ユニットが認められる。第5層 c の最下部には、2cm以下の礫が2～5cmの厚さで堆積するが、これは貞観16年の火山活動に伴う最初の降下物とみられる。第5層 c の厚さは、約30～80cmであり、場所によっては一時堆積物を侵蝕して、クロスラミナを形成する堆積層が観察されることがある。

第6層 暗オリーブ褐色土層

奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は874年開間岳噴出物層に直接被覆され、旧地表面の地形をそのままに留めている。第6層は標準層位では、a, b, cの3分層が可能である。a層は腐食が進行しており、特に畠跡周辺では黒色が強くなる。b層はオリーブ褐色を呈するが、河川跡付近では砂層となる場合がある。c層は7層青コラの二次堆積層である。

第7層 青灰色固結火山灰層（青コラ）

7世紀第4四半期に比定される開間岳噴出物層で、下部には火山活動の初期に降下したと考えられるスコリアが2～5cm程度堆積する。さらに、暗褐色土層を5～10cm程度挟み、1～2cm程度のスコリア堆積が部分的に見られることから、火山活動の小休止期があったと考えられている。

第8層 橙色土層

古墳時代に相当する扇状地堆積物層であり、5～30cmほど堆積する。層中には、スコリアのブロック（開間岳の7世紀第4四半期の噴出物堆積層と休止期を挟んで下位に存在する初期の噴出物）や、砂層、池田湖起源の噴出物のブロック、池田湖降下軽石等を含む。古墳時代土器などのローリングを受けたものが検出される。

第9層 暗褐色土層

古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田カルデラ降下軽石を若干含む。やや粘質であり、厚さは50cm～1m程度である。第9層中から遺構が掘りこまれた場合は土色などからの判別が困難であり、下位層の第10層に達している場合は、第10層上上で検出できる。第9層の形成は、出土須恵器から5世紀から6世紀代の集落形成による地層の攪乱と、複数回にわたる河川の氾濫などによる堆積などの要因が複合しているとみなされる。

第10層 赤橙褐色粘質土層

弥生時代中期～後期の遺物包含層で、いわゆる山ノ口式土器などが出土する。基本的には層状地堆積層で、池田湖降下火山灰のブロックを含む。第10層の中間から砂層ブロックが検出されることがある。第9層から掘り込まれた遺構は、通常、第10層に到達するため、第9層中に混在する弥生土器は第10層に包含されていたものがあると考えられる。

第11層 暗紫色火山灰層（暗紫コラ）

弥生時代（山ノ口式土器段階）に降下した開間岳噴出物堆積層である。強く固結せず、ブロック状に堆積していることが多い。層厚は0～5cm程度である。山ノ口遺跡、成川遺跡など、この火山灰が山ノ口式土器を被覆していた事例がある。

第12層 明褐色土層

弥生時代前～中期にかけての遺物包含層で、第13層と色調は類似するが、粘性が強く粘度は小さい。

第13層 暗褐色小石混シルト質土層

主に、刻目突帯土器を包含する層で、小石が混じる。

第14層 赤褐色小石混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含む。黒川式土器が主体となる。

第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含むが、縄文時代後期の遺物が出土することがある。

第16層 黒褐色橙色バミス混シルト質土層

主に、縄文時代後・晩期の遺物を含む。縄文時代後期の上加世田式土器、市来式土器などが確認されている。第14層から第16層までは、場所により欠落する場合があるが、第16層はコンスタントに確認することができる。

第17層 暗青灰色火山灰層（黄コラ）

縄文時代後期の開間岳噴出物で、上半は黄色細粒火山灰、下半は黒灰色スコリア及び粗粒火山灰の二層から構成される。ブロック状に残存し当時低い部分には10～15cm程度の層厚を確認することができる。成川遺跡などでは、「指宿式土器」を被覆していた事例がある。

第18層 灰褐色砂質土層

縄文時代後期遺物包含層で「指宿式土器」を主に包含するが、同層より「阿高式土器」が出土している。下部は、池田湖降下軽石を含む砂層に変化し、池田湖火山灰層の二次的な堆積層となる。

第19層 池田湖火山灰層

灰色～黄灰色を呈する層で、約5,700年前の池田カルデラ形成期の火山活動に伴い堆積したものである。軽石を多く含み、軽石には角閃石が多く含まれる。同層が、この地域の地形基盤を成すものと考えられ、発掘調査では、現在のところ同層を除去した事例はない。指宿市北部の横瀬遺跡では2m以上の層厚を呈する。橋牟礼川遺跡付近では、池田火砕流堆積物は30m以上に達すると考えられている。



	第1層 表土 (現代耕作土)
	第2層 暗灰色土層
	第3層 黒灰色土層
	第4層 黒色土層
	第5層 a 紫灰色火山灰層 (紫コラ)
	第5層 b 紫灰色火山灰層二次堆積物
	第5層 c 紫灰色火山灰層 (紫コラ)
	第6層 暗オリーブ褐色土層
	第7層 青灰色固結火山灰層 (青コラ)
	第8層 褐色土層
	第9層 暗褐色土層
	第10層 赤褐色粘質土層
	第11層 暗紫色火山灰層 (暗紫コラ)
	第12層 明褐色土層
	第13層 暗褐色小石混シルト質土層
	第14層 赤褐色小石混シルト質土層
	第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層
	第16層 黒褐色褐色バミス混シルト質土層
	第17層 暗青灰色火山灰層 (黄コラ)
	第18層 灰褐色砂質土層
	第19層 池田湖火山灰層

図6 橋牟礼川遺跡の基本層序

第3章 IV区の調査

第1節 遺構

IV区の調査は昭和61年6月1日から平成元年1月30日まで実施され、Ⅵ区・Ⅶ区の調査と同時進行で進められた。

調査区は、指宿駅西部土地区画整理事業に伴い設置が計画された都市計画道路のうち、国道226号線から海手に向けて東西方向に新設される幹線道路予定地の中央辺りに設けられた。

この調査では調査区東端部分で土器集中廃棄所を検出した。隣接する下水道⑧TRにおいても連続し

た土器集中廃棄所が検出されている（『橋牟礼川遺跡Ⅲ』）。この土器集中廃棄所は、長軸で15mを測り、短軸は全体を検出していないため、不明だが、調査区内では8.5mが検出されている。

出土遺物量は膨大であり、現在は博物館内に収蔵されている。出土遺物のほとんどが、九州南部の古墳時代土器様式である成川式土器であるが、弥生時代中期に位置づけられる壺や甕の出土もみられる。石器や軽石製品、土製品が含まれる。須恵器は小片が1点のみ確認されている。

土器集中廃棄所の廃棄単位は図面を見る限りいくつかの単位を抽出できる可能性があるが、本報告書

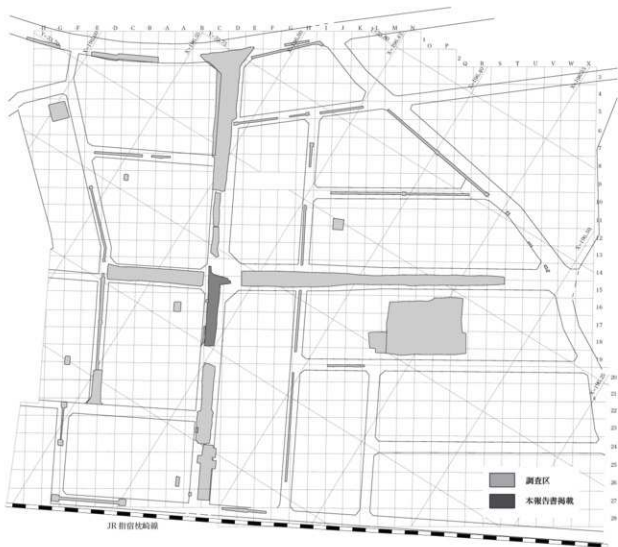


図7 調査区配置図

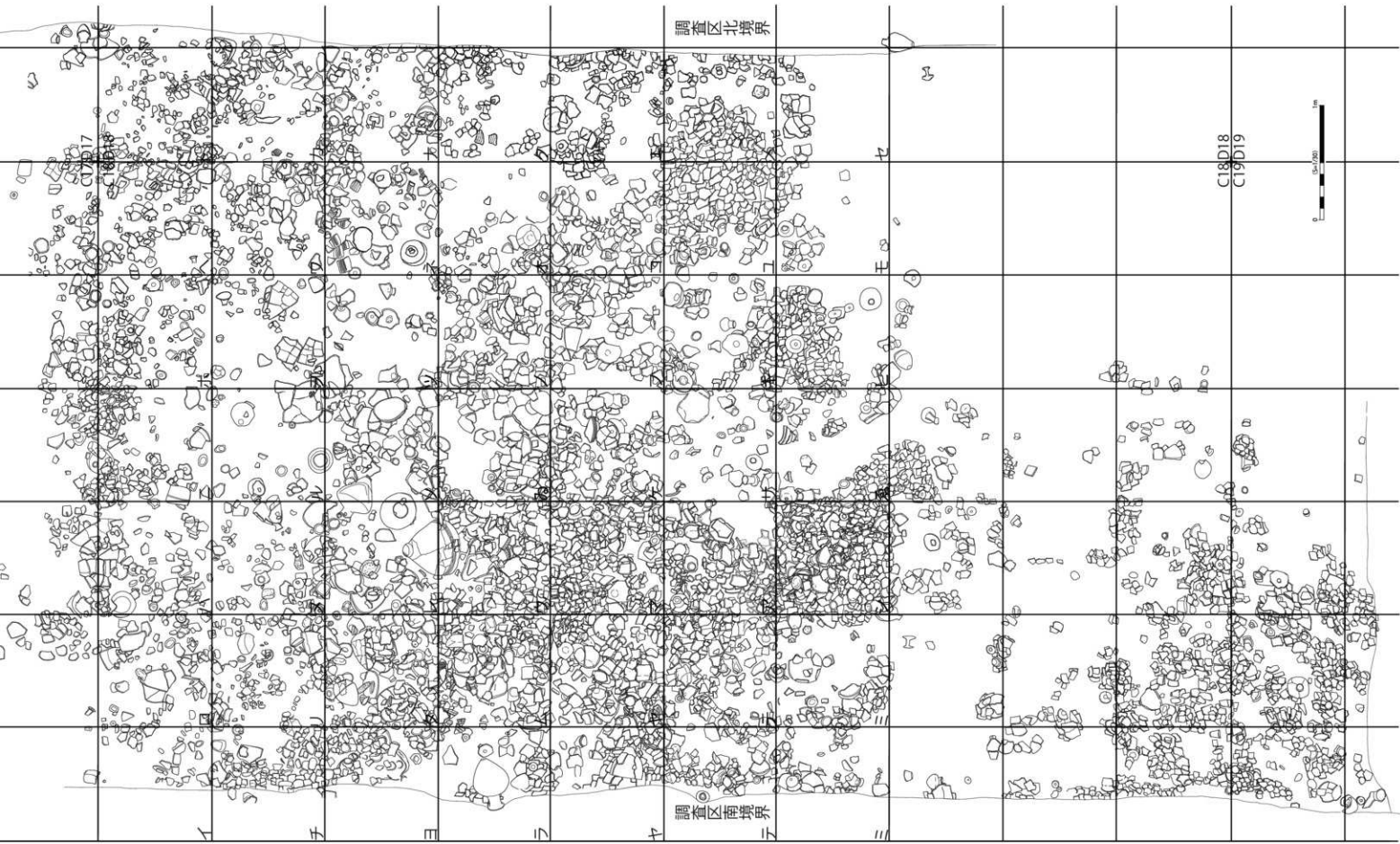


图8 土器集中廃棄所(全体)



図9 土器集中廃棄所平面図1

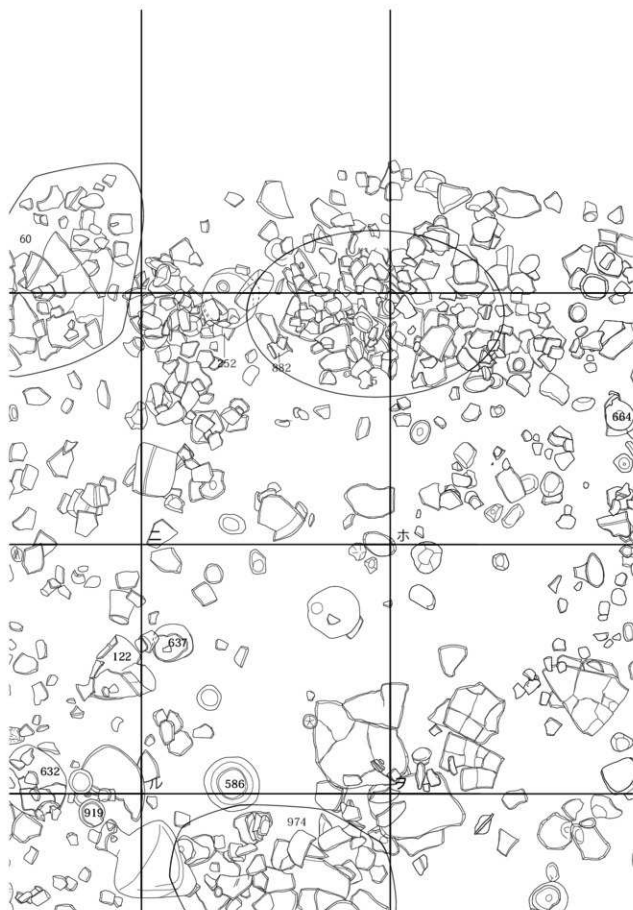


図10 土器集中廃棄所平面図2

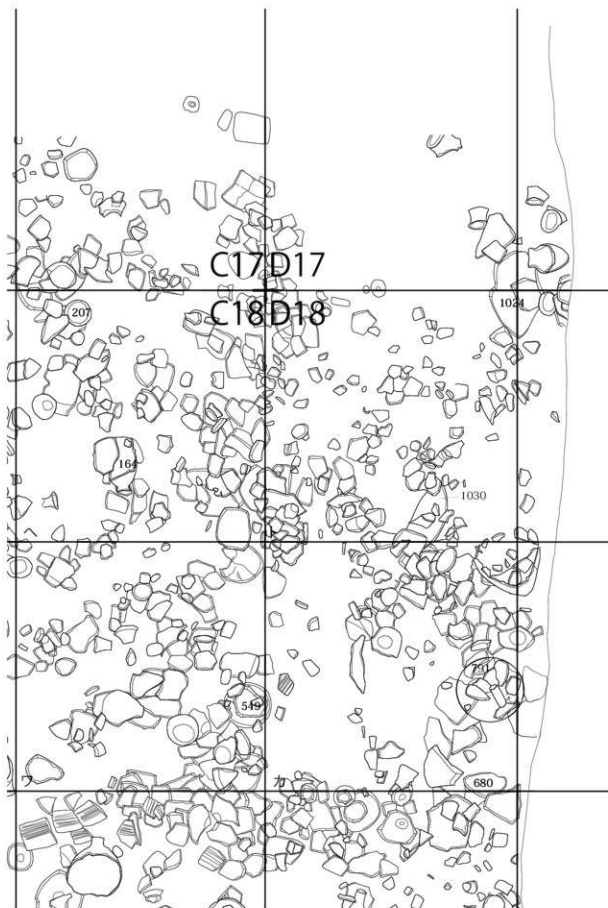


図 11 土器集中廃棄所平面図 3

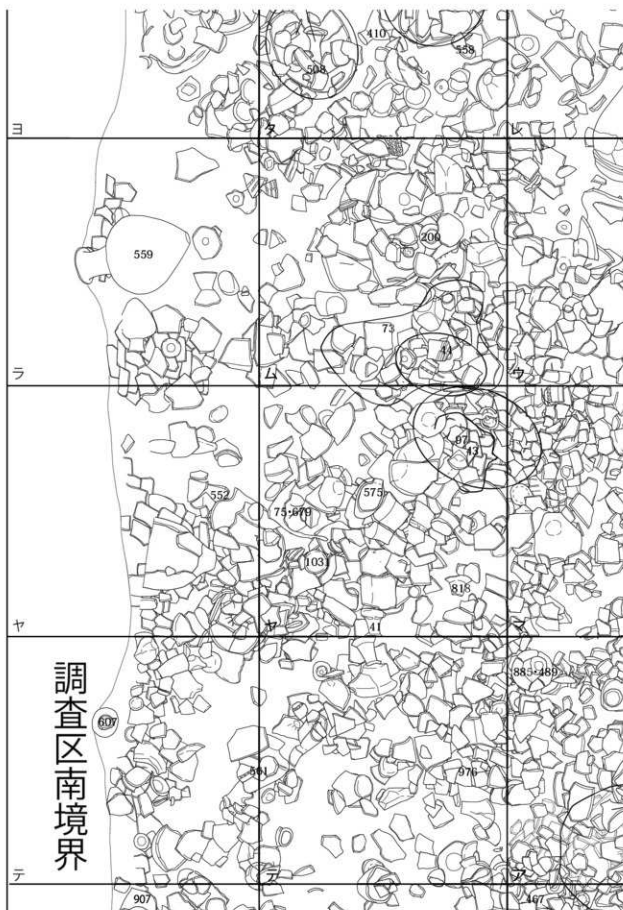


图12 土器集中喫聚所平面図4

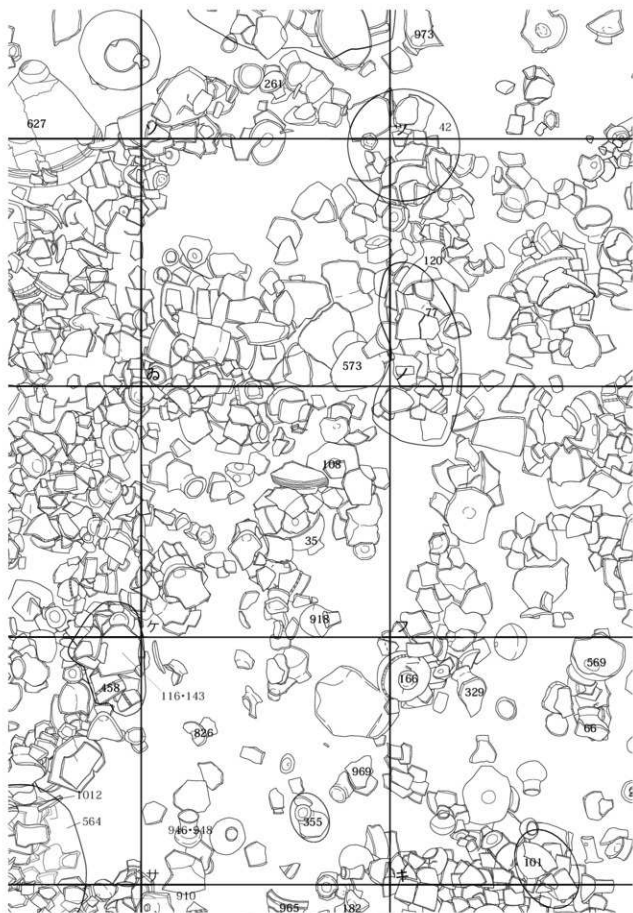


図13 土器集中麻粟所平面図5

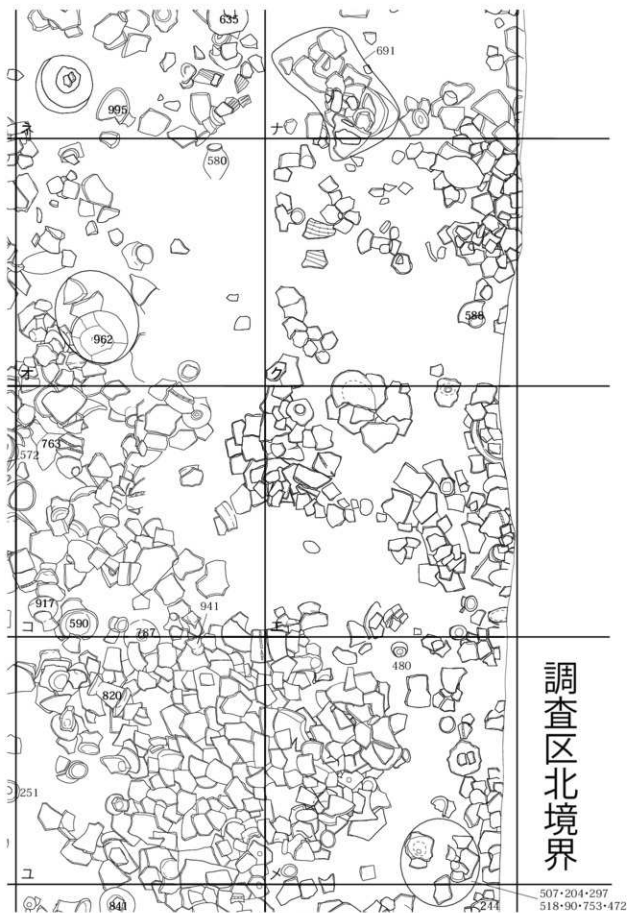


図14 土器集中廃棄所平面図6

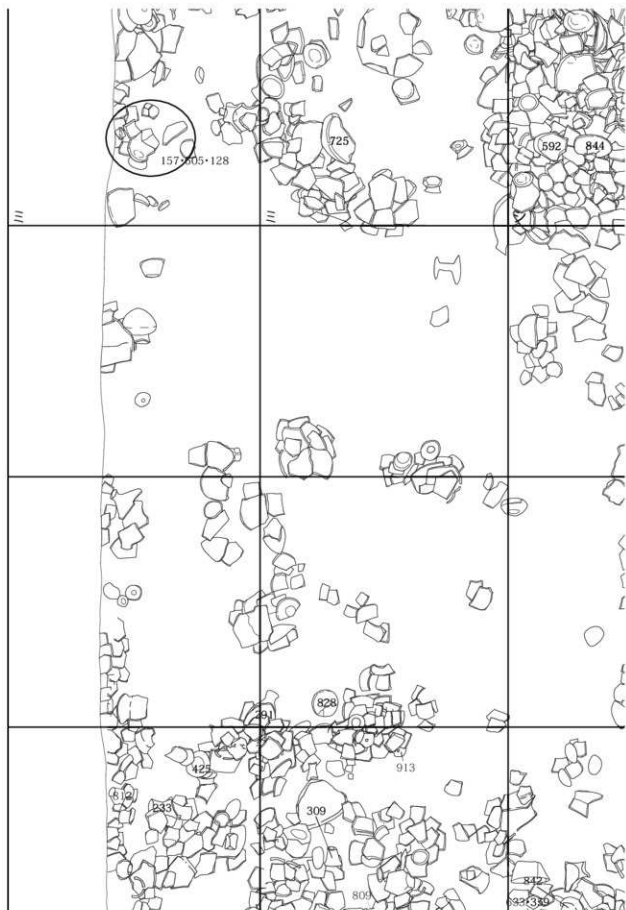


図15 土器集中廃棄所平面図7

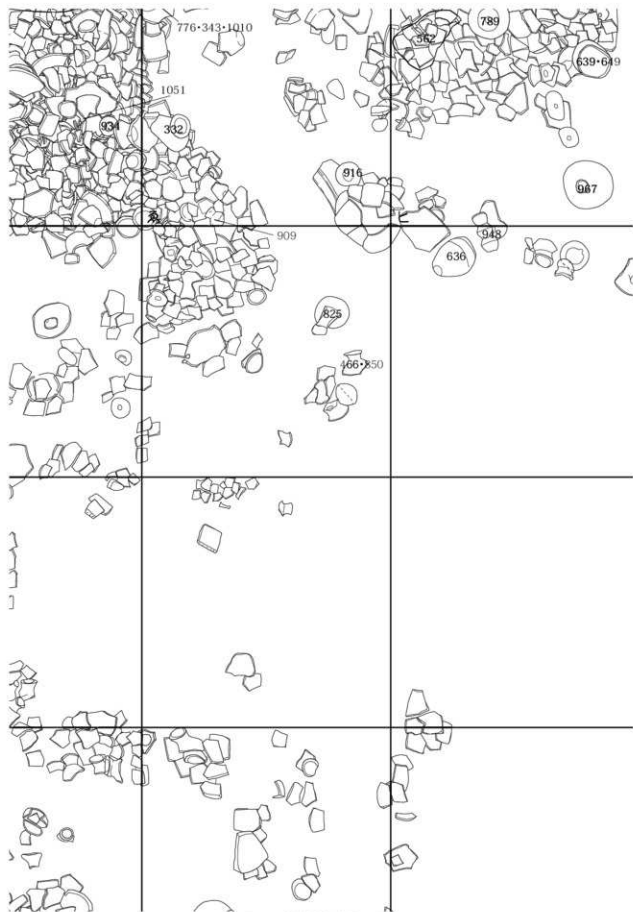


图 16 土器集中廃棄所平面図 8

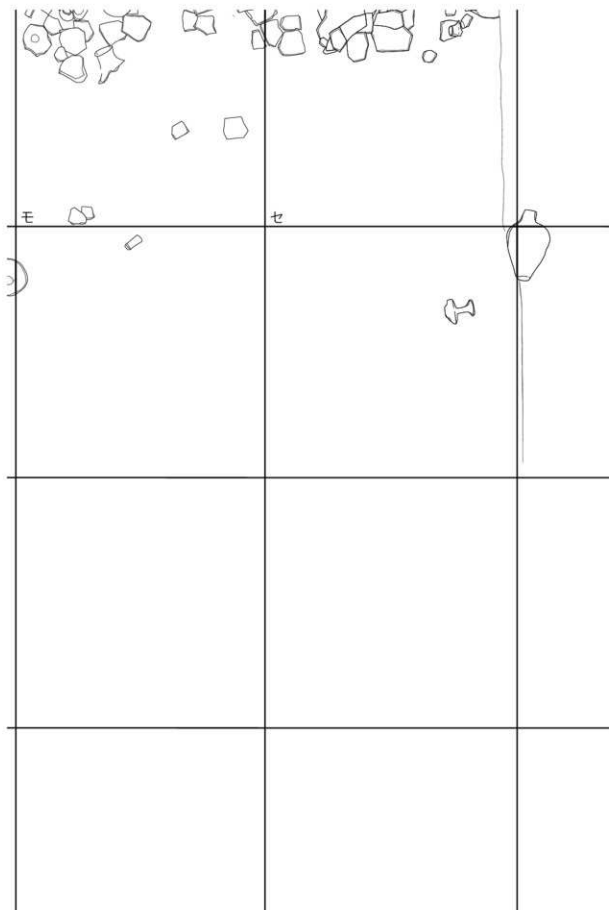


図17 土器集中廃棄所平面図9

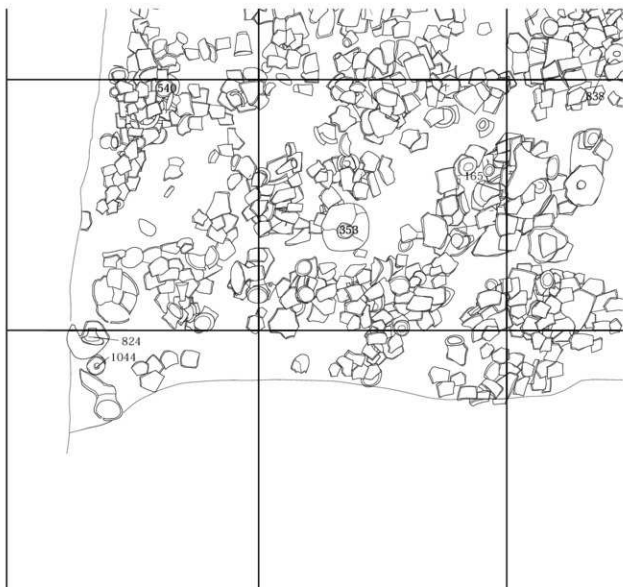


図18 土器集中廃棄所平面図10

では遺物の詳述に務める。掲載遺物をピックアップする際の基準として、遺物の部位がわかるもの、甕の脚部など個体数を表すもの、他の遺物と比較して掲載することが望ましいと判断したもの、という項目を定めた。

調査区東端部で検出された土器集中廃棄所は、記録および取り上げ時に基準杭を中心に1m×1mのグリッドが作成されており、特に遺物が集中する部分については西側から「いろは順」でグリッド名が付されている。遺物の出土状況を見ると、すべてのグリッドに一樣に堆積しているわけではなく、グリッド「ラ・ム・ウ・ゐ・ノ・ヤ・マ・ケ・フ・テ・テ」には多量の土器が重層的に堆積していた。また、散

発的にグリッド「シ」やグリッド「ヒ」などでは図面上のまとまりを確認することができる。整理作業時には、接合が終わっているものについては、優先的に復元、図化作業を進めた。また、博物館開館時に常設展示室の展示品として保管・公開されている資料もあった。それらの遺物については、平成28年に刊行した『橋牟礼川遺跡総括報告書』に掲載している。

それ以外の出土遺物については、各グリッドの一括遺物の接合および抽出作業を行い、掲載可能なものについて仮番号を付けて整理作業を進めた。

平面図には遺物取り上げ番号が明記されているものがあ、遺物の注記にも取り上げ番号が記されて

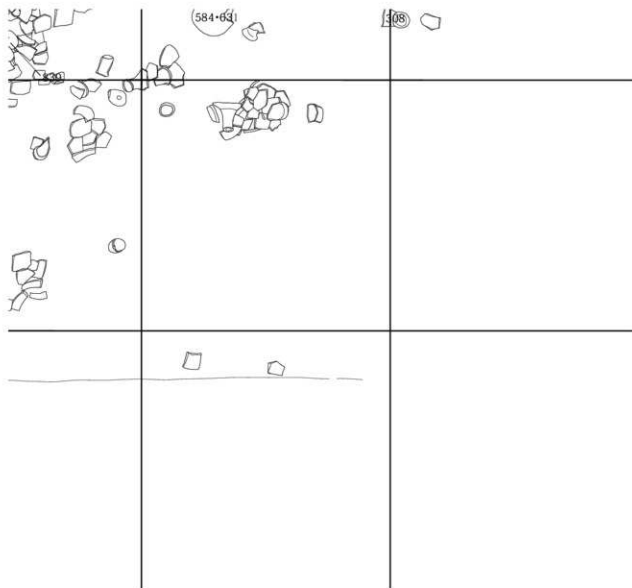


図19 土器集中廃棄所平面図11

いるものがあつたため、それらの遺物については観察表内で記載した。また、平面図に取り上げ番号が記され、図化できるものについては極力掲載できるよう努めた。

さらに、発掘調査時に廃棄単位が抽出でき、一団体と判断できるものについて、グループ分けがされており、それらの所見も参考にしている。

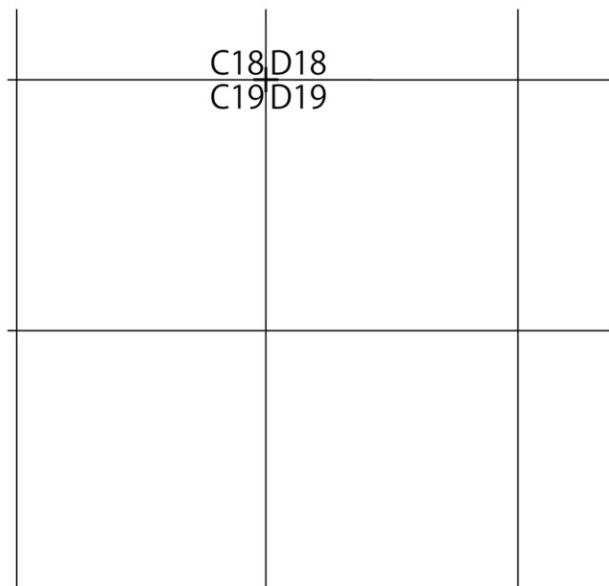


圖 20 土器集中廃棄所平面図 12

第2節 遺物

(1) 甕

1から13は弥生時代中期に位置づけられる甕である。1は口縁部が外方へ突出し、口唇部にくぼみをもつもので、口縁部下に突帯を有する。4は頸部下に3条の突帯を有し、頸部内面が突出する。5は胴部が球胴状に張り、口縁部が先細りするもので、内外面ともハケ調整がみられる。6は口縁部が頸部付け根から先端に向かって先細りするもので、口縁部下には2条の突帯を有する。7は小型の甕で、口縁部内面が内側に大きく突出する。8はくの字に屈曲する頸部を持つ甕で、頸部下に3条の突帯を有する。9は大型甕と考えられ、くの字に強く屈曲し、口唇部は丸みをおびる。

11・13は直線的に立ち上がる口縁部外面にコの字の突帯が貼り付けられる甕である。14から115は古墳時代前半期に位置づけられる甕である。口縁部がくの字に屈曲するものから、その屈曲が徐々に立ち上がり、直口に近いものまでが該当する。14は胴部が球胴状で頸部外面に突帯を有する。突帯には指頭圧痕がみられる。内外面ともナデ調整である。15は短く屈曲する口縁部をもつ甕で、胴部はあまり膨らみをもたない。17はやや受け口状の口縁部をもつ甕で、口縁部外面は縦方向の工具ナデ調整の後に横方向のナデ調整がみられる。18はくの字に屈曲する口縁部をもち、頸部内面にはやや強い稜線がみられ、頸部外面には、調整時の工具痕がみられる。

20は胴部がそろばん玉状に屈曲するタイプの甕で、胴部外面には接合線が残る。頸部はやや厚みがありくの字に大きく屈曲する。22は胴部が球胴状となる甕で、胴部に最大形をもつ。頸部はくの字に屈曲し、口縁部はわずかに受け口状を呈する。24はゆるやかに頸部が屈曲する甕で、口唇部はコの字を呈する。底部は上げ底状の脚台をもち、指頭圧痕が明瞭に残る。口径27.0cm、器高23.8cmを測る。25はくの字に屈曲する頸部をもつ甕で、頸部外面には刻目突帯を有する。この突帯は接合することなく、右側の突帯が下方へのびるタイプのものであ

る。胴部の張りは強い。脚部は直線的に開くもので、脚部内面は平坦である。26は口径27.2cm、器高30.3cm、底径6.1cm、脚部高5.5cm、脚部径9.5cmを測る。口縁部はゆるやかにくの字に屈曲し、口唇部はコの字になる。頸部外面には刻目突帯を有し、突帯の接合部は接してはいるが、右側が下方へのびるタイプのものである。内外面とも薄いハケ調整がみられる。脚部は直線的に開き、内面はドーム状を呈する。28は胴部が張り、口縁部がゆるやかに外反するもので、頸部は接合部から右側が大きく垂下する。口縁部内面は横方向の丁寧なハケ調整、口縁部外面は縦方向のハケ調整がみられる。

30は口縁部がゆるやかに外反するもので、口唇部はコの字を呈し、やや歪みがみられる。頸部外面には刻目突帯がめぐる。33はやや潰れた形の胴部をもつもので、脚部はハの字に開くものである。頸部外面には口縁部に見られる縦方向の工具ナデ調整のための段が形成される。34は口縁部が長くラッパ状に開くもので、胴部高は低い。36は頸部にやや太めの刻目突帯が巡る。37は緩やかに外反する口縁部をもつもので、頸部内面には稜線がみられない。頸部外面には絡縄突帯がみられる。38は胴部が丸みをおびるタイプの甕で、口縁部は短く外反する。

41は緩やかに外反する口縁部をもち、口唇部はコの字を呈する。頸部外面には刻目突帯がみられる。42は頸部から直線的に開くタイプのもので、外面は細かいハケ調整がみられる。頸部下にはやや細かい刻目突帯がめぐる。脚部内面は平坦である。43は胴部が底部に向かって逆三角形状を呈するもので、口縁部は緩やかに外反する。頸部よりやや下がった位置に刻目突帯がめぐり、接合せず右側が下方へのびる。44は口径41.4cmを測る大型の甕で、頸部には刻目突帯がみられる。45はゆるやかに外反する口縁部をもつ甕で、外面には縦方向のハケ調整がみられる。口径34.1cm、器高31.0cm、底径6.1cm、脚部高5.7cm、脚部径10.5cmを測る。脚部はハの字に開き、脚部内面はドーム状を呈する。46は口縁部でわずかに外反する甕で、頸部には絡縄突帯がめぐる。この突帯は接合せず、右側が下方へのびる。口径31.5cm、器高30.2cm、脚部高2.3cm、脚部径9.0cm、底径6.9cmを測る。脚部は接地面が平

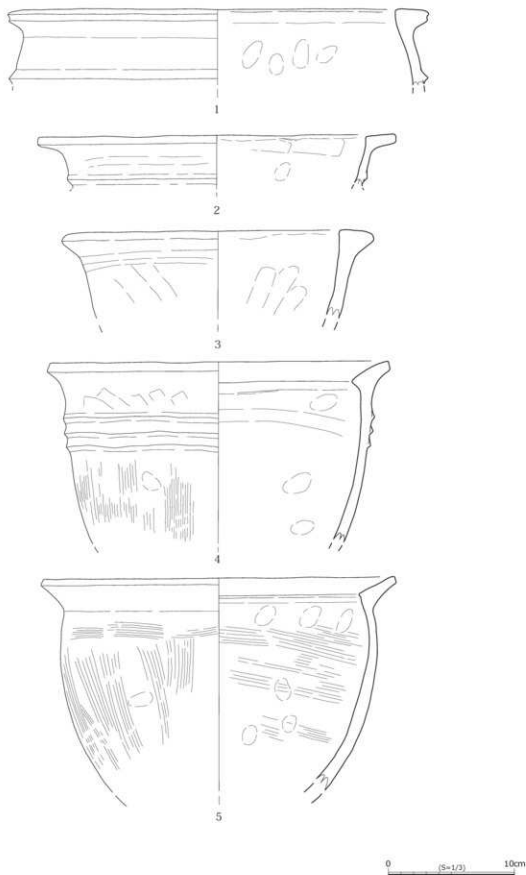


図 21 土器集中廃棄所 出土遺物 (復) 1

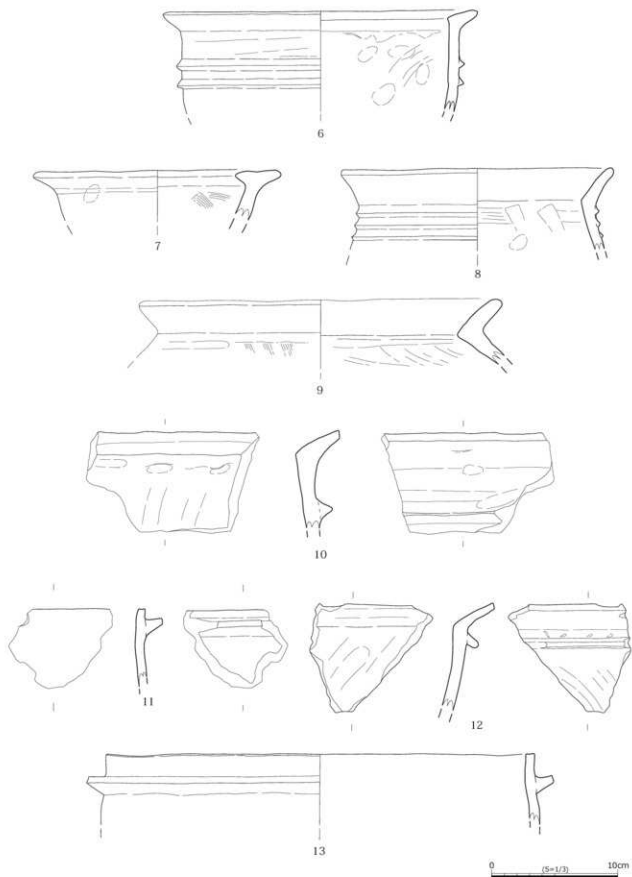
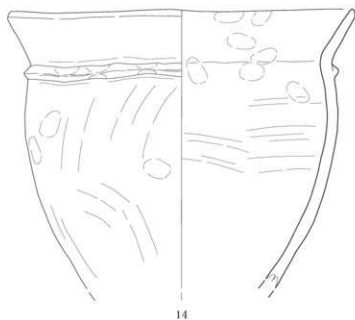
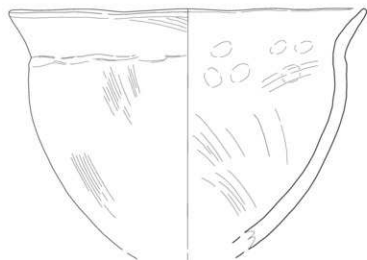


図22 土器集中廃棄所 出土遺物 (続) 2

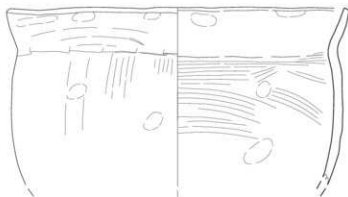


0 (B=1/3) 10cm

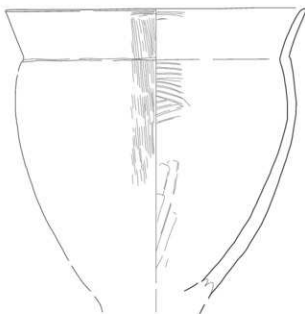
图 23 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 3



16



17



18

0 (5=1/3) 10cm

図24 土器集中廃棄所 出土遺物(瓿)4

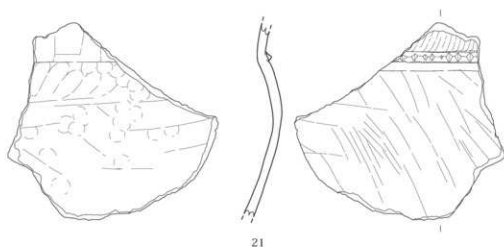
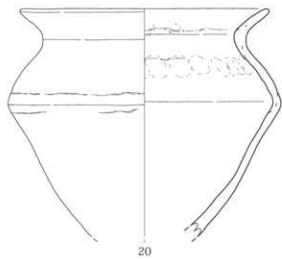
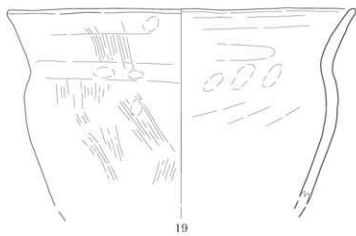


図25 土器集中廃棄所 出土遺物(獲)5

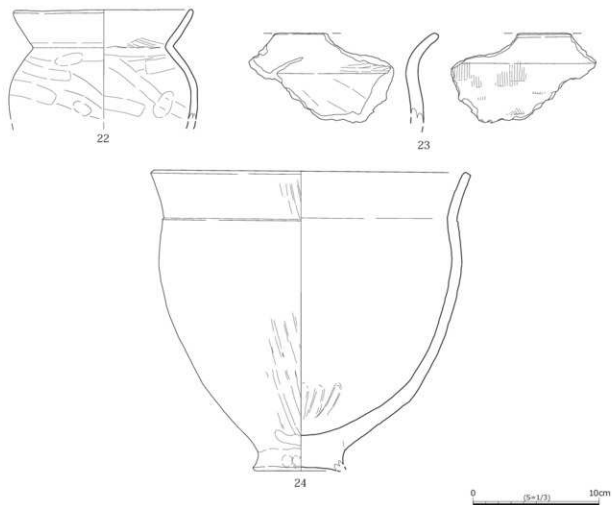


図26 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 6

坦になっており、脚部内面はゆるやかな平坦面を形成している。47は無文の甕で、口縁部は短く開く。

51は小型の甕で、胴部は球胴状を呈し、口縁部はやや受け口状になる。頸部外面には刻目突帯がみられる。53は先細りする口縁部をもつもので、胴部に最大径をもつ。頸部外面には刻目突帯がみられ、刻目は器体までほどこされている。54は受け口状の口縁部をもつ甕で、上端は平坦になる。頸部下に刻目突帯を持ち、頸部内面には指頭圧痕が目立つ。56は胴部が張り、口縁部が直線的にのびる甕で、底径は8.0cmとやや広い。頸部下には接合しない刻目突帯がめぐり、右側が下方へのびる。59は口径36.0cmを測るやや大型の甕で、口縁部はゆるやかに外反し、口唇部はコの字を呈する。

60は砲弾状の器形を呈する大型の甕で、胴部に

最大径をもち39.9cmを測る。口縁部は頸部から上方に直線的に立ち上がり、頸部外面にはやや幅の広い刻目がめぐり、61も口径45.0cmを測る大型の甕で、頸部には接合しない刻目突帯がみられ、左側が下方へのびる。63は頸部に接合しない刻目突帯がめぐり、右側が下方へのびる。64は口径35.8cmを測り、口縁部が短く外反するものである。頸部にはやや幅の広い突帯が貼り付けられ、刻目が施される。67は口縁部がゆるやかに外反し、口唇部はコの字を呈する。頸部には細かい刻目突帯が施される。69は頸部に連続したユビオサエがみられる絡縄突帯がみられる。

70は口縁部外面の工具ナデによる工具痕が頸部に残り、明瞭な段を形成している。71は口縁部付近でゆるやかに外反するもので、頸部下には断面台

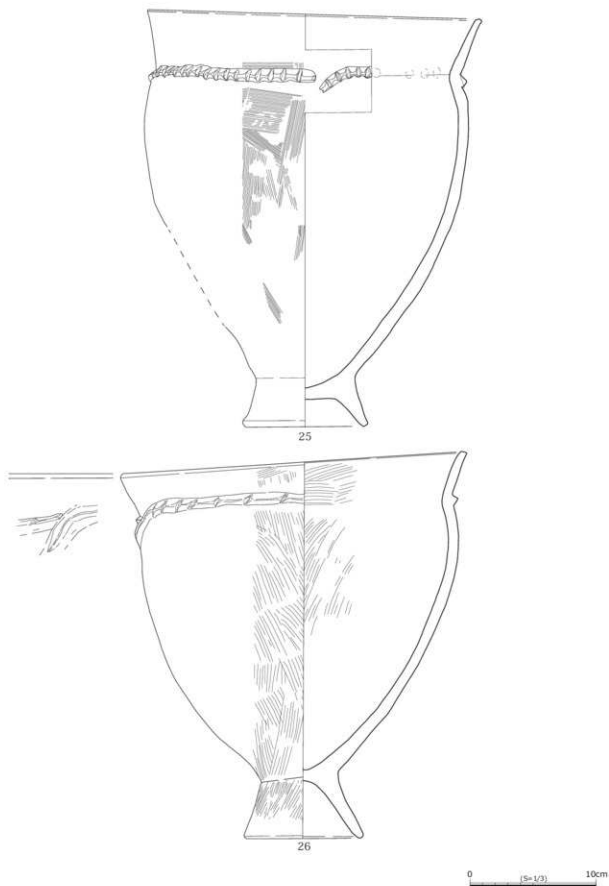


图 27 土器集中廃棄所 出土遺物 (號) 7

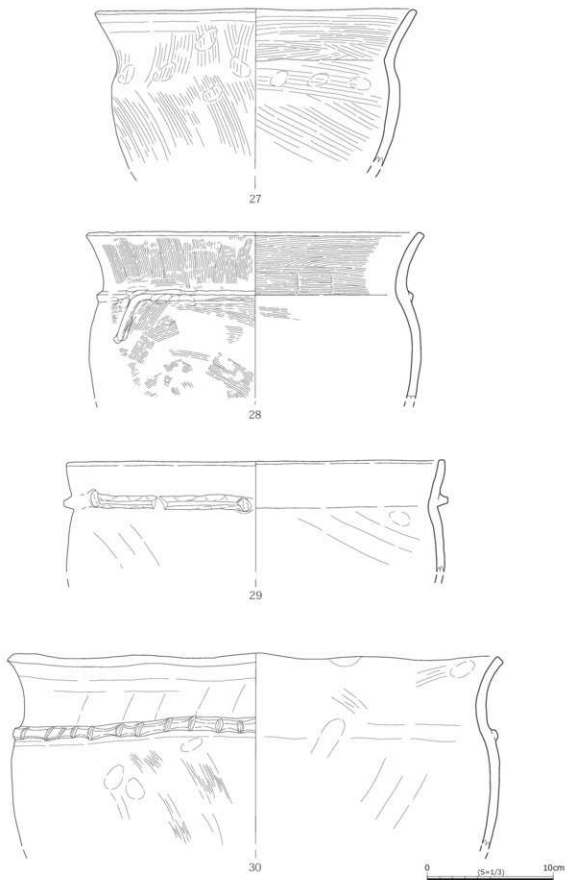


図28 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)8

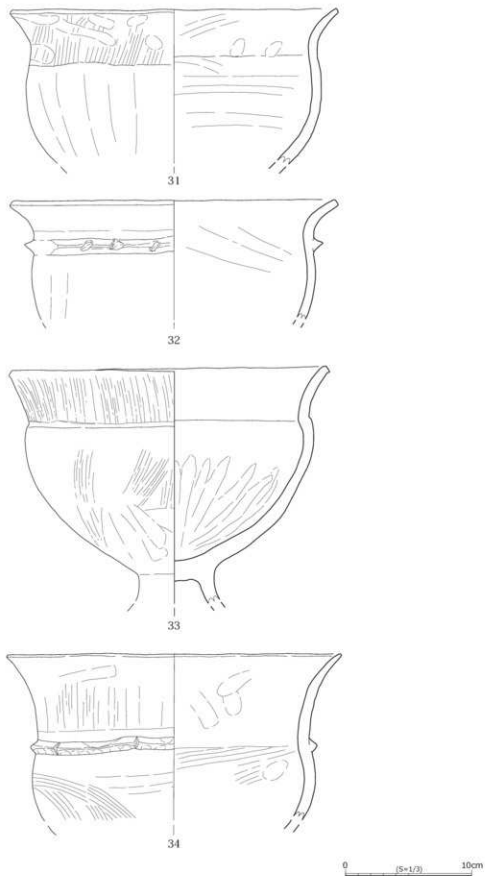


図29 土器集中廃棄所 出土遺物 (塚) 9

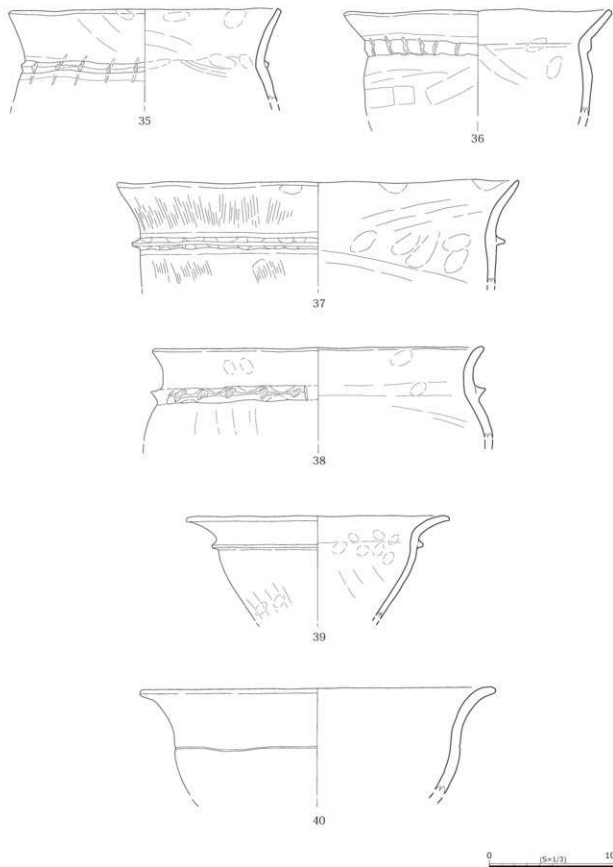
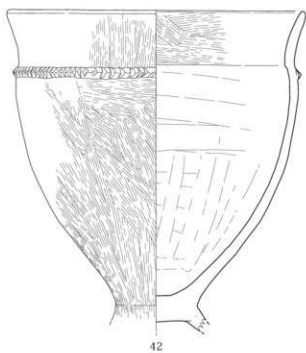
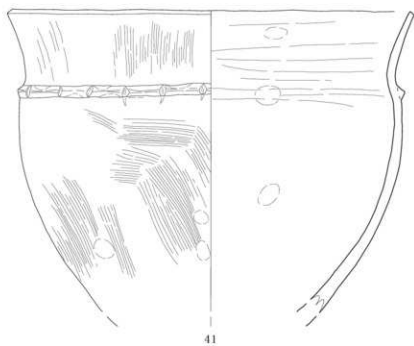
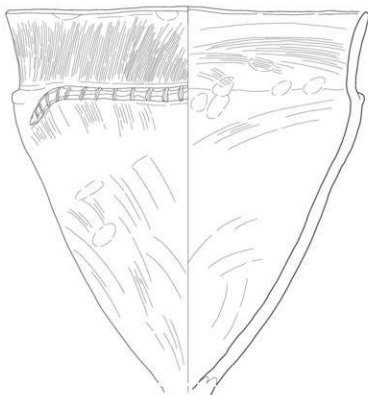


図30 土器集中廃棄所 出土遺物(髷)10

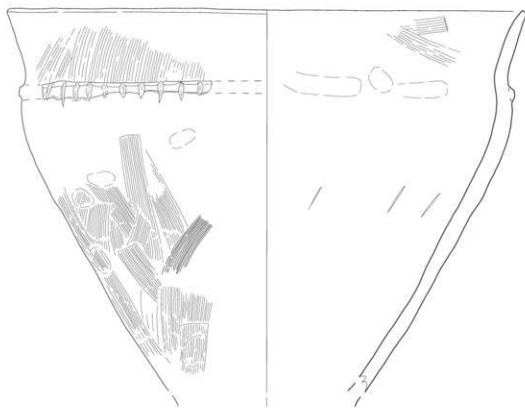


0 (5=1/3) 10cm

図31 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)11



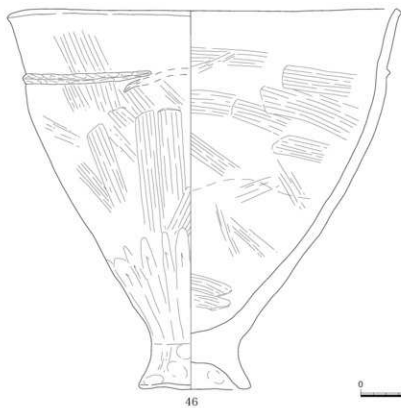
43



44

0 (S=1/3) 10cm

図 32 土器集中廃棄所 出土遺物 (壁) 12



0 (5=1/2) 10cm

图 33 土器集中廃棄所 出土遺物 (甕) 13

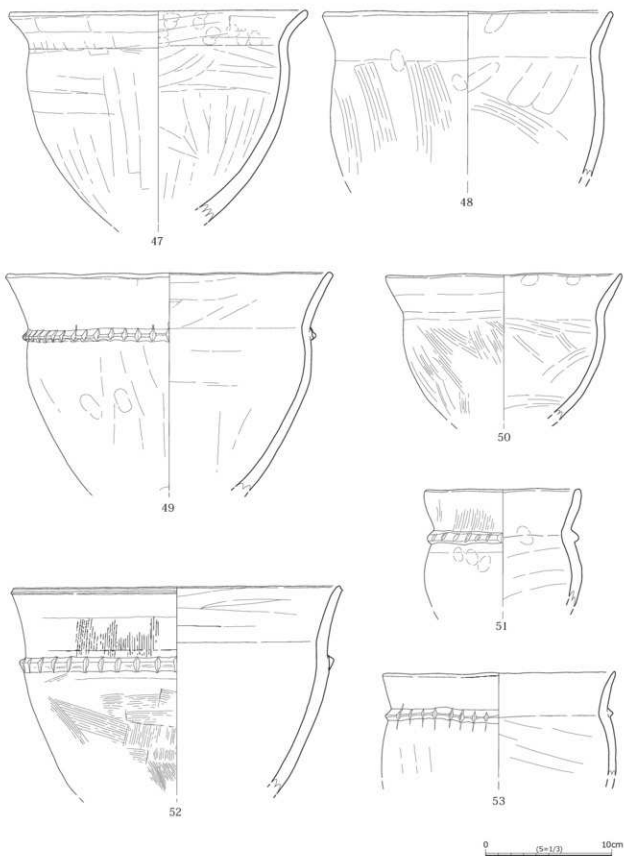


図34 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)14

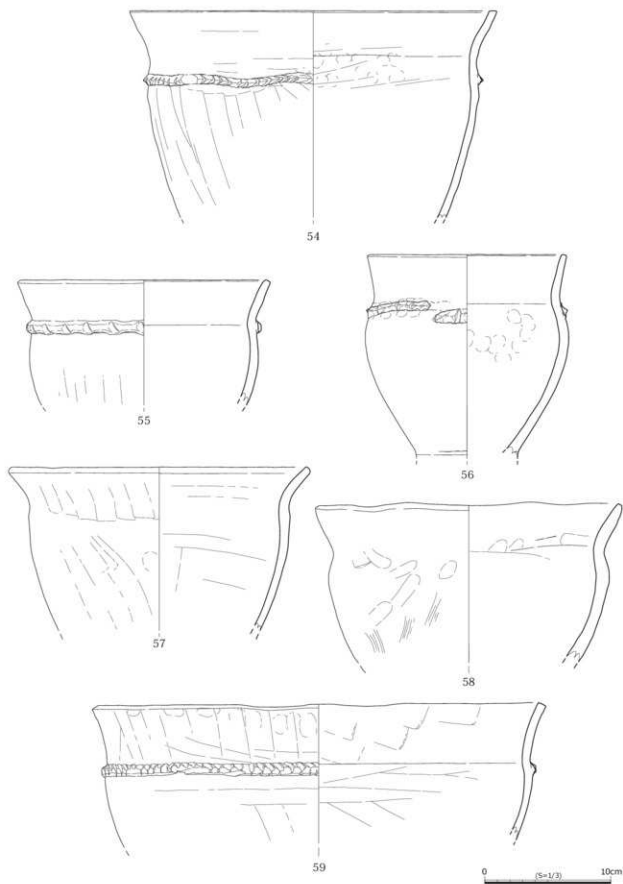


图 35 土器集中廃棄所 出土遺物(甕) 15

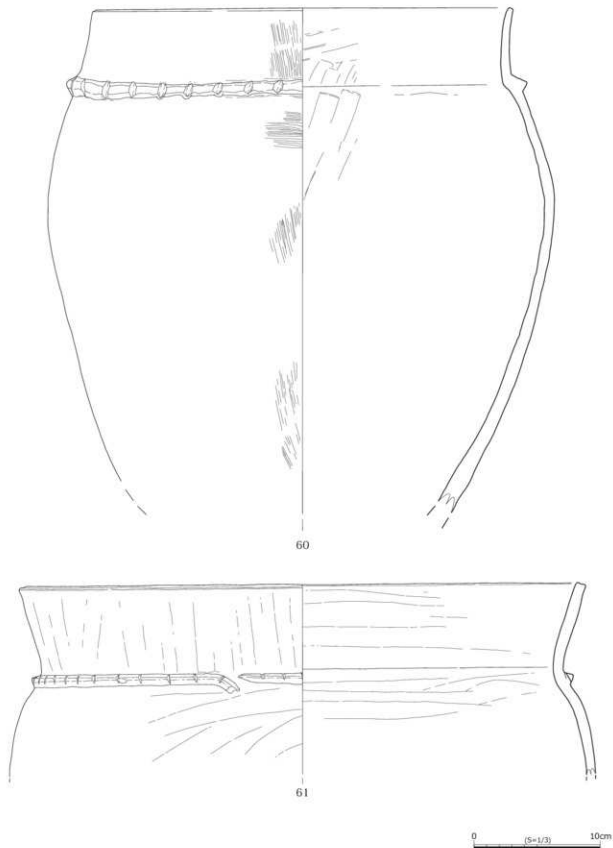
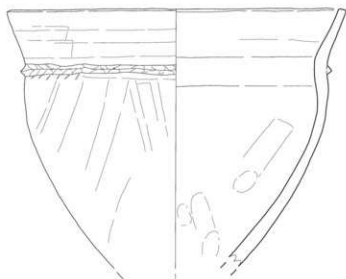
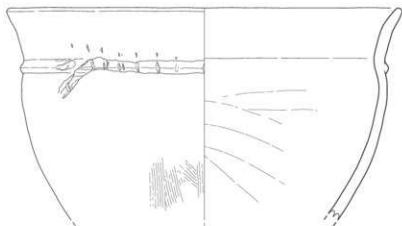


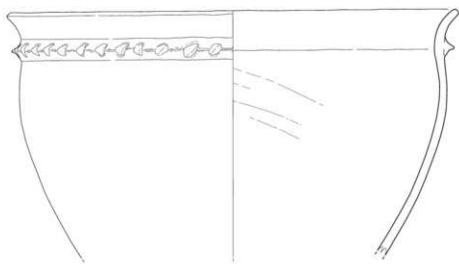
図36 土器集中廃棄所 出土遺物(壁)16



62



63



64

0 (5=1/3) 10cm

図37 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)17

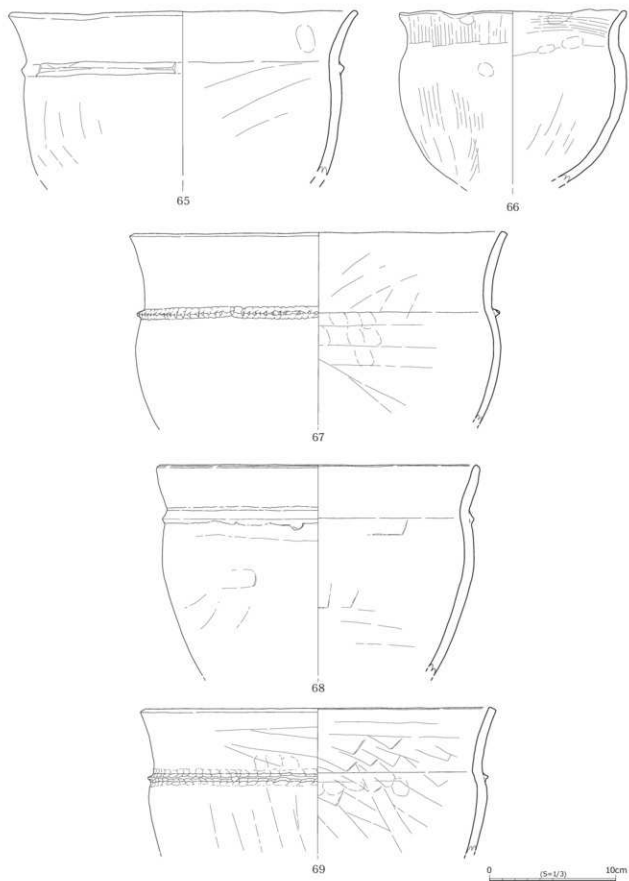


図 38 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 18

形の突帯が巡る。73は胴部が張り、口縁部が直線的に立ち上がるもので、口唇部は丸みをおびる。胴部に最大径を持ち、32.1cmを測る。胴部には刻目突帯が施され、口縁部外面には明瞭な縦方向のハケ調整がみられる。74は口縁部がゆるやかに外反するもので、口唇部は丸みをおびる。頸部には絡縄突帯がみられる。脚部内面は平坦面が形成される。76は口縁部が短く外反するもので、頸部にはやや幅の広い刻目突帯が施される。突帯は接合しているが、右側が垂下して貼り付けられる。77は口縁部が直線的に開くもので、口唇部はコの字を呈する。頸部には接合しない刻目突帯が施され、右側が下方へのびるものである。78は頸部が緩やかに外反する甕で、頸部には刺突の小さな刻目突帯がめぐる。外面は淡赤色で、一部灰色に発色している部分もある。79は頸部から直線的に開く口縁部をもつもので、口唇部は平坦面を持つ。頸部には接合しない絡縄突帯がみられ、右側が下方へのびる。

80は頸部からラッパ状に開く口縁部で、頸部には歪んだ絡縄突帯がめぐる。この絡縄突帯は接合部から下方へ垂下している。口縁部外面には縦方向の工具ナデ痕跡が見られる。81は口縁部がゆるやかに外反するもので、頸部には刺突の小さな刻目突帯がめぐる。外面の色調は明赤灰色で、内面には全面黒斑がみられる。82は胴部からゆるやかに外反するもので、口径31.4cmを測る。頸部から縦方向のハケ調整が明瞭に残り、頸部には工具による段が形成される。内外面ともハケ調整がみられ、口唇部は丁寧なヨコナデがみられる。外面にはススの付着が見られる。84は頸部に一条の刻目突帯がめぐるもので、口唇部はコの字を呈する。内外面ともやや細かなハケ調整がみられる。85は口縁部が直線的に立ち上がるもので、頸部内面には明瞭な稜線がみられる。器壁がやや薄い。

91は胴部が張り、口縁部が直線的に立ち上がるもので、口唇部は上面に平坦面をもつ。口縁部外面は細かい縦方向のハケ調整がみられ、頸部には絡縄突帯がめぐる。93は胴部が丸みを持ち、口縁部が大きく外反する小型の甕である。頸部外面には明瞭な段をもつ。97は底部が分厚い平底の甕で、口径33.0cm、器高31.5cm、底径7.1cmを測る。頸部下には刻目突帯がめぐる、口縁部外面には縦方

向のハケ調整がみられる。98は丸底の甕で、口径19.8cm、器高17.8cm、胴部最大径18.0cmを測る。頸部内面は強い稜線をもつ。底部外面は一部剥落しているが、ヘラズリがみられる。混和剤を多く含み、胎土は脚台付きの甕と類似する。99は口縁部が受け口状になり、頸部が強く屈曲する。口唇部は丸みをおびる。

101は丸底の甕で、口径15.3cm、器高19.0cm、胴部最大径15.3cmを測る。頸部の屈曲はゆるやかで、弱い稜線がみられる。102は布留系の甕で、口径17.1cm、頸部径13.2cmを測る。頸部は強く屈曲し、口唇部は上面に平坦面をもつ。内面は斜め方向のヘラズリがみられる。

110は口径26.0cm、器高31.7cm、底径8.1cm、脚部高3.8cm、脚部径10.2cmを測る。頸部から直口する口縁部をもち、口唇部はやや丸みをおびるがコの字を呈する。頸部内面には稜線を持ち、頸部外面には接合しない刻目突帯をもつ。この突帯は右側が下方へ下る形態で、突帯貼付け後のヨコナデがみられる。脚部は直線的に開き、脚部内面はわずかに下方へ突出している。111は口縁部が内傾するタイプのもので、頸部には突帯はみられない。112は頸部からわずかに外反する口縁部をもち、口唇部は上面に平坦面をもつ。頸部には刻目突帯を持ち、口縁部内面には丁寧なハケ調整がみられる。114は折り返した口縁部をもつ甕で、折り返し部分には刻目が施される。胴部は球胴状に膨らみ、最大径21.3cmを測る。色調は他の土器と比較して赤みを帯びており、混和材は少ない。116は内湾する口縁部をもち、口唇部はコの字を呈する。最大径部分に刻目突帯を有する。

120は口径30.7cm、器高26.8cm、底径6.0cm、脚部高4.0cm、脚部径9.2cmを測り、バケツ状に開く口縁部をもつ。口縁部下には一条の絡縄突帯をもち、器面全体をナデ調整で仕上げる。脚部は直線的に開くもので、脚部内面はドーム状を呈する。121は平底の小型甕で、口縁部は頸部から直口する。口径16.6cm、器高26.1cm、底径5.7cmを測り、底部厚は2.5cmとやや厚い。外面は丁寧なハケ調整がみられる。122は口縁部が直線的に立ち上がる小型甕で口径19.9cm、器高22.0cm、底径4.5cm、脚部径6.7cm、脚部高3.0cmを測る。頸

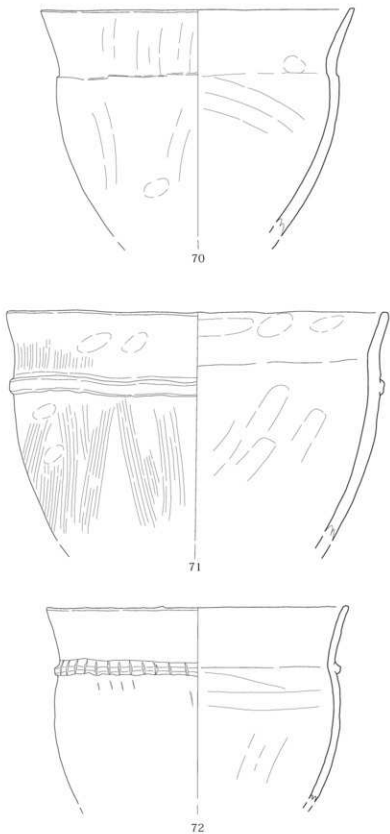
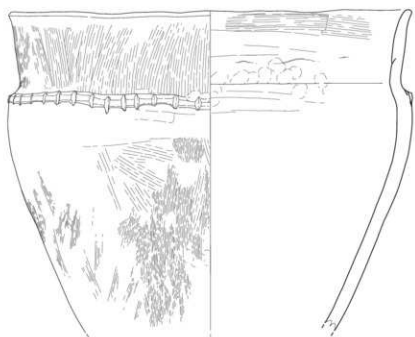
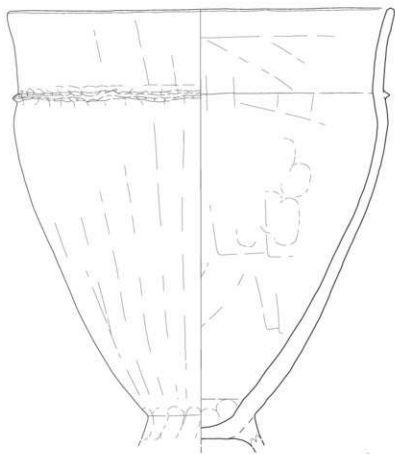


図39 土器集中廃棄所 出土遺物(甕)19

0 (5=1/3) 10cm



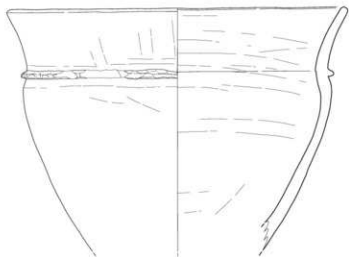
73



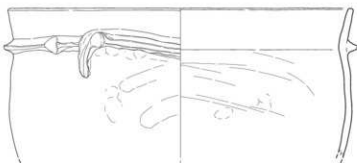
74

0 10cm
(9-1/3)

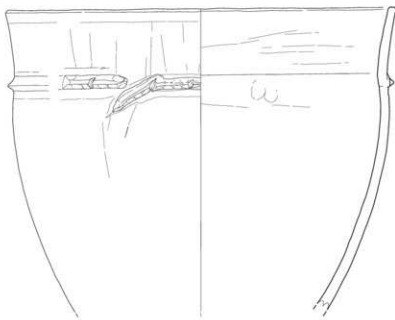
圖40 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)20



75



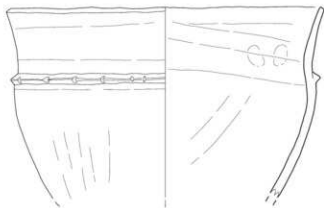
76



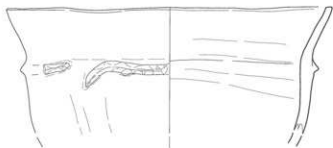
77

0 (5=1/3) 10cm

図41 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 21



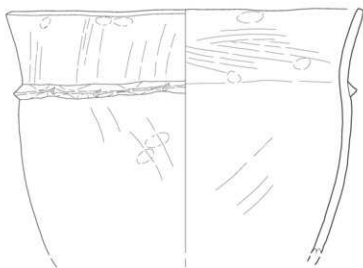
78



79



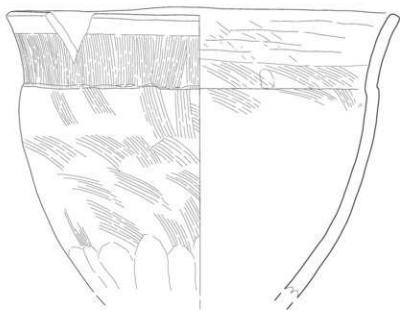
80



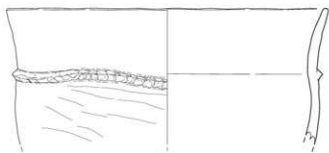
81

0 (5=1/3) 10cm

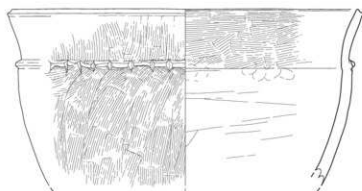
图42 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)22



82



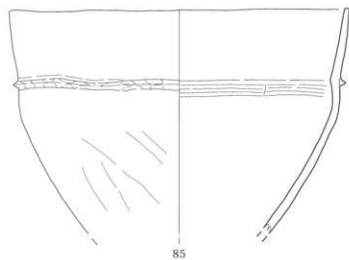
83



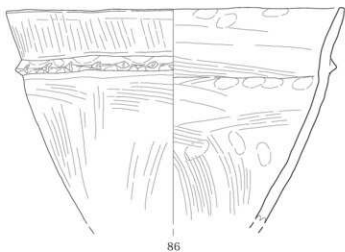
84

0 [5=1/3] 10cm

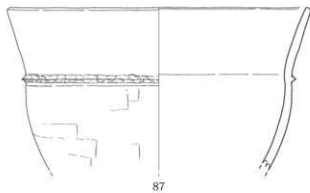
図43 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)23



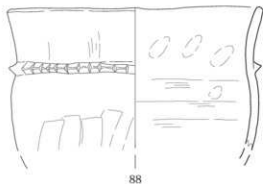
85



86



87



88

0 (5=1/3) 10cm

図44 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 24

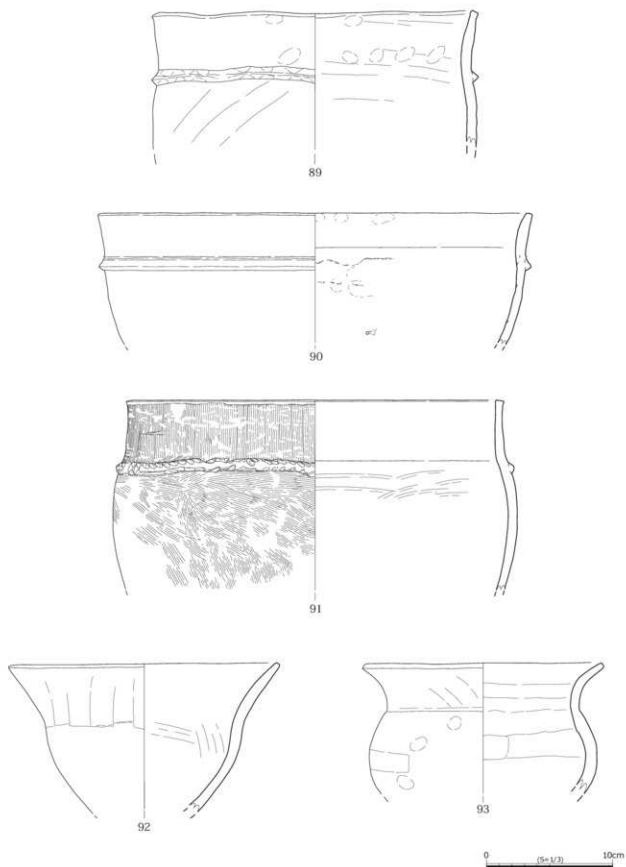


図45 土器集中廃棄所 出土遺物(獲)25

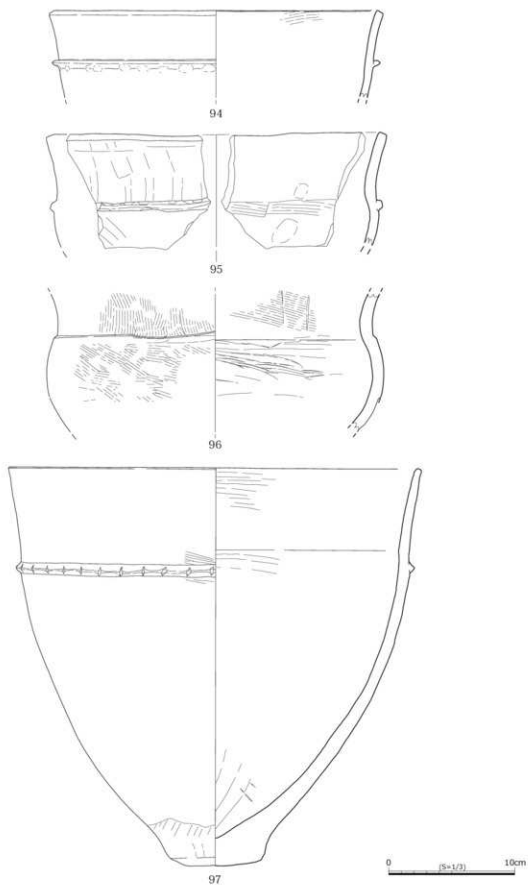


図46 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)26

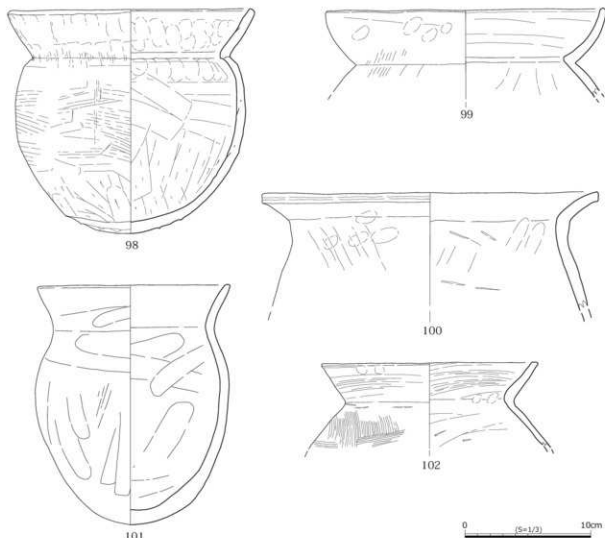


図47 土器集中廃棄所 出土遺物(甕) 27

部には接合しない絡縄突帯を有し、右側が下方へのびる。123はバケツ状の形態で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁部下には接合しない絡縄突帯を有し、右側が下る段違いとなる。125はやや潰れた形態の甕で、口縁部が内湾する。口縁部下には絡縄突帯を有する。

130は大きく内湾する形態の甕で、口縁部は先細りになる。最大径部分にゆがみのある絡縄突帯を有する。131は口径40.0cm、器高29.4cm、最大径41.1cm、底径8.1cm、脚部高4.8cmを測る。器高に比して口径が大きい。脚部は中空ではなく、わずかに上げ底状となる。132は内湾する口縁部を

持ち、最大径部分に刻目の細かな突帯をもつ。133は最大径部分に絡縄突帯を有し、口縁部周辺は横方向のミガキ、胴部は縦方向のミガキがみられる。ミガキの単位は外面のほうが細かい。135はやや細身の内湾する甕で、最大径部分に刻目の大きな突帯を有する。136は大きく内湾する甕で、内面にはハケ調整がみられる。138は口縁部下に刻目突帯を有し、逆ハの字に開く刻目を施す。139は直線的に立ち上がるバケツ形を呈し、口縁部下には絡縄突帯を有する。

142は最大径よりやや下がった位置にコビオサ

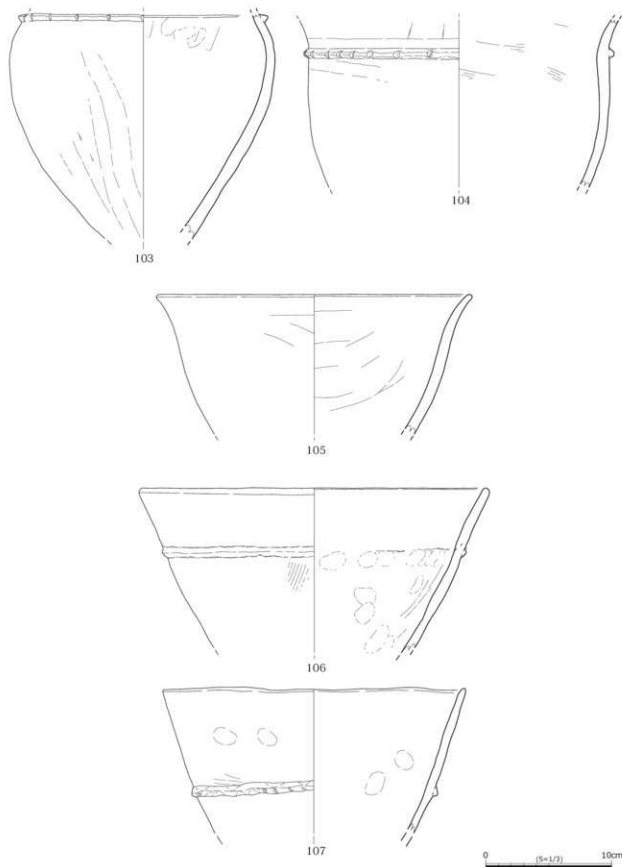


図48 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)28

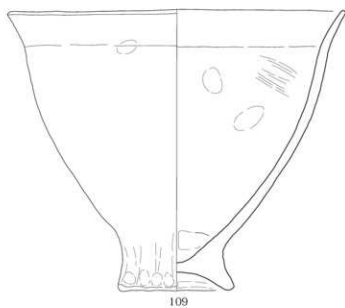
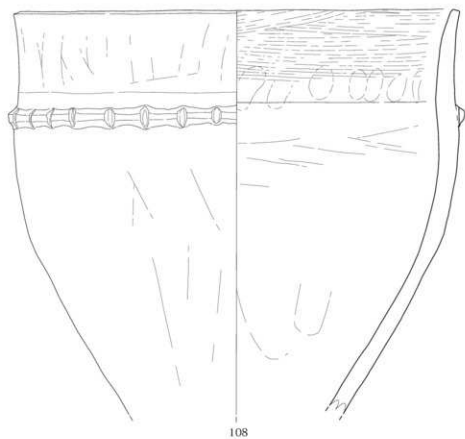
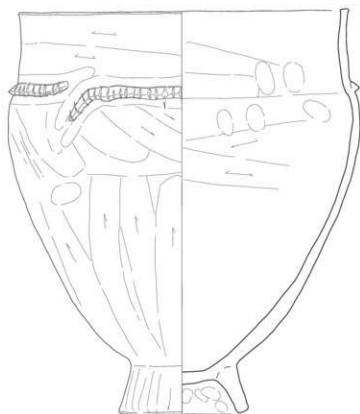
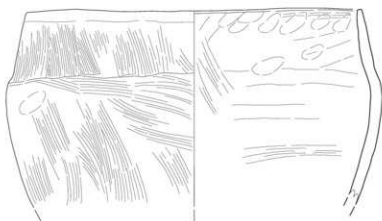


図49 土器集中廃棄所 出土遺物(甕)29



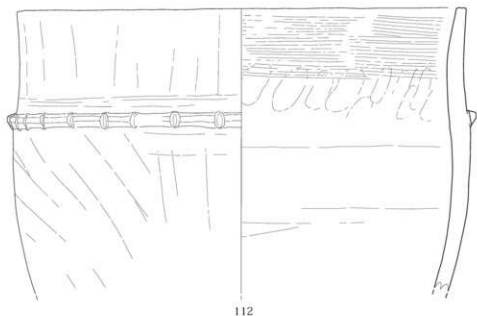
110



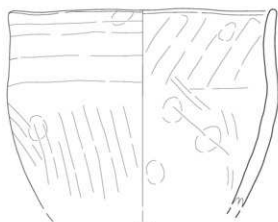
111



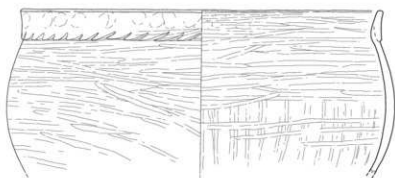
図50 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 30



112



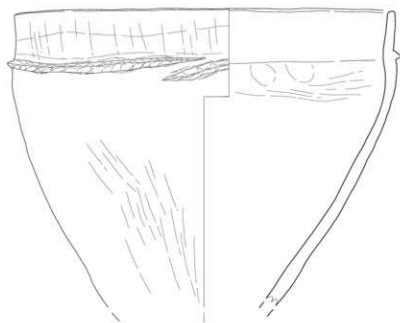
113



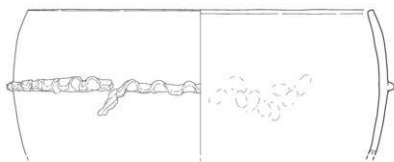
114



図51 土器集中廃棄所 出土遺物(壁) 31



115



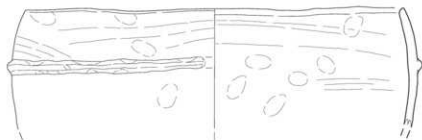
116



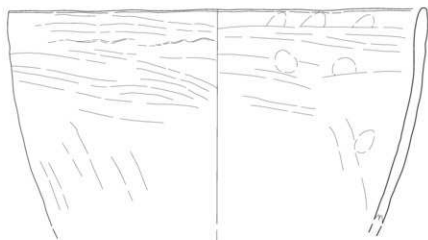
117

0 10cm
(5=1/3)

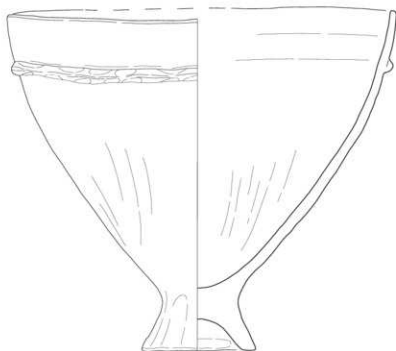
图52 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)32



118



119



120



図53 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)33

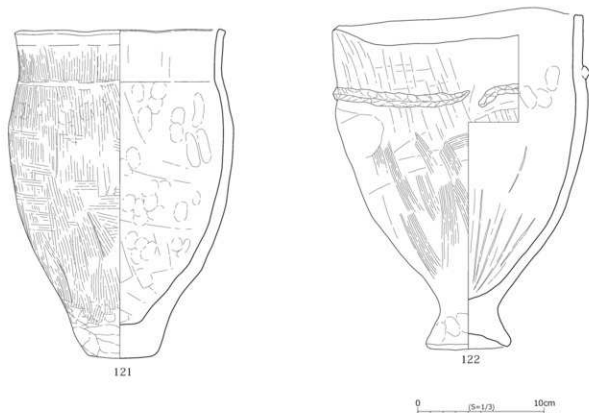


図54 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)34

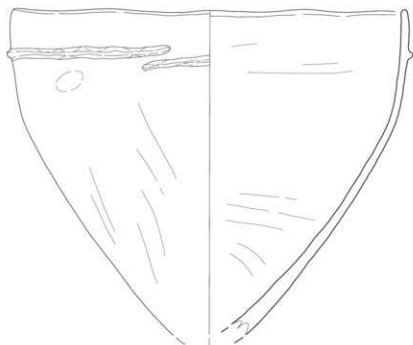
エの残る刻目突帯を有する。143は最大径部分に原体が指頭の刻目突帯を有する。口縁部外面は横方向のナデ調整、胴部は縦方向のナデ調整がみられる。144は口縁部がわずかに外反するもので、頸部に絡縄突帯がめぐる。147は無紋の甕で、口縁部がわずかに外反する。148は胴部から直線的に開く甕で、口縁部下に絡縄突帯を有する。突帯の端部はヨコナデがみられる。

152は口縁部が直口するもので、口縁部下に垂下気味の刻目突帯が施される。155は最大径部分に刻目突帯を有し、刻目の間隔が疎らなものである。158はバケツ状に大きく開く形態で、口縁部下に絡縄突帯を有する。内外面ともユビオサエが多く残る。159は口縁部下に刻目突帯を有する。刻目の間隔は疎らである。

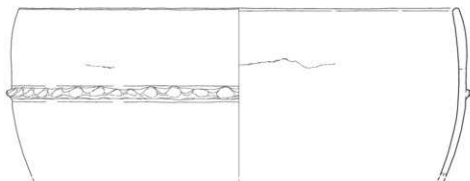
164は口縁部が直口する小型の甕で、口径13.9cm、器高20.6cm、底径4.3cm、脚部高2.1cm、脚部径3.9cmを測る。口唇部は丸みをおびる。頸

部外面にはゆがみがある突帯が貼り付けられる。底部は上げ底状となり、脚端部は断面三角形になる。165はバケツ状に大きく開く小型の無文甕である。口径18.3cm、器高19.1cm、底径6.0cm、脚部高2.7cm、脚部径8.3cmを測る。脚部は短くハの字に開く。166は内湾する口縁部をもつ甕で、底部は上げ底状の脚台をもつ。口径21.0cm、器高20.2cm、底径5.0cm、脚部高1.8cm、脚部径7.4cmを測る。口縁部下にはゆがみのある刻目突帯をもち、口縁部内面にはユビオサエが明瞭に残る。169は最大径部分に刻目突帯を有する甕で、刻目の間隔はやや疎らとなる。

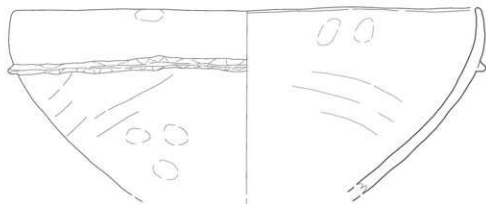
170は最大径部分よりやや下がった部分に刻目突帯をもち、口唇部はコの字を呈する。刻目の間隔はやや疎らである。171はやや肥厚する口縁部をもつ甕で、口縁部下に接合しない突帯を有する。口径30.5cm、器高41.3cm、底径10.0cm、脚部高3.0cm、脚部径12.3cmを測る。脚端部は丸みを帯び、



123



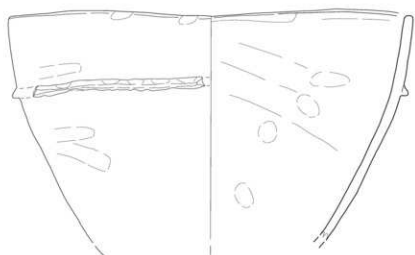
124



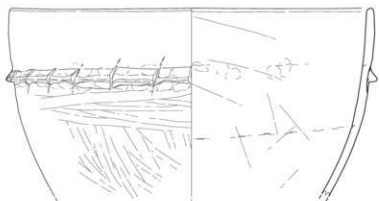
125

0 (5=1/3) 10cm

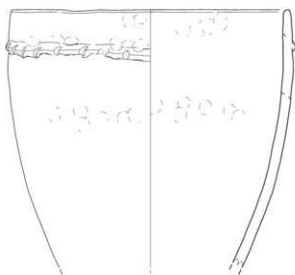
図55 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)35



126



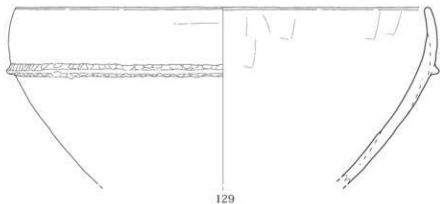
127



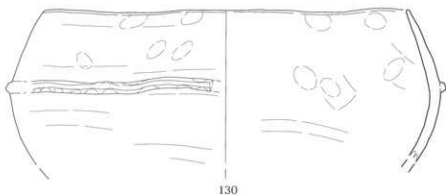
128

0 10cm
[9-1/3]

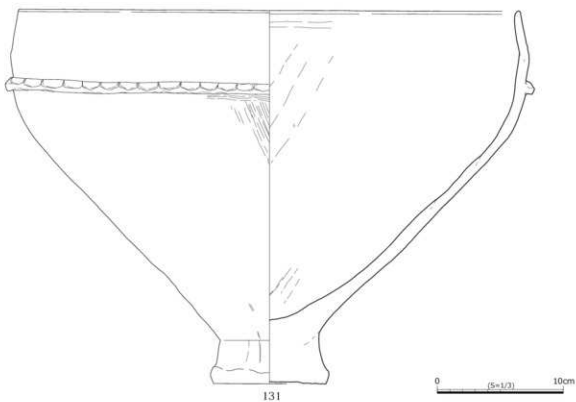
図56 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)36



129



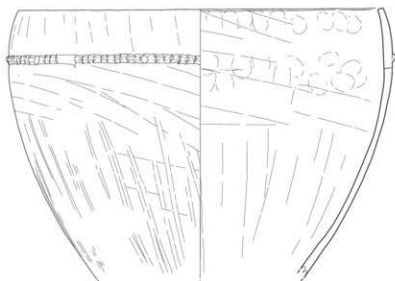
130



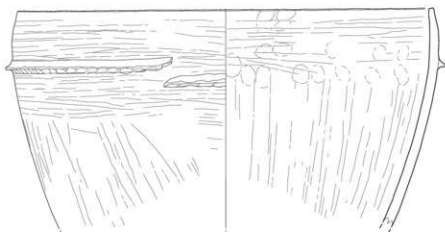
131

0 5(=1/2) 10cm

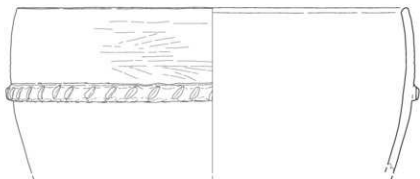
図 57 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 37



132



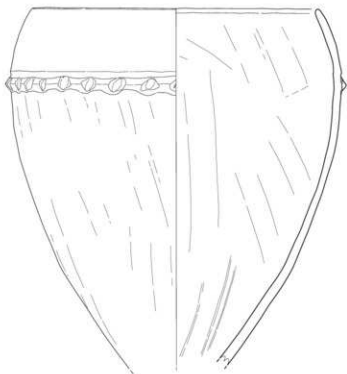
133



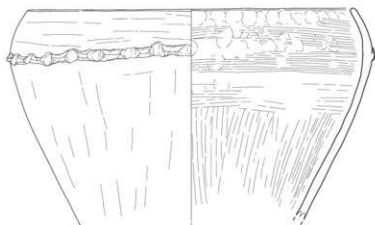
134



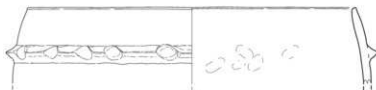
図58 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 38



135



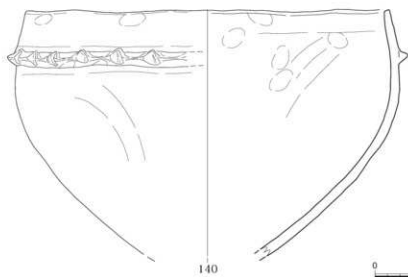
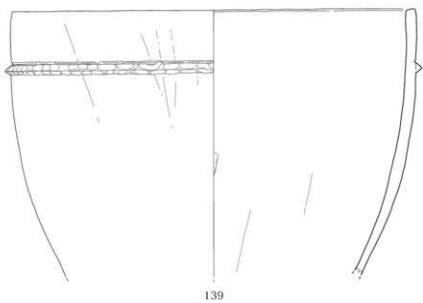
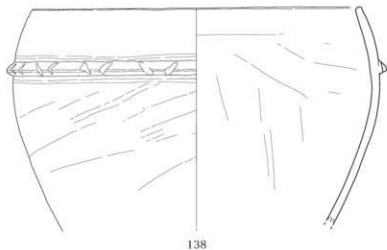
136



137

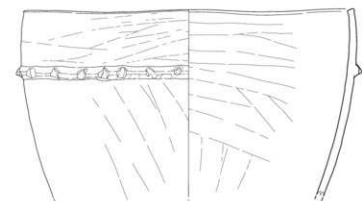
0 (5=1/3) 10cm

図59 土器集中廃棄所 出土遺物(甕)39

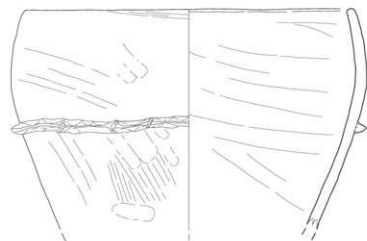


0 10cm
[5=1/3]

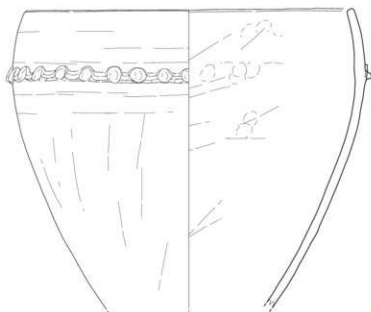
図60 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 40



141



142



143



図 61 土器集中廃棄所 出土遺物 (獲) 41

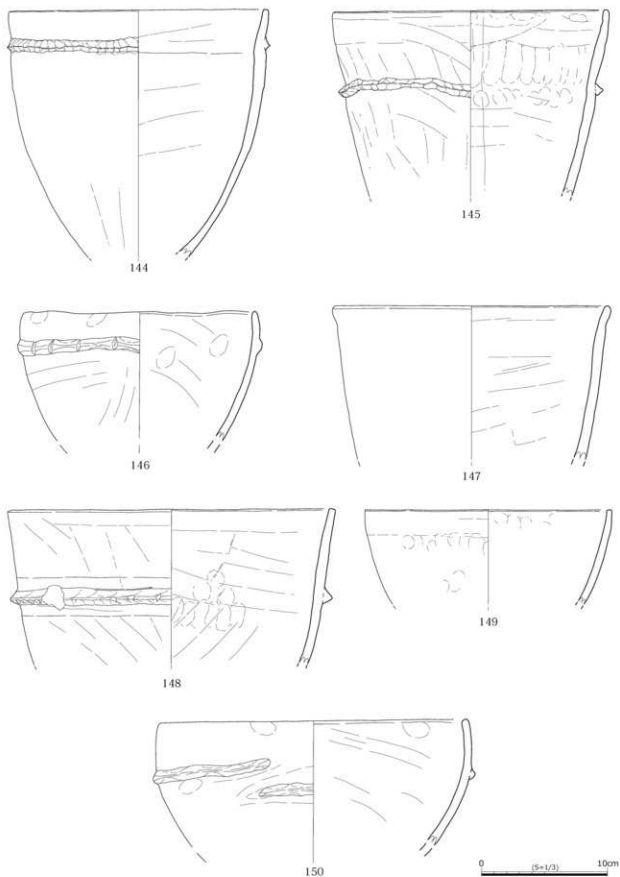


图 62 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 42

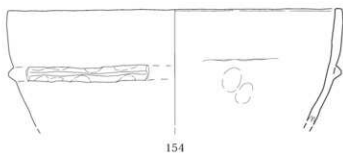
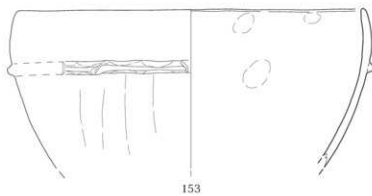
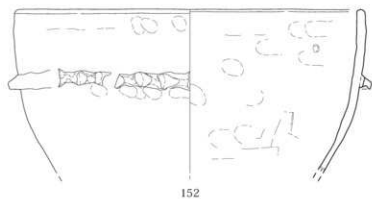
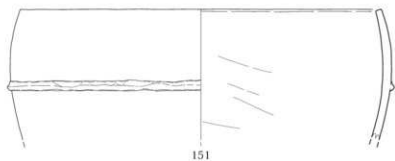


図63 土器集中廃棄所 出土遺物(瓿)43

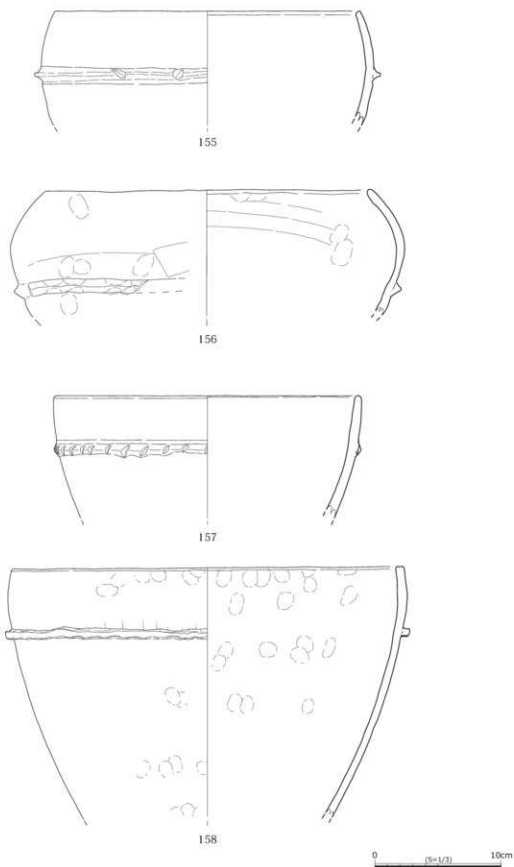


图64 土器集中廃棄所 出土遺物(變)44

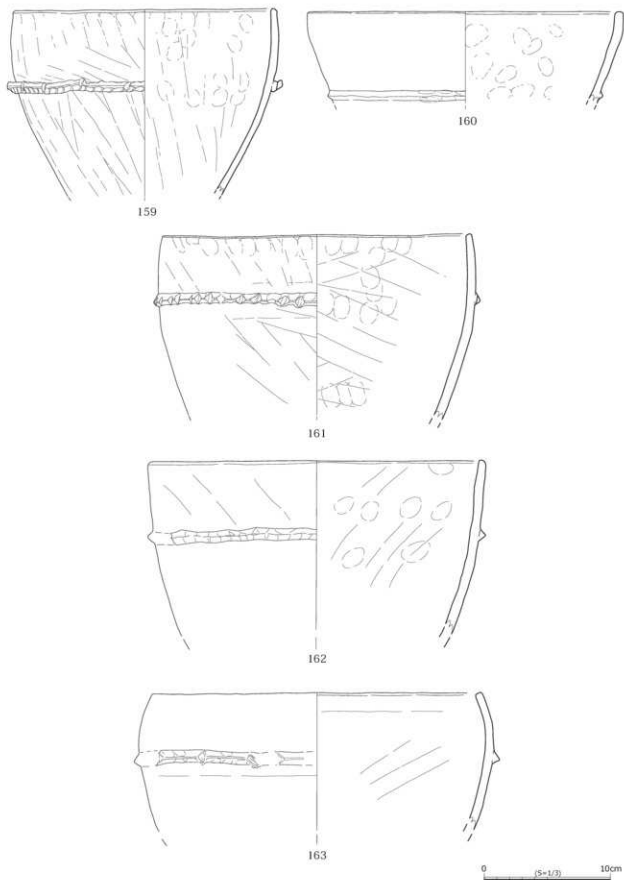
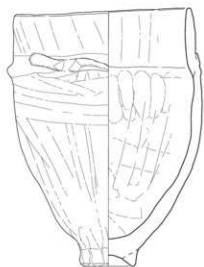


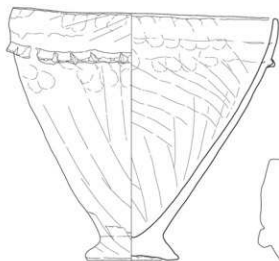
図 65 土器集中廃棄所 出土遺物 (選) 45



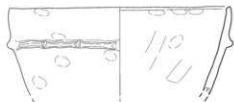
164



165



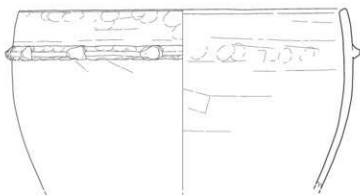
166



167



168



169

0 (5=1/3) 10cm

图66 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)46

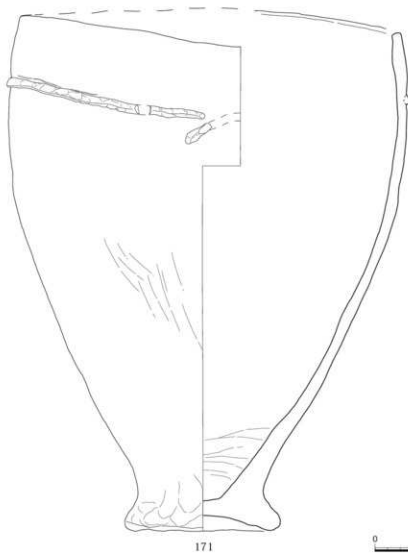
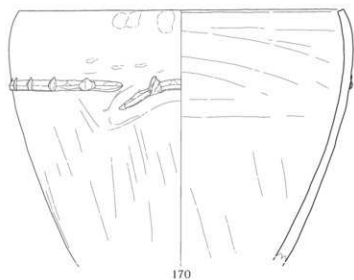


図 67 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 47

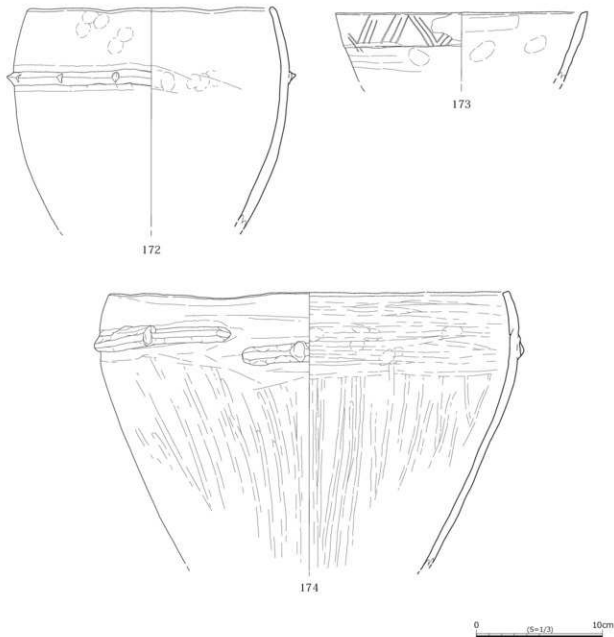


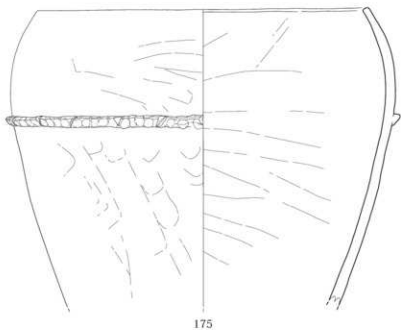
図 68 土器集中廃棄所 出土遺物（甕）48

脚部の接合部分はユビオサエが明瞭に残る。173は口縁部外面に幅 2.7cm を測る突帯が貼り付けられ、3 状の刻目が鋸歯状に施される。口径 20.0cm を測り、口唇部にはわずかにくぼみがみられる。174は最大径部分に刻目突帯を有し、刻目の間隔は疎らである。突帯は接合せず、右側が下方を通る。口縁部周辺は横方向のミガキ、胴部外面は縦方向のミガキがみられる。176は口径 25.8cm、器高 31.4cm、底径 7.1cm、脚部高 2.3cm、脚部径 8.4cm を測る。

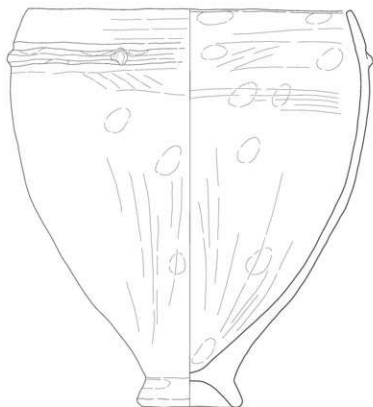
最大径よりやや高い位置に刻目突帯を有し、刻目の間隔は広い。178は口縁部が強く内傾するもので、口縁部下に絡縄突帯をもつ。

181 から 545 までは甕の脚部である。

181は直線的に開く脚部で、脚部内面は上面が突出している。外面には細かなハケ調整がみられる。184は脚端部の接地面が平坦で、やや末広がりになる。185は脚部高がやや低めのもので、短くハの字に開く。底部厚は非常に薄い。187はスカー



175



176

0 (5=1/3) 10cm

図 69 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 49

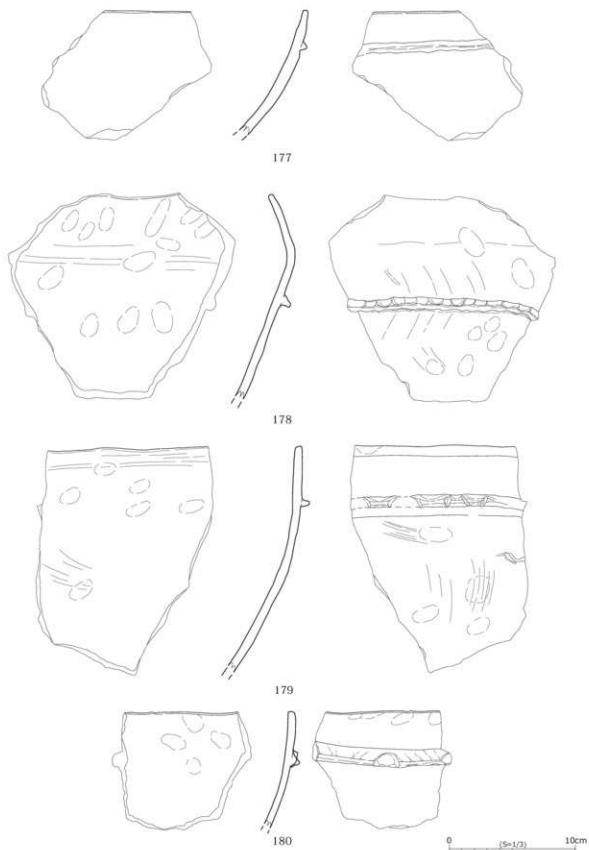


圖70 土器集中廃棄所 出土遺物(號)50

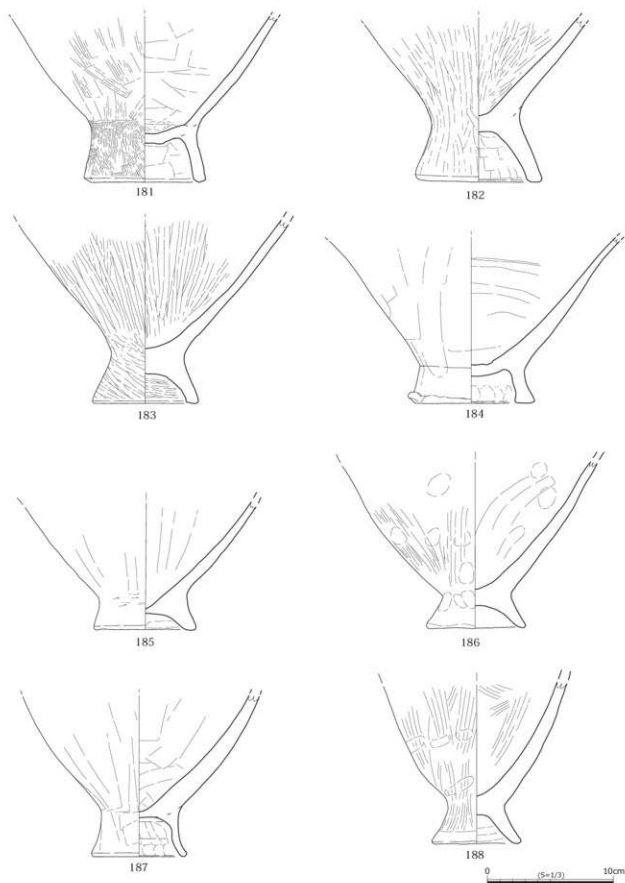


図 71 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 51

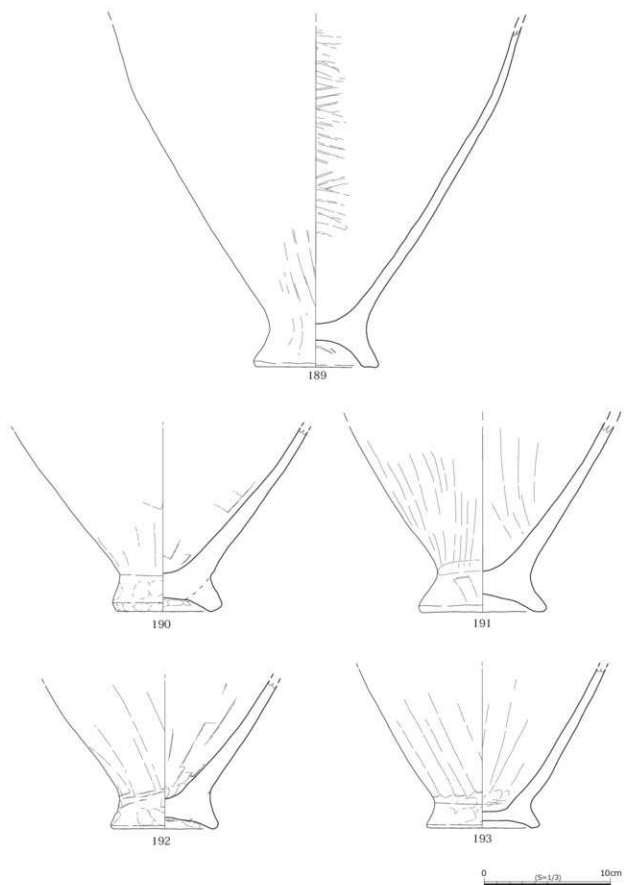


図72 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 52

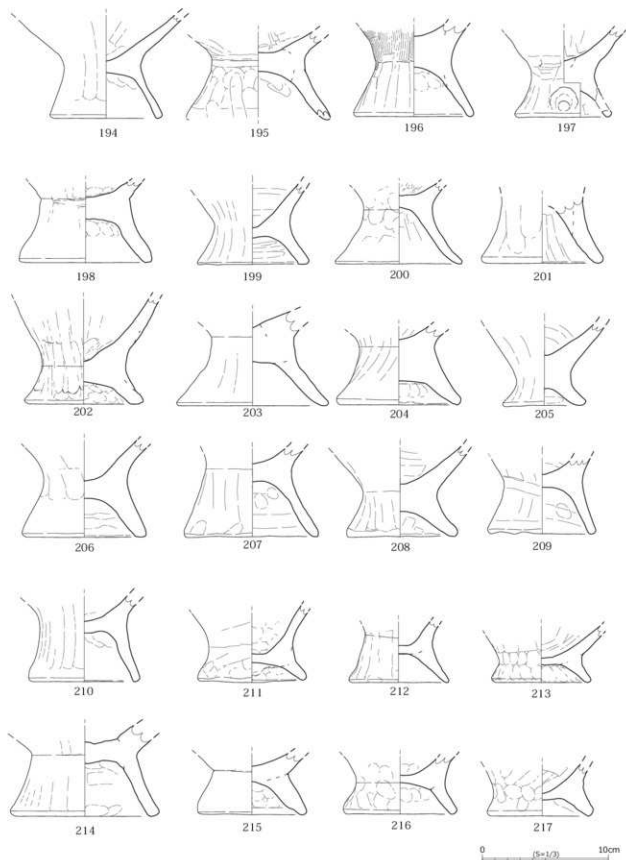


図 73 土器集中廃棄所 出土遺物 (獲) 53

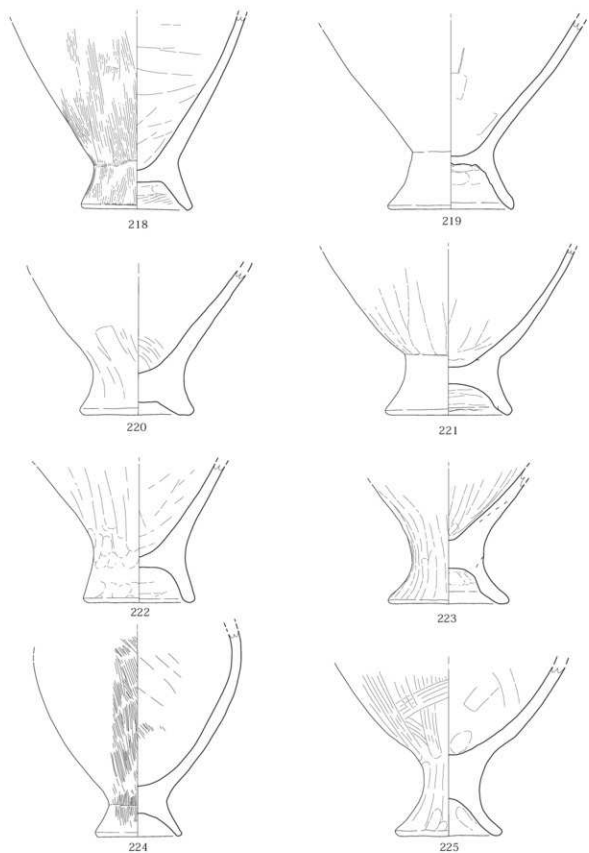


図74 土器集中廃棄所 出土遺物(雙) 54

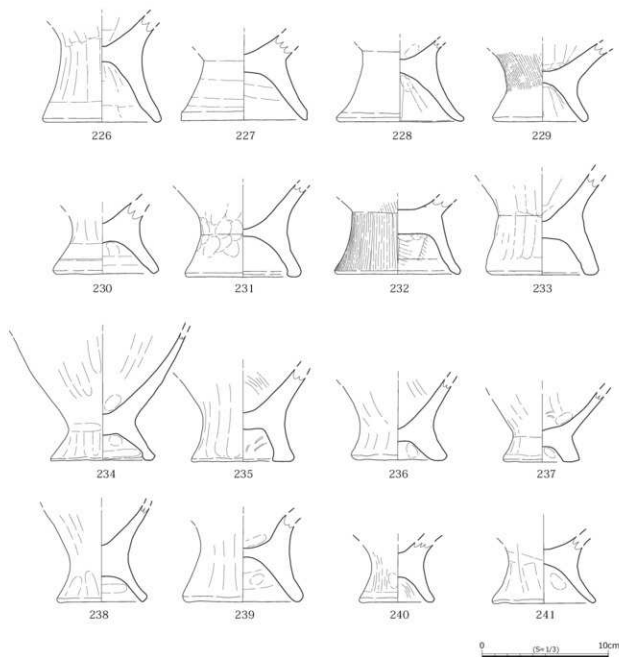


図75 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 55

ト状に開くもので、胴下部の器壁の厚さに比べて、脚部の器壁が薄い。189は脚部がやや踏ん張る形で、接地面が平坦となる。194から313は脚内面の天井形態が丸みをもつか緩やかな平坦面をもつものである。197は脚部外面からの焼成後穿孔がみられる。

200は脚部がハの字に開くもので、胴部との接合部分にはユビオサエがみられる。204は短く開く脚部で、底部厚が3.0cmとやや厚い。

212は先細りする脚部で、底部との境に接合線

を確認できる。213は脚内外面に連続したユビオサエが多くみられる。218は脚部高3.5cm、脚部径8.8cmを測り、外面には摩擦しているがハケ調整がみられる。脚内面の天井形態は平坦である。

220は底部厚が2.1cmと厚く、脚部は短く開く。221はやや丸みを持つ胴下部と脚部との境に明瞭な段を有する。223は脚内面の天井部が丸みもち、成形時のユビオサエが明瞭に残る。225は胴部と脚部の境が筒状となり、底部厚が3.3cmを測

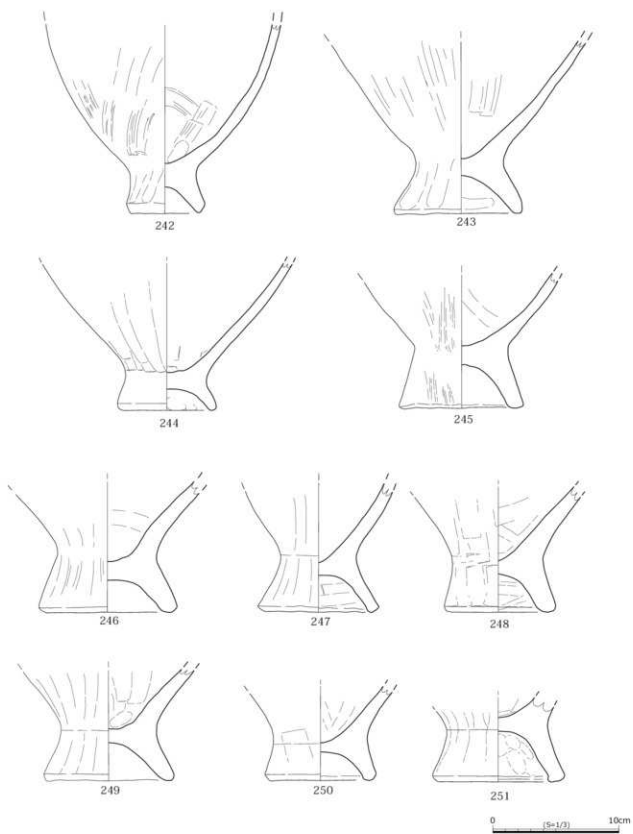


図76 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 56

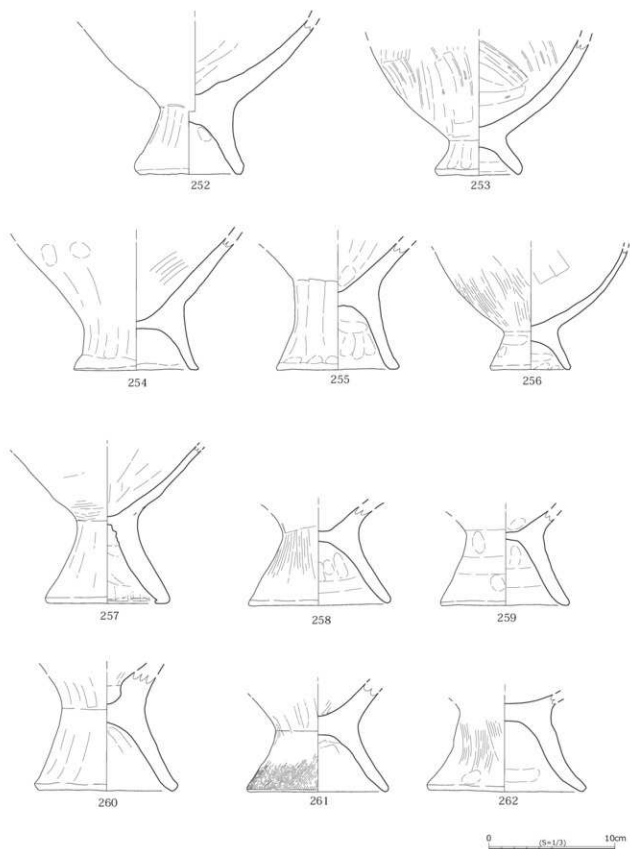


図77 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 57

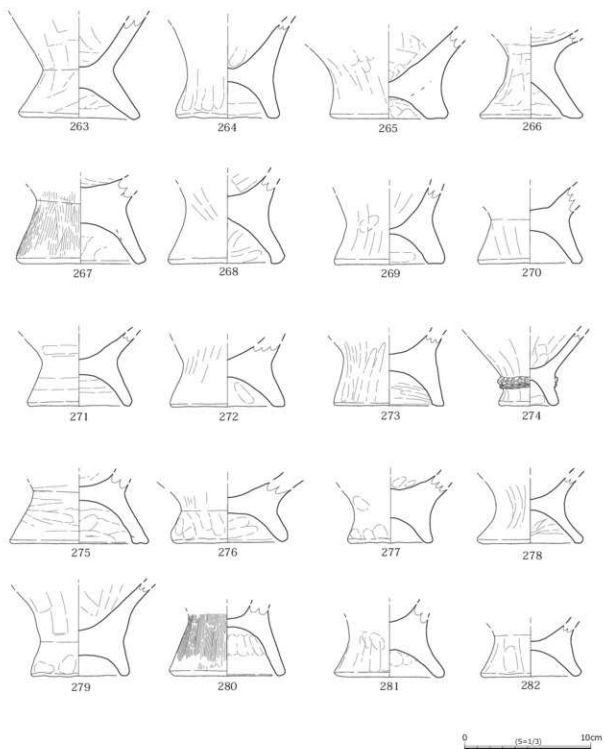


図78 土器集中廃棄所 出土遺物(雙) 58

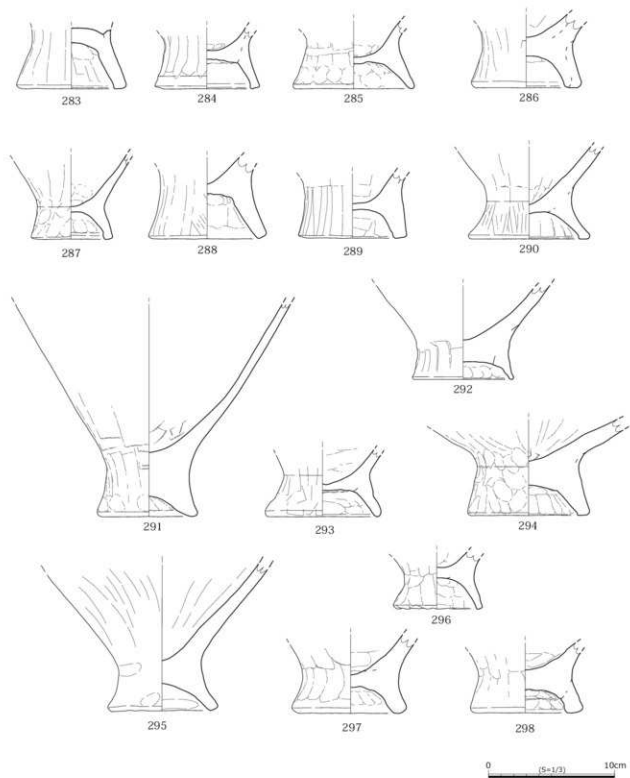


図 79 土器集中廃棄所 出土遺物 (獲) 59

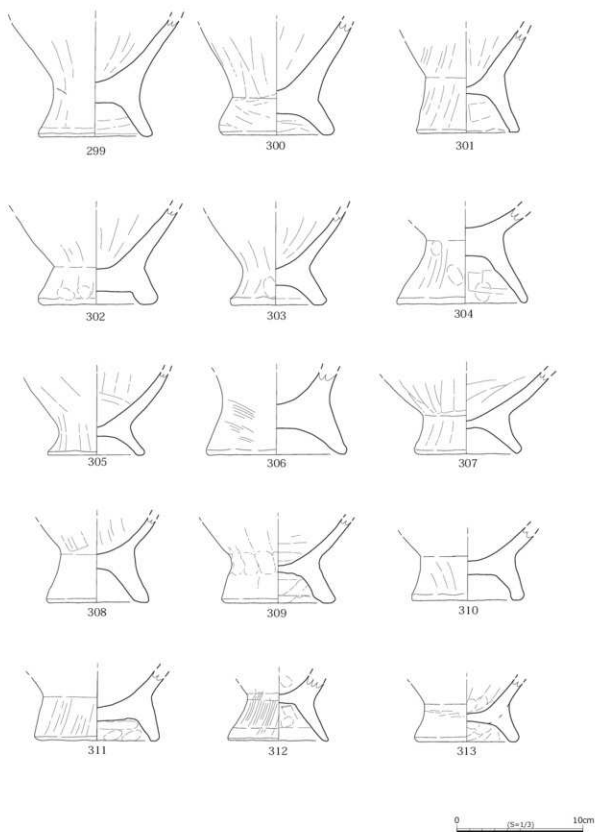


図80 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 60

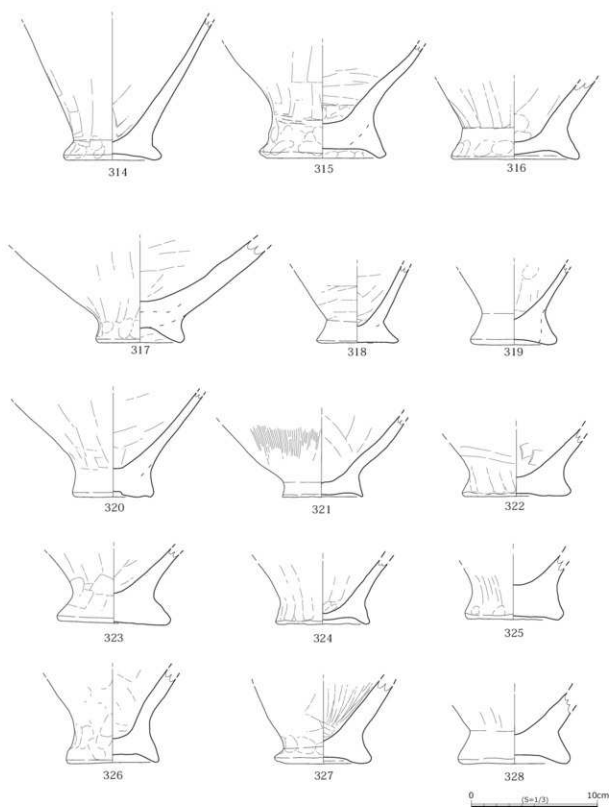


図81 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 61

る。脚部はハの字に開く。227は脚部外面に横方向の工具ナデ痕跡がみられる。

231は脚端部が内面に突出部をもつ。232は脚外面に縦方向の丁寧なハケ調整がみえる。234は脚端部内面がくぼみを持つ。235は脚内面の天井部が平坦で、脚端部内面に突出部をもつ。237は接地面が平坦で、器壁がやや厚い。

242は胴下部が丸みをおび、脚部は短く直線的に開く。底径5.2cm、脚部高3.5cm、脚部径6.2cmを測る。244の脚部はやや踏ん張った形をしており、脚端部は丸みをもつ。胴下部には縦方向のナデ調整がみられる。245は脚部が直線的に開くもので、脚部内面の天井形態はドーム状を呈する。247は脚部が直線的に開き、端部がコの字を呈する。脚部内面にはナデ調整がみられ、天井形態はドーム状である。

251は直線的に開く脚部で、脚端部はコの字を呈するが、内面に突出部をもつ。252はやや歪んだ脚部で、胴部との接合部に工具痕跡がみられる。253は丸みをもつ脚部で、胴下部は縦方向のケズリ調整がみられる。脚部は短く開き、底径4.5cm、脚部高2.9cm、脚部径7.0cmを測る。254は胴部との境が屈曲しながら接合する脚部である。脚部内面の天井形態は平坦面を有する。257は脚部高6.5cmと他の脚台と比較してやや高い。胴部との接合時の粘土貼り付けによって、接合部分に膨らみをもつ。底径4.8cm、脚部径9.8cmを測り、スカート状に広がる。脚部接地面は平坦面をもち、内面に突出部をもつ。

260はハの字に開くもので、胴部内面はユビオサエによるくぼみが明瞭に残る。261はハの字に開く脚台で、外面にはやや細かなハケ調整がみられる。265は短く開く脚部で、接地面が平坦である。底部との接合線がみられる。266は底径がやや小さい脚部で、直線的に開く。269は踏ん張った形を呈する脚部で、底部厚が0.3cmと薄い。

273はほとんど開きが見られない脚部で、端部はコの字を呈する。脚部内面の天井形態はドーム状である。274は短く開く脚部で、胴部との接合部分に2条の刻目突帯がめぐる。275はやや踏ん張りながら開く脚部で、接地面にくぼみをもつ。279はほとんど開きが見られない脚部で、底部厚が

1.8cmと厚い。

280は直線的に開く脚部で、外面には丁寧なハケ調整、内面は連続したユビオサエの痕がみられる。284は直線的に開く脚部で、脚端部にわずかにくぼみをもつ。脚部外面はやや幅の広い工具ナデ調整が縦方向に入る。胴部との接合線を観察すると、一度平底の底部を作り出してから、そこに粘土を付加する形で脚台を作り出していることがわかる。そのため、脚部内面の天井形態は平坦になる。285は直線的に開く脚部で、端部に向かって先細りになる。286は脚部外面に粘土を貼り付けた痕跡がみられる。287は踏ん張る形の脚部形態で、脚部内面の天井形態はドーム状である。

290はハの字に開く脚部形態で、接地面は平坦になる。脚端部は内面に突出部をもつ。291は短く開く脚部形態で、底径6.5cm、脚部高3.7cm、脚部径7.9cmを測り、底部厚は3.3cmと厚い。外面には工具ナデの痕跡がみえる。294は直線的に開く脚部で、胴部は大きく開きながら立ち上がる。外面には脚部接合時のユビオサエが明瞭に残る。295は直線的に開くもので、脚部内面の天井形態はドーム状になる。298は短く開く脚部形態で、上げ底状の底部に粘土を付加している接合線が確認できる。脚部内面にはユビオサエが明瞭に残る。299は脚部内面が平坦になるものである。

302は短い脚部をもつもので、脚部内面は平坦になる。304は直線的に開くもので、脚部は端部に向かって先細りになる。脚部内面は平坦になる。307は大きく開きながら立ち上がる胴部を持ち、胴下部には工具ナデの痕跡が見られる。309は直線的に開く脚部で、胴部との接合部に連続したユビオサエ痕が確認できる。

310は脚部内面が平坦になるもので、脚部は踏ん張る形になる。311は短く直線的に開く脚部形態で、脚部内面はゆるやかな平坦部を有する。313はやや丸みをもつ底部形態に脚部が接合するもので、脚端部は丸みをもつ。314から545は脚部が低いもの、上げ底状になるものである。314は直線的に開く胴部をもつもので、短く脚部が貼り付けられる。315は平らな底部に断面三角形を呈する脚部が貼り付けられるもので、脚部外面にはユビオサエが多く見られる。317は大きく開く胴部を持

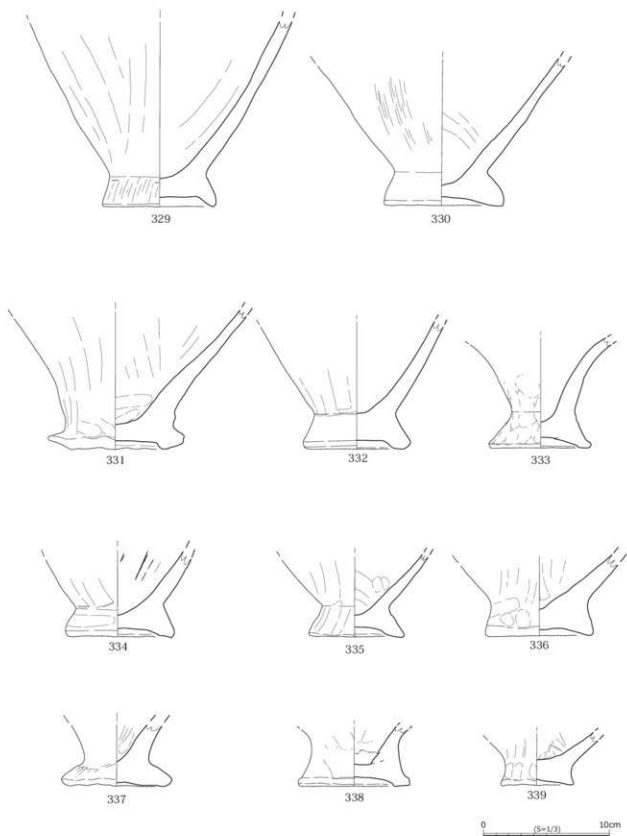


図82 土器集中廃棄所 出土遺物 (礎) 62

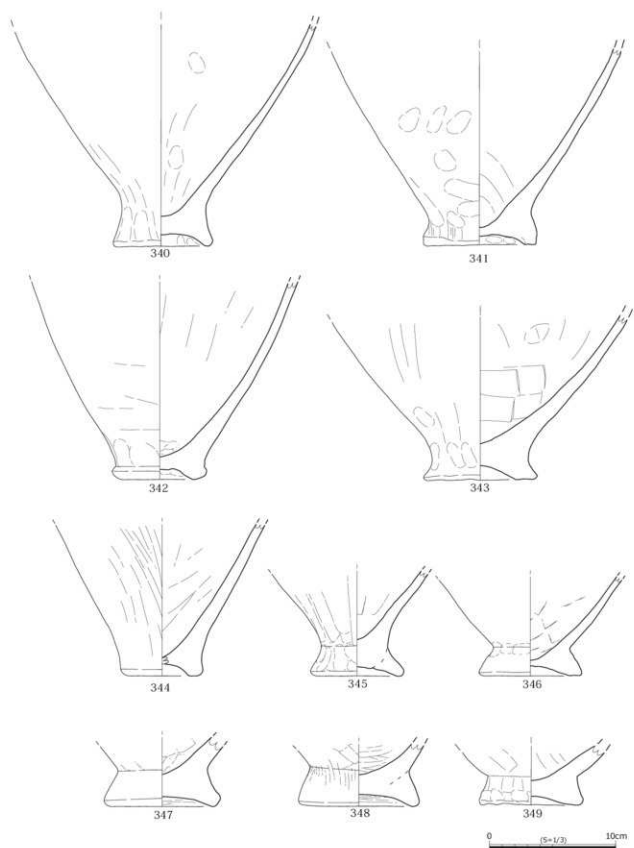


図83 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 63

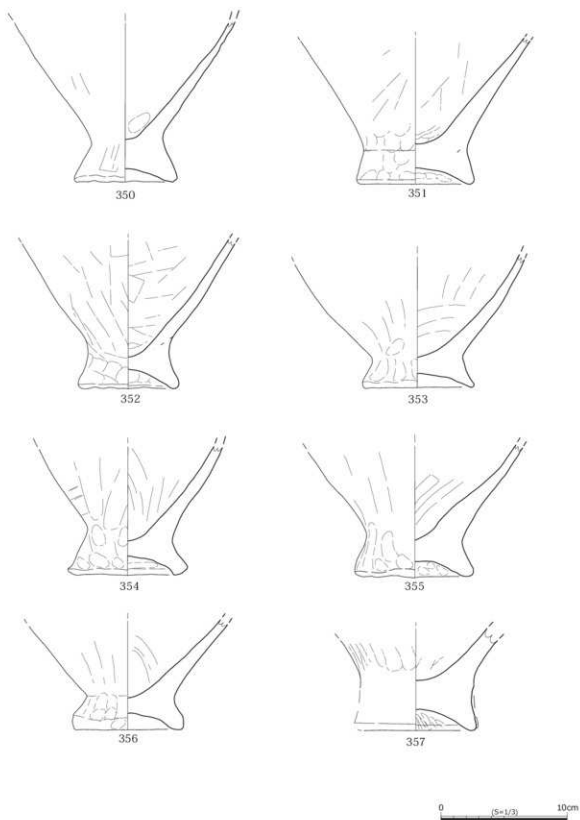


図84 土器集中廃棄所 出土遺物(號) 64

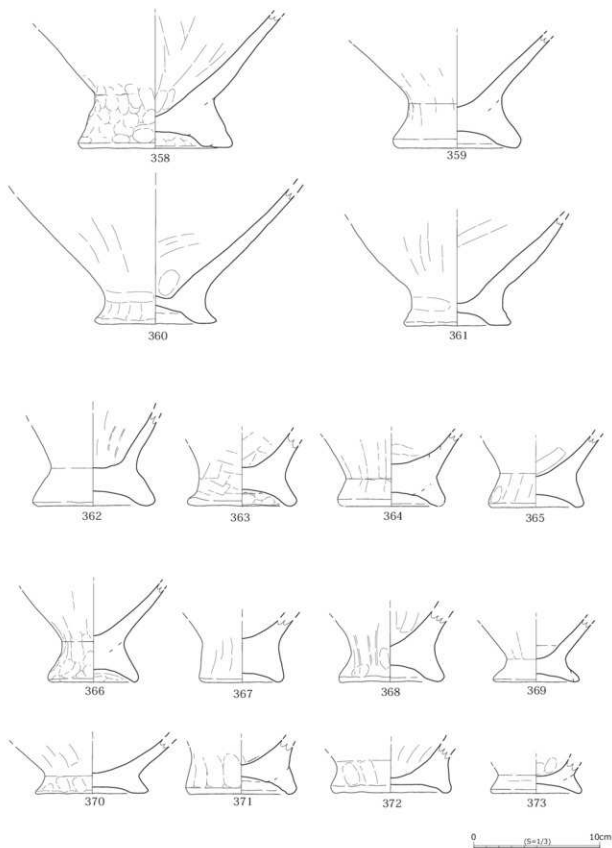


図85 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 65

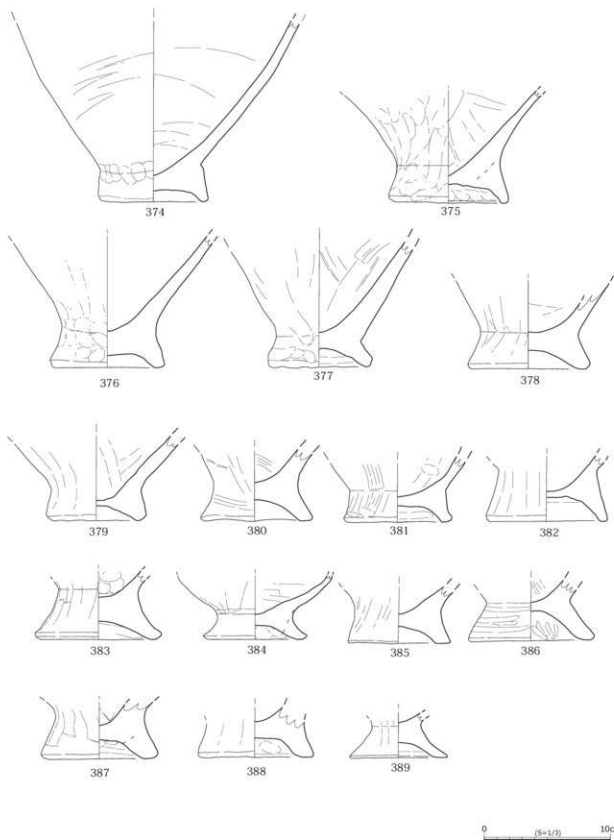


図86 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 66

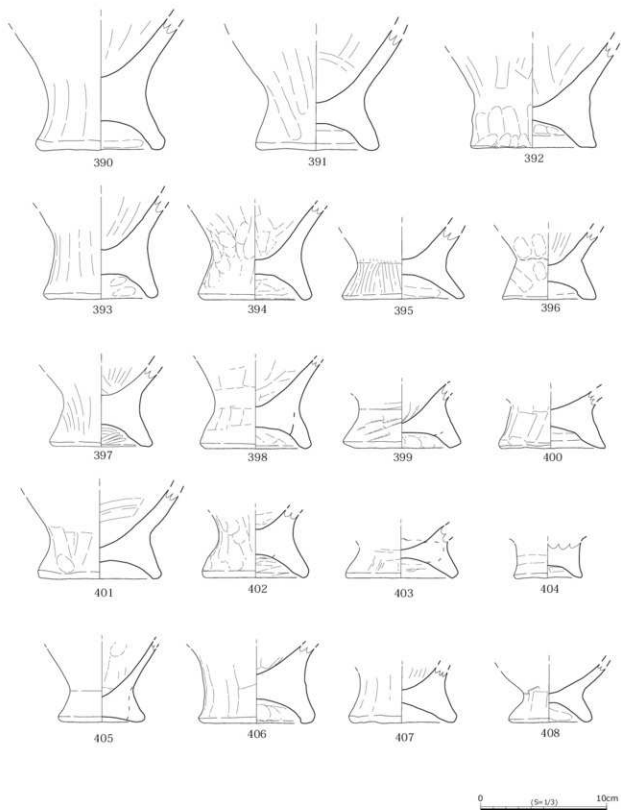


図87 土器集中廃棄所 出土遺物（筧）67

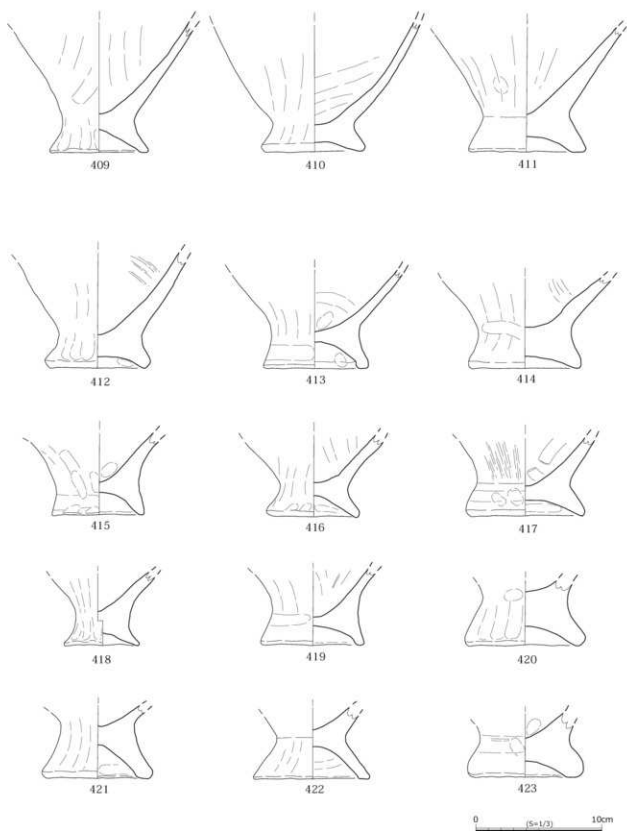


図88 土器集中廃棄所 出土遺物 (襲) 68

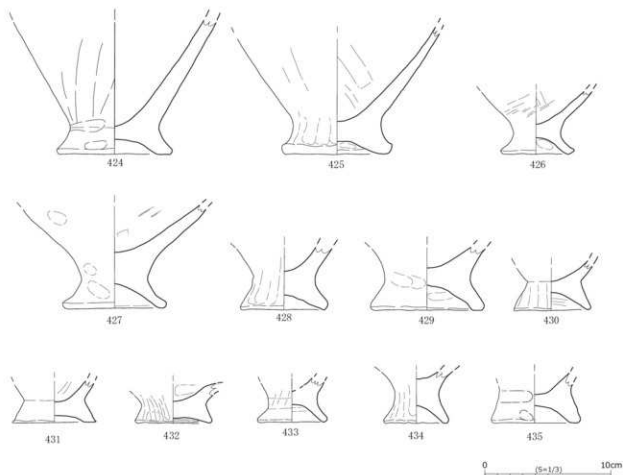


図89 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 69

つ襲で、断面三角形になる脚部が貼り付けられる。318はほぼ平底に近く、台形状に脚部が貼り付けられる。319は上げ底状の平底外面に脚部が貼り付けられるものである。

320は脚部中央にわずかにくぼみを持つ脚台である。321は器部内面中央部がくぼむもので、断面三角形の脚部が貼り付けられる。322は脚台中央部がわずかに上げ底状になる。325はほとんど脚部が開かないものである。326は平底外面に断面三角形の脚部が貼り付けられ、脚部内面の天井形態は平坦になる。外面には成形時のユビオサエが明瞭に残る。327は器部内面に縦方向のミガキ調整がみられる。329は平底外面にやや垂下気味の脚部が貼り付けられる。

331は平底外面に不正形の脚部が貼り付けられる。脚部は歪みが大きい。333は胴下部がラッパ

状に開きながら立ち上がるもので、脚部は接地面が平坦になる。334は底部外面に断面三角形の脚部が貼り付けられ、脚部と胴部の接合部には明瞭な稜線がみられる。337は脚部が外面に大きく突出するもので、底面には歪みがみられる。338は踏ん張った形態の脚部で、接地面は平坦になる。

342はほとんど開きのない脚部で、短い脚部が貼り付けられる。343は接地面が平たい脚部で、脚部内面の天井形態は丸みをおびる。344は上げ底状の底部を持つもので、開きはほとんどない。345は平底外面に先細りする脚部が貼り付けられるものである。346は断面三角形の脚部が貼り付けられ、胴部との境には明瞭な稜線がみられる。349の脚部は上げ底状になり、端部はゆがみがみられる。

351は断面三角形の脚部が貼り付けられ、外面にはユビオサエがみられる。353は丸みをもつ胴

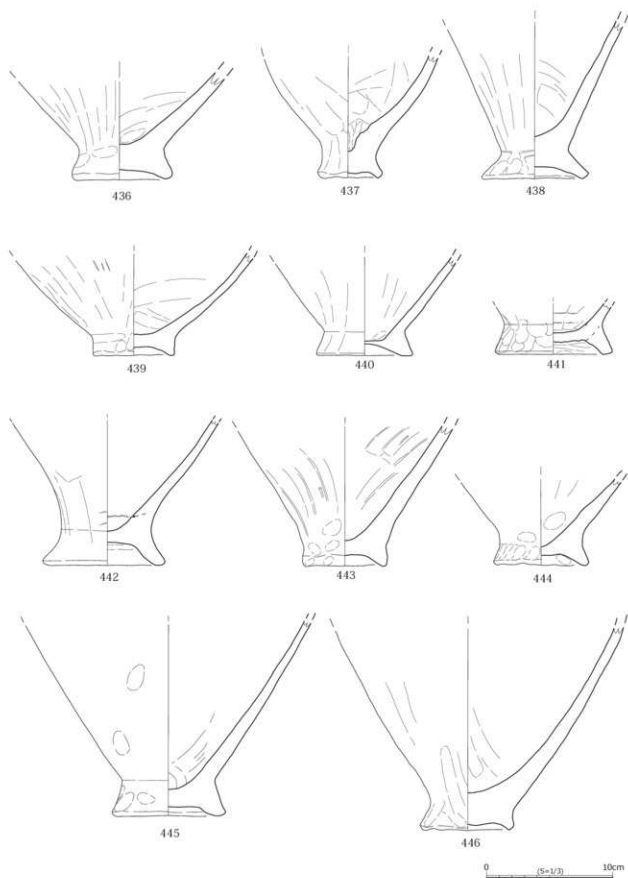


図90 土器集中廃棄所 出土遺物(瓿)70

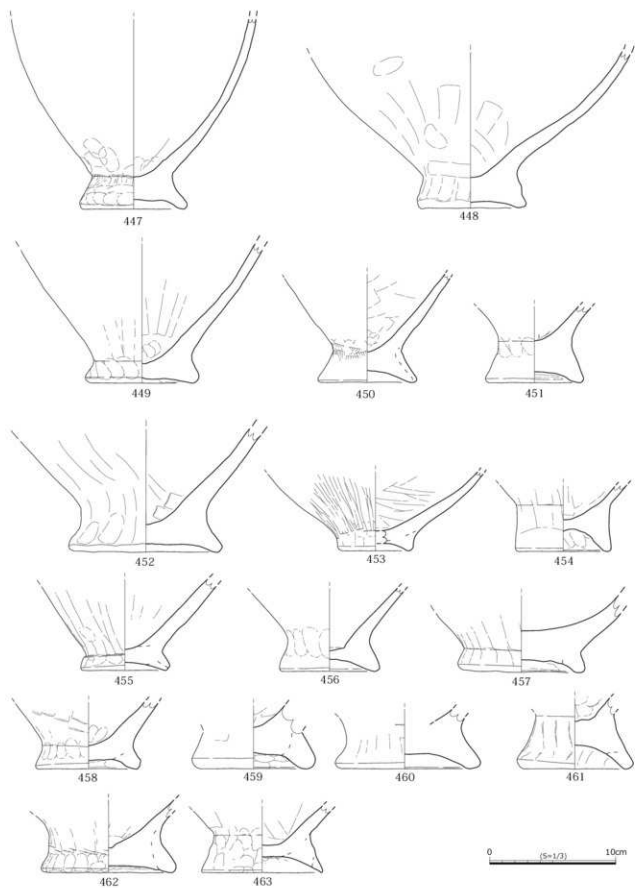


图 91 土器集中廃棄所 出土遺物 (獲) 71

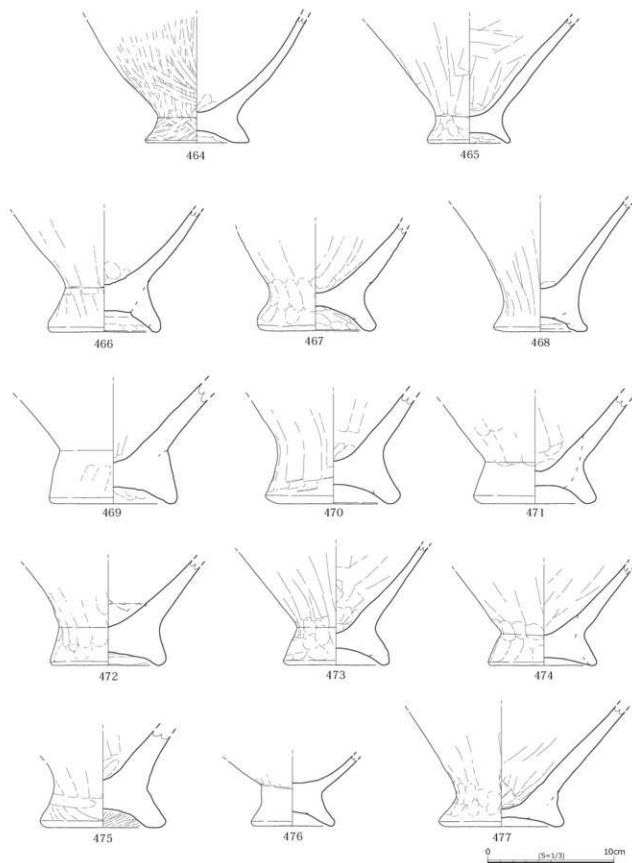


図92 土器集中廃棄所 出土遺物(號)72

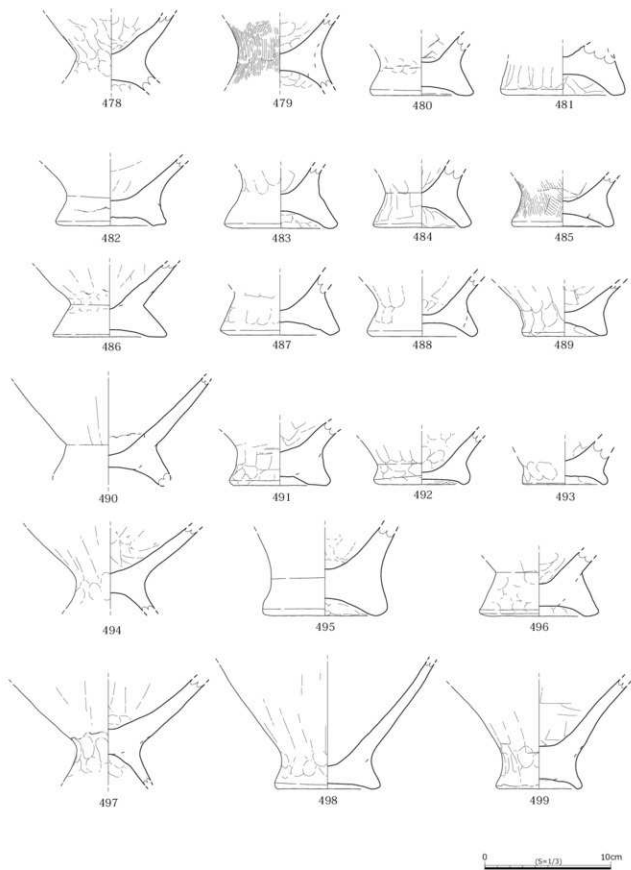


図93 土器集中廃棄所 出土遺物(箋)73

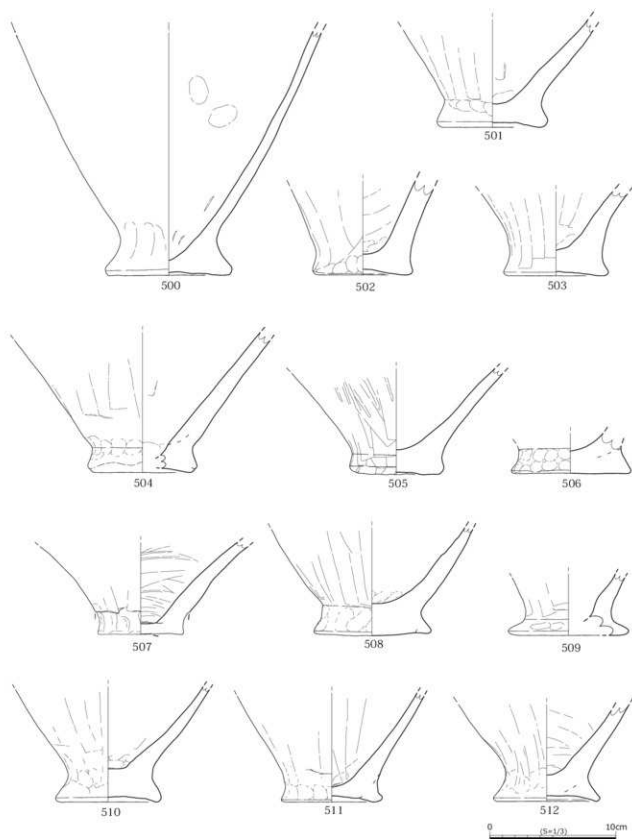


図94 土器集中廃棄所 出土遺物(獲)74

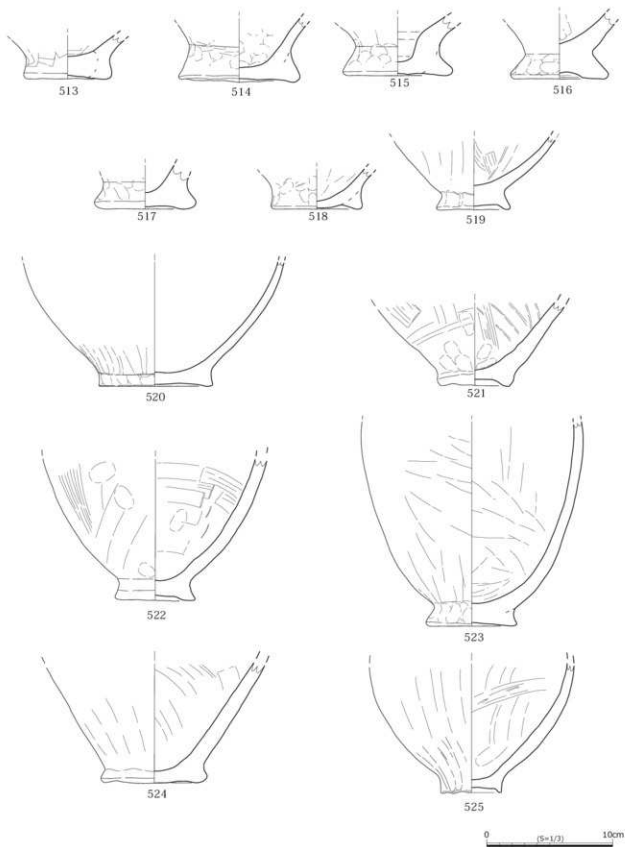


圖 95 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 75

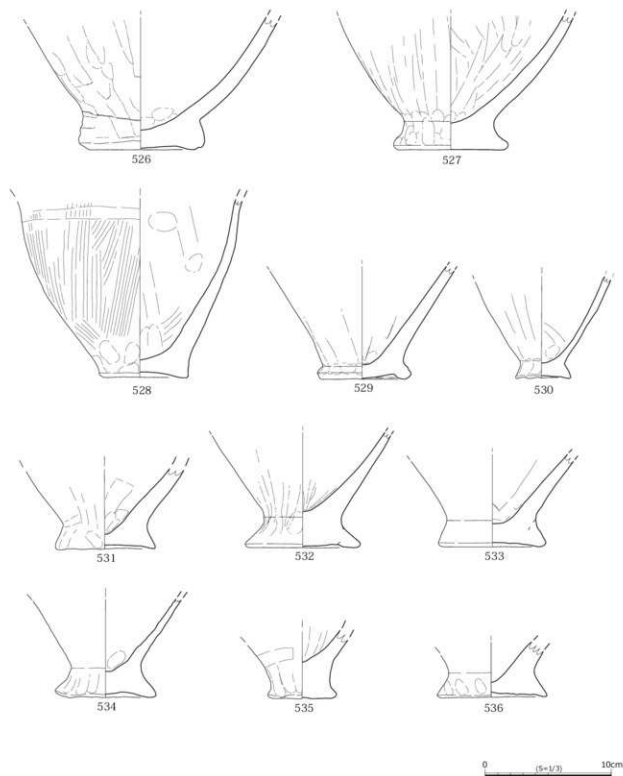


図96 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 76

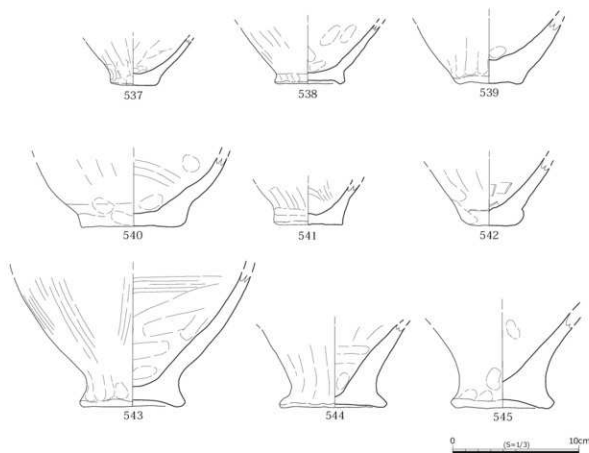


図97 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 77

部に脚端部に向けて先細りになる脚部が貼り付けられる。354は脚端部がコの字を呈するもので、外面には明瞭な稜線を持つ。357はほとんど開きのない脚部である。358は底径9.4cm、脚部高4.0cm、脚部径12.2cmを測り、粘土を複数回に分けて付加していることが確認でき、外面には成形時のユビオサエの痕跡が明瞭に残る。

360は大きく開く胴部をもち、脚部は短くハの字に開く。361は接地面が平坦になる。362はやや踏ん張り気味の脚部で、胴部との接合部分に明瞭な稜線を持つ。364は丸底に近い底部に端部が丸みをもつ脚部が貼り付けられる。367はほとんど開きのない脚部で、脚部内面は上げ底状になる。369はハの字に開く脚部で、端部には粘土を付加した痕跡がみられる。

370は上げ底状の脚部である。374はやや踏ん張り気味の脚部で、あまり開きはみられない。端部

は丸みをもち、胴部との接合部分には連続したユビオサエがみられる。375は脚部内面に接合時のユビオサエが残る。377は胴部との境に明瞭な稜線をもち、端部は歪みをもつ。379は底部厚が薄く、底部外面に断面三角形になる脚部が貼り付けられる。

380は接地面が平坦になる。384は碗状の胴部に、ハの字に開く脚部をもつ。脚端部はやや反り返り、粘土を付加した痕跡がみられる。385は接地面が平坦で、外面には明瞭な稜線を持つ。386は直線的に開く脚部で、脚部内面の天井形態はゆるやかな平坦面を有し、外面にはミガキ調整がみられる。389はハの字に開くややこぶりな脚部で、接地面は平坦になる。

390は直線的に開く脚部で、端部は丸みを持つ。392はほとんど開きのない脚部で、接地面には平坦面をもつ。外面にはユビオサエの痕跡が残る。396

は胴部との境に明瞭な稜線を持ち、やや踏ん張り気味に開く脚部である。397は脚部内面にミガキ調整がみられる。

400は断面三角形の脚部が貼り付けられる。403は直線的に開く脚部で、端部はコの字を呈する。404はほとんど開きのない脚部である。406は端部が丸みをもつ脚部で、脚部内面には成形時の連続したユビオサエがみられる。408は椀状の胴部をもつもので、胴部との境には明瞭な稜線を持つ。

410は脚部内面の天井形態が平坦になるもので、脚部は断面三角形になる。411は脚部内面の天井形態がドーム状を呈し、接地面は平坦面を有する。412は脚部外面に成形時のユビオサエが残る。413は踏ん張った形態の脚部で、端部付近で屈曲する。415は直線的に開く脚部で、端部にかけて先細りになる。417は脚部外面にヨコナデ調整がみられる。418は底部厚が1.5cmと厚く、脚部はハの字に小さく開く。

420はやや厚みのある脚部で、底部厚2.7cmを測る。422は接地面が平坦で、胴部との境に明瞭な稜線を持つ。423は丸みをもつ脚部で、脚部の器壁が2.1cmと厚い。425は端部が反り返るもので、脚部内面の天井形態は平坦になる。426はハの字に開く脚部で、端部はコの字になる。427はハの字に開く脚部で、端部は丸い。底部厚は2.4cmと厚い。

430は椀状の胴部に先細りになる脚部が貼り付けられる。432は上げ底状の脚部である。437は内底面に深い切りがみられるもので、脚部は上げ底状になる。底部厚は1.9cmを測る。438は直線的に立ち上がる胴部をもつ甕で、端部がコの字になる脚部を有する。脚部は低く開き、脚部と胴部の境には強い稜線をもつ。

440は底部厚が薄いもので、厚さ0.2cmを測る。内底面の形状は平らになる。441は平底の甕に踏ん張り気味になる脚部が貼り付けられるもので、胴部と脚部の接合部にはユビオサエが多く残る。脚部径9.3cm、脚部高2.3cmを測る。443はほとんど開きのない脚部で、形状は断面三角形を呈する。脚部径6.7cmを測る。445は断面三角形の脚部が短く開くもので、脚部内面の天井形態は平らになる。447は丸みをもつ胴部に、低い脚部が貼り付けら

れるもので、脚部高2.6cmを測る。胴部と脚部の境には強い稜線をもつ。脚部外面には成形時のユビオサエがみられる。

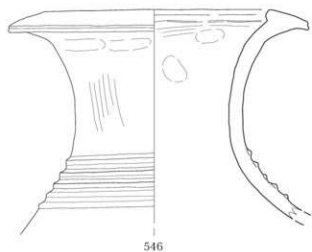
450は先細りする脚部で、底径5.5cm、脚部径7.8cm、脚部高2.5cmを測る。脚部外面には粘土を付加した痕跡がみられる。452は大型の脚部で、底径10.0cm、脚部径12.1cm、脚部高3.0cmを測る。453は丸底を呈する底部に断面三角形の底部が貼り付けられるもので、胴部下半には縦方向の工具ナデ調整がみられる。454はほとんど開きのない脚部で、外面からは筒状にみえる。底径7.4cm、脚部径7.6cm、脚部高3.4cmを測る。457は内底面の形状がまるみをもつもので、短い脚部が貼り付けられる。底部厚2.2cmを測る。459は断面が丸みをもつ脚部で、脚部内面にはユビオサエが明瞭に残る。

462は脚外面に粘土が貼り付けられるもので、脚部外面には貼付け時のユビオサエがみられる。463は平底の底部に断面三角形の脚部が貼り付けられるもので、底径7.6cm、脚部径9.6cm、脚部高3.0cmを測る。脚部端部は鋭利になる。464は接地面が平らになる脚部で接地面の幅は1.3cmである。外面には細かなミガキ調整が不定方向にみられる。466は平底の底部にやや踏ん張り気味の脚部が貼り付けられるもので、脚部と胴部の境には明瞭な稜線をもつ。468はハの字に開く脚部で、胴部は反りながら開く。469は脚部断面が三角形を呈するもので、底径8.5cm、脚部径10.1cm、脚部高4.2cmを測る。

471は底部中央に粘土貼り付けの痕跡が見られるものである。脚部内面の天井形態は平らになる。473は内底面がえぐるもので、連続したユビオサエがみられる。底径6.2cm、脚部径7.4cm、脚部高3.0cmを測る。474は脚部形態が断面三角形を呈するもので、脚部と胴部の境には粘土を貼り付けた痕跡がみられる。476は胴下半部が椀状を呈するもので、底部厚は2.1cmと厚い。479は脚部外面にハケ調整がみられる。

482は接地面が平らになるもので、接地面の幅は0.9cmを測る。外面には脚部の接合線がみられる。486は胴部と脚部の境に明瞭な稜線を持つもので、接合時のユビオサエが明瞭に残る。

491は脚部が短く開くもので、接地面は平らに



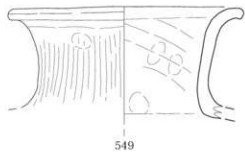
546



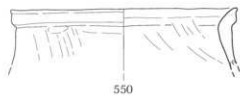
547



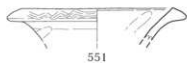
548



549



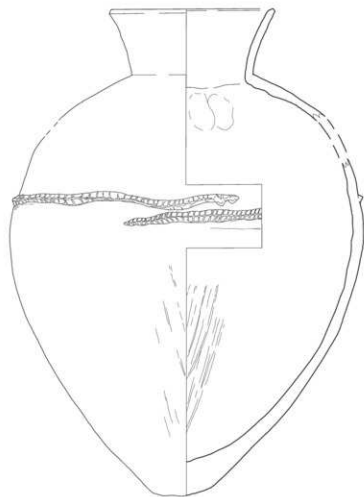
550



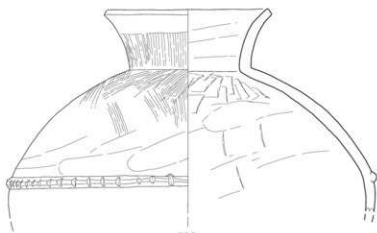
551

0 (5=1/3) 10cm

図98 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 1



552



553

0 (5=1/3) 10cm

図99 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 2

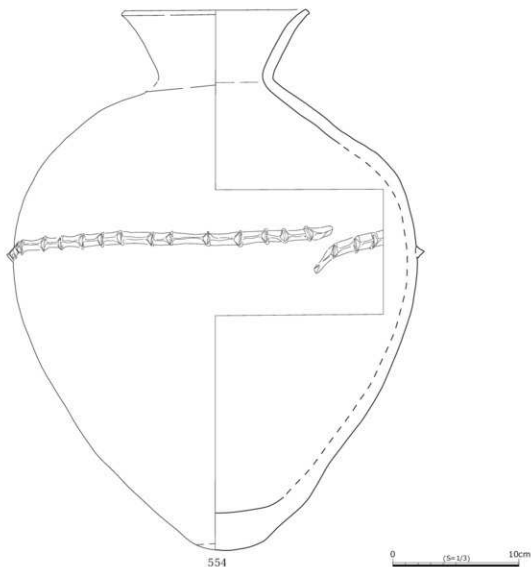


図100 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)3

なる。接地面の幅は1.3cmを測る。492は内外面ともユビオサエが明瞭に残る。

500は脚部がくびれた平底状になるもので、高さはほとんどない。502は上げ底状を呈する底部で、脚部はわずかに開く。506は脚台状の底部で、底面は平底になる。外面にはユビオサエがみられる。507は平底の底部に脚部が貼り付けられ、その脚部が剥落したものである。底部成形時の形跡が明瞭に残り、内部には工具ナデ調整がみられる。508は脚部がくびれた平底状になるもので、底面はゆがみをもつ。底径8.0cm、脚部径9.3cm、脚部高2.4cmを測る。

515は内底面が大きくえぐれるもので、脚部内

面は上げ底状になる。518は丸底の底部に断面三角形の脚部が貼り付けられるもので、脚部内面の天井部が脚接地面とかなり近い。

520は胴下半部が球胴状を呈するもので、短い脚部が貼り付けられる。523は砲弾状の胴部に脚部が貼り付けられる。脚外面にはユビオサエが明瞭に残る。525は球胴状の胴部に、脚部が短く貼り付けられる。脚部は開きがほとんどなく、内底面はくぼみをもつ。527は丸みを持つ胴部にくびれた平底状の脚部が貼り付けられるものである。

530は脚部形態が断面三角形になるもので、底径が3.5cmと小さい。532は脚部が先細りになるもので、脚部の途中から粘土貼り付けの痕跡がみら

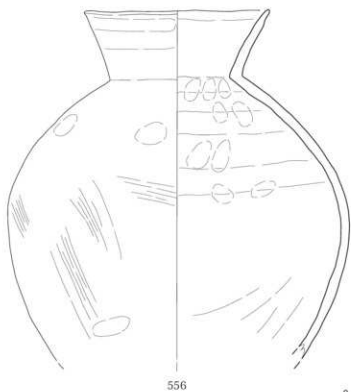
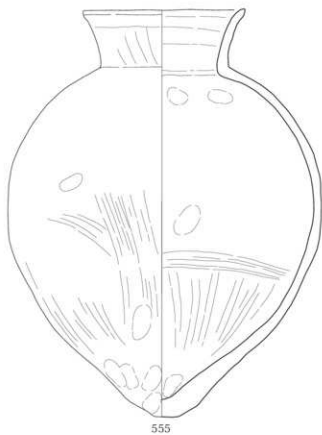


図 101 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 4

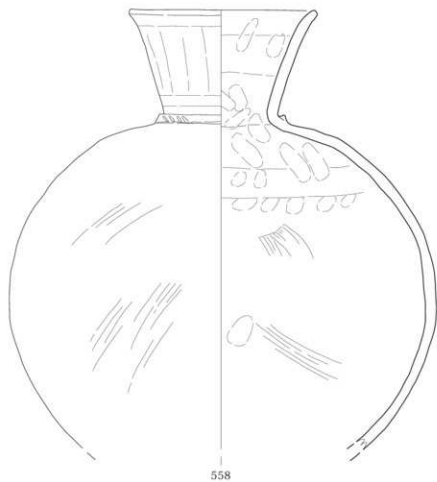
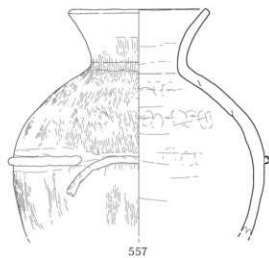


图 102 土器集中廃棄所 出土遺物（壺）5

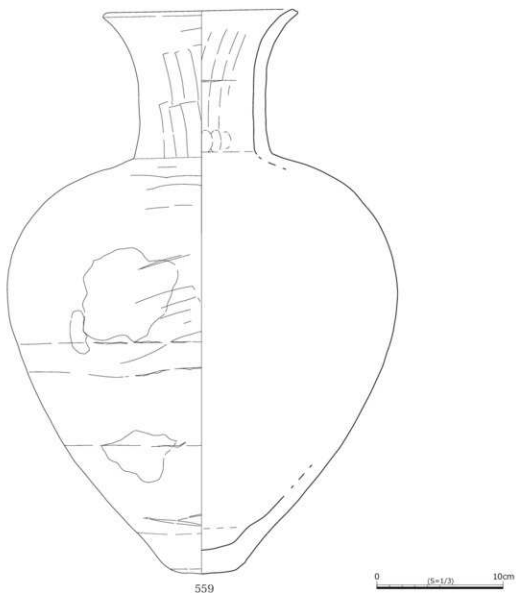


図103 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 6

れる。底径6.1cm, 脚部径9.1cm, 脚部高2.3cmを測る。535は中実の脚部である。

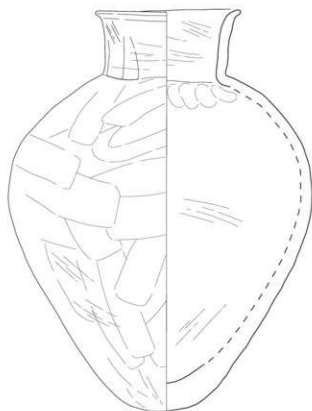
540は丸底の底部に突出部をもつもので、底径8.0cmを測る。542は底部外面に粘土を貼り付け脚台状にしたもので、底径4.0cmを測る。544はほとんど高さのない脚部で、内底面にはくぼみをもつ。

(2) 壺

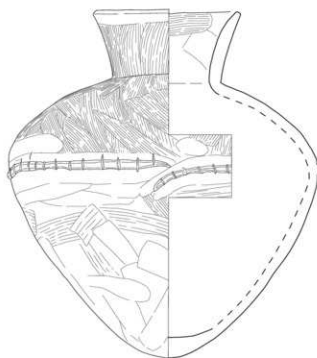
546から551は弥生時代に位置づけられる壺である。

546はへの字口縁をもち、内面に突出部をもつ。端部にはくぼみをもち、外方に大きく張り出す。頸部には5状の貼付突帯をもち、丁寧なヨコナデがみられる。色調は内面2.5YR5/6明赤褐、外面2.5YR5/6明赤褐である。547はへの字口縁をもち、端部はコの字を呈する。口縁部は内面にわずかに突出する。頸部には確認できるだけで1条の突帯を有する。548は二叉状の口縁で、丁寧なヨコナデがみられる。口縁部上面が上方に突出する。549はラッパ状に大きく外反する口縁部で、口縁端部は丁寧なヨコナデがみられる。

550は短く外反する口縁部で、端部にはくぼみ



560



561

0 (5=1/3) 10cm

図104 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)7

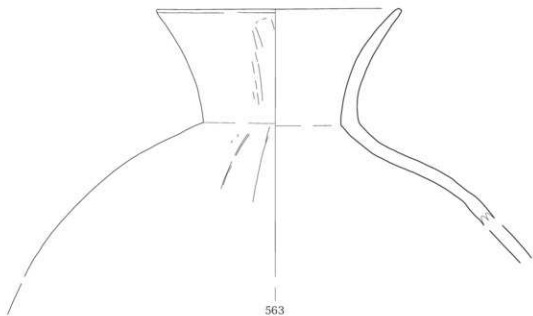
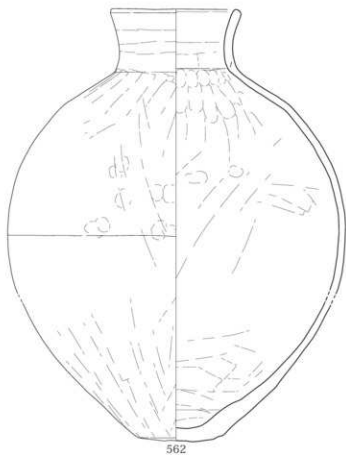
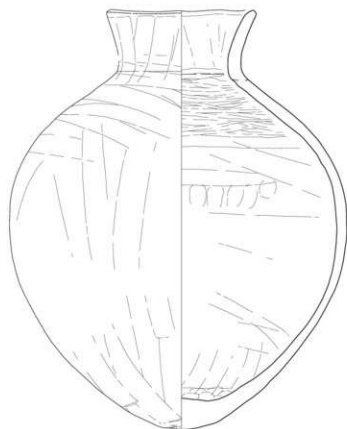
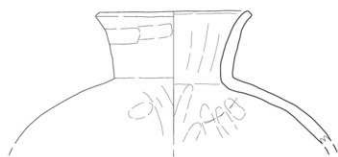


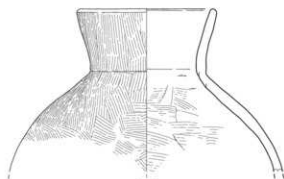
図 105 土器集中廃棄所 出土遺物（壺）8



564



565



566



图106 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)9

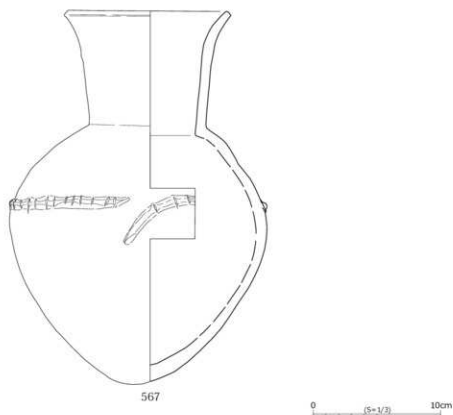
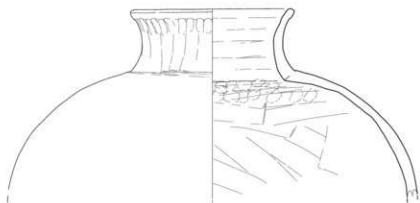


図 107 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 10

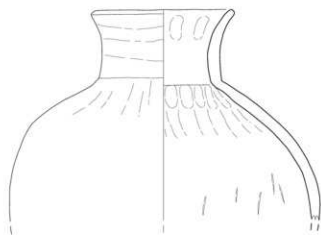
をもつ。551は外方に突出する口縁部で、上面には3条の柳描波状文をもつ。552は口径13.2cm、器高38.6cm、頸部径9.6cm、胴部最大径27.9cmを測る。胴部最大径よりやや高い位置に絡縄突帯が貼り付けられる。この突帯は接合すること無く、すれ違いながら右側が下方を通る。底部は底径の小さな平底である。553は口径13.3cm、頸部径9.6cm、胴部最大径28.8cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、端部はコの字を呈する。口縁部外面は縦方向のハケ調整後に口縁部に丁寧なヨコナデがみられる。胴部最大径よりやや高い位置に1条の刻目突帯がみられる。554は口径14.4cm、器高43.0cm、頸部径9.0cm、胴部最大径31.8cmを測る丸底の壺である。頸部はくの字に屈曲し、直線的に立ち上がる。口唇部はコの字を呈する。胴部最大径部分に接合しない刻目突帯を有し、右側が下方へのびる。底部厚は2.7cmとやや厚い。555は口径12.9cm、器高32.4cm、頸部径9.9cm、胴部最大径24.6cmを測る。頸部はくの字に屈曲し、口唇部は丸みをもつ。

胴部は球胴状で無文である。底部形態は径の小さな平底を有する。

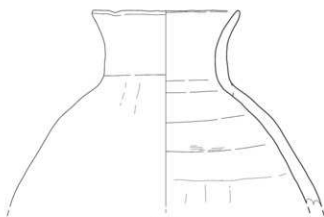
556はくの字に強く屈曲する頸部を有し、内面には強い稜線がみられる。口径14.7cm、頸部径10.2cm、胴部最大径27.0cmを測り、胴部は球胴形である。肩部内面には接合線が明瞭にみられ、成形時のユビオサエが残る。557は口径11.2cmのややこぶりな壺で、胴部には1条の絡縄突帯が巡る。この突帯は接合することなく、右側が下方へのびるタイプのものである。外面は摩滅しているが、丁寧なハケ調整がみられる。558は球胴形の胴部を有し、口径15.0cm、頸部径8.7cm、胴部最大径33.6cmを測る。胴部は無文だが、頸部には1条の貼付突帯を有し、突帯内には刻目が施される。口縁部は直線的に立ち上がるもので、口唇部は丁寧なヨコナデ調整がみられる。559は口径15.5cm、器高44.8cm、底径4.5cm、頸部径9.9cm、胴部最大径30.9cmを測る。肩部がやや張る形態で、口縁部はラッパ状に開きながら立ち上がる。底部は底部厚1.8cmを測



568



569



570



图 108 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 11

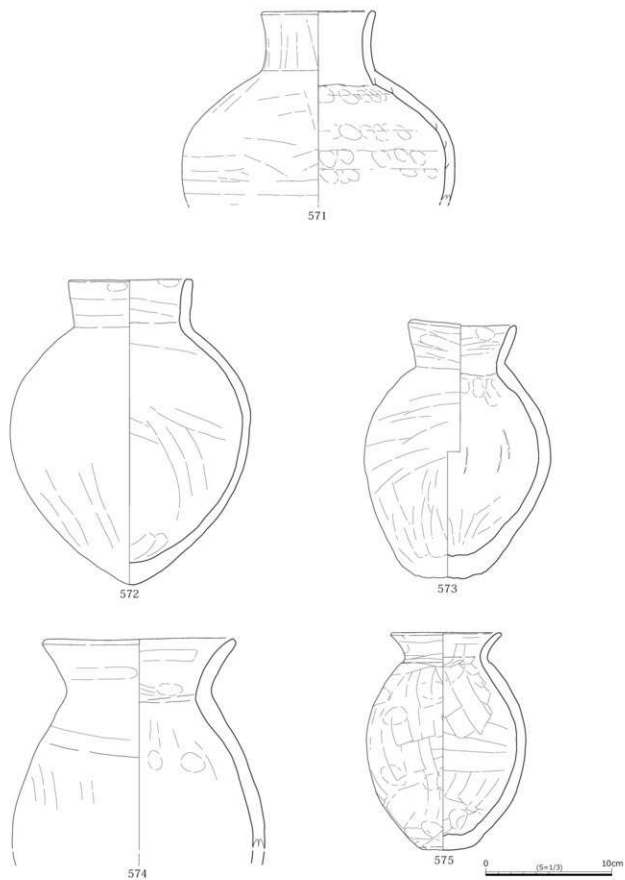
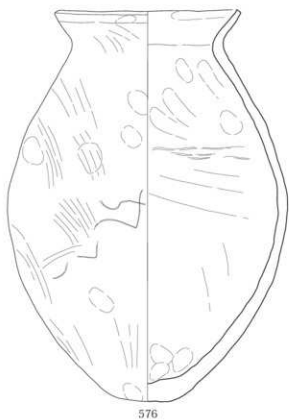
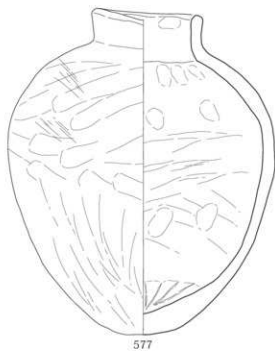


図 109 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 12



576



577



図110 土器集中廃棄所 出土遺物（壺）13

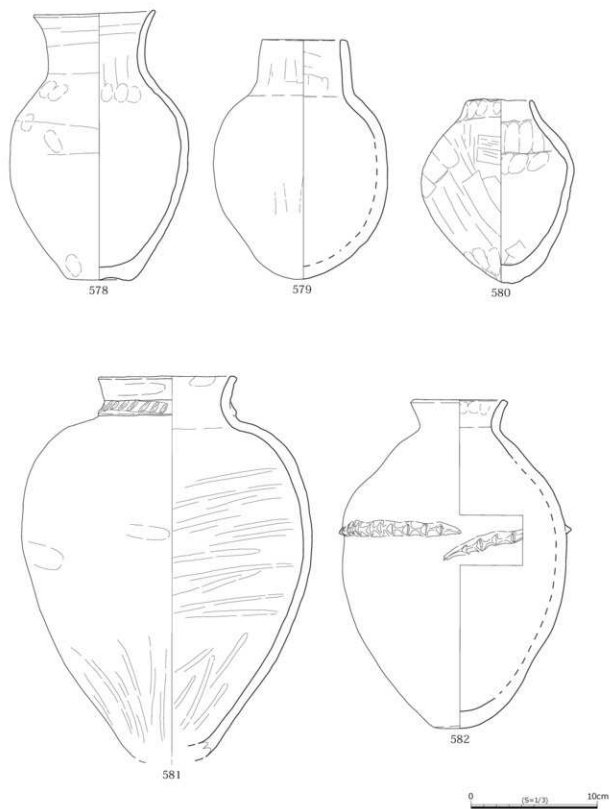
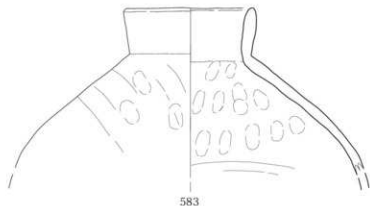


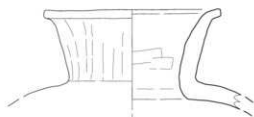
図 111 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 14



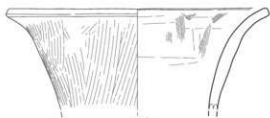
583



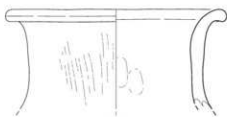
584



585



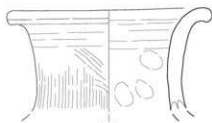
586



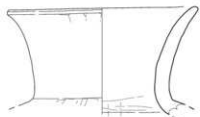
587



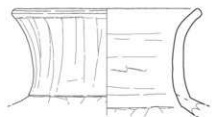
588



589



590



591

図 112 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 15

0 (5-1/3) 10cm

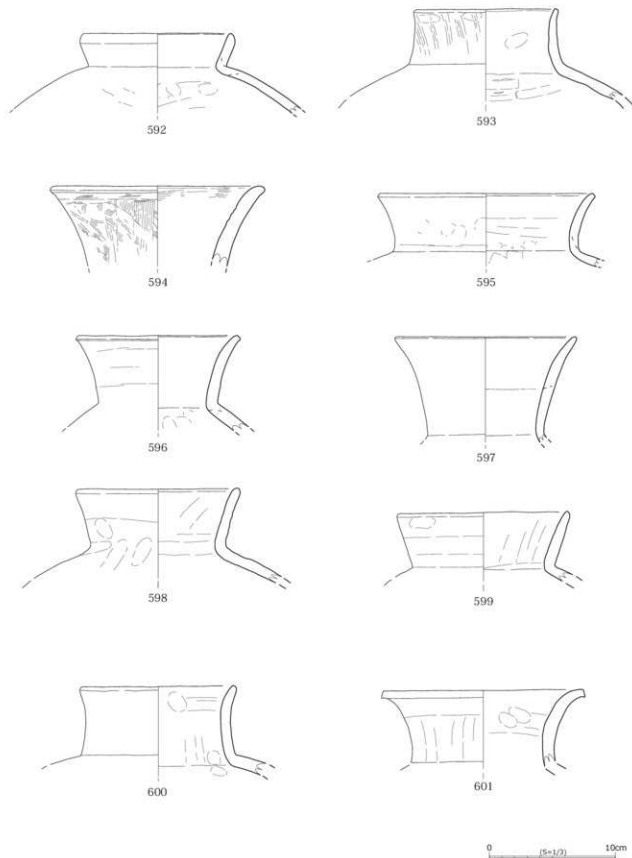


図 113 土器集中廃棄所 出土遺物（壺）16

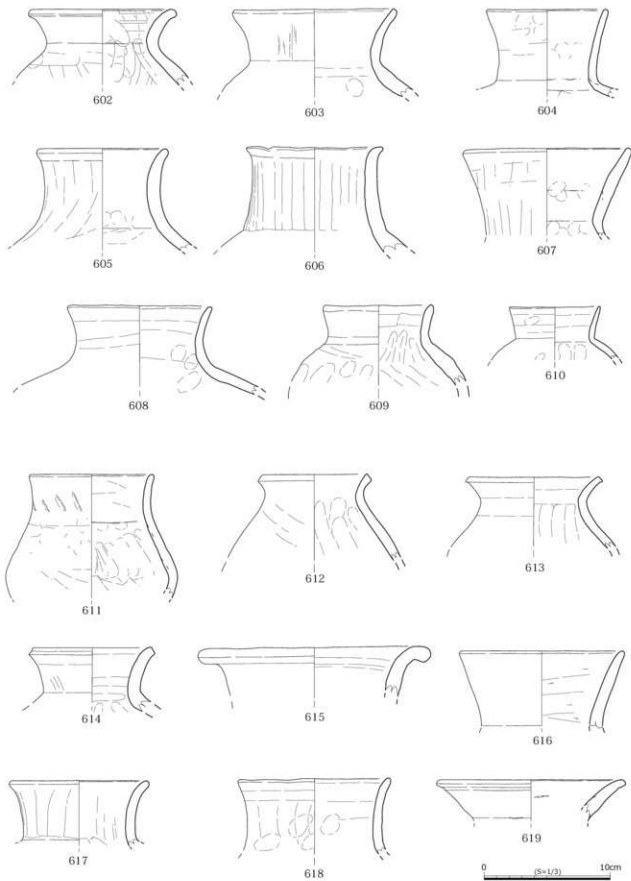


図 114 土器集中廃棄所 出土遺物 (西) 17

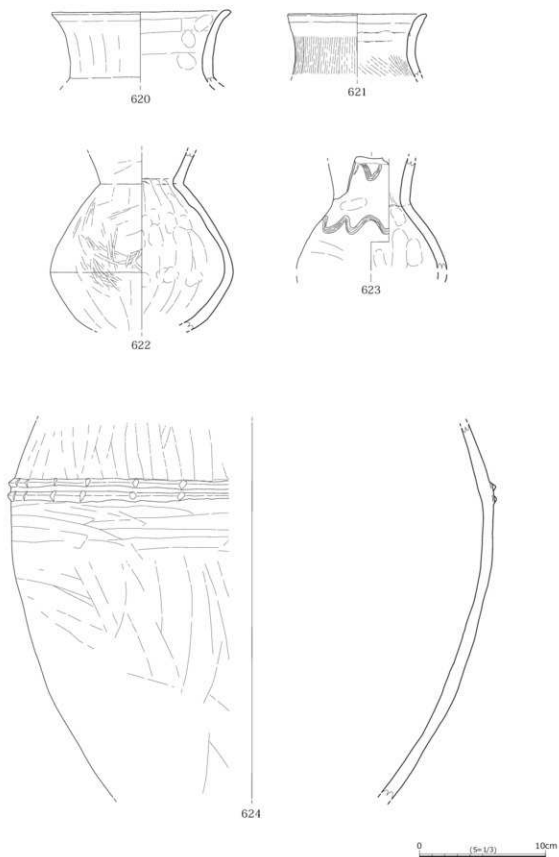
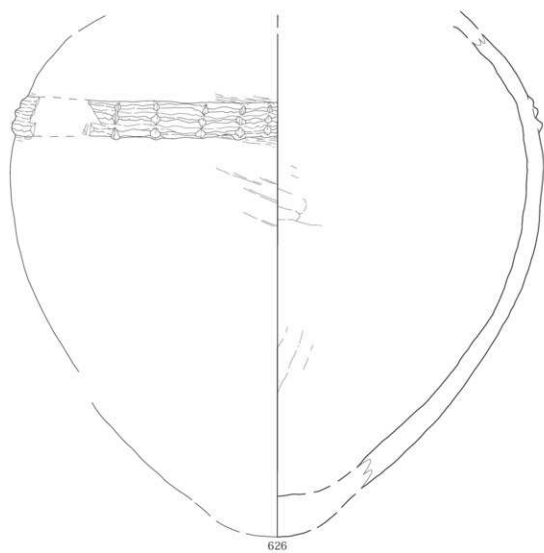
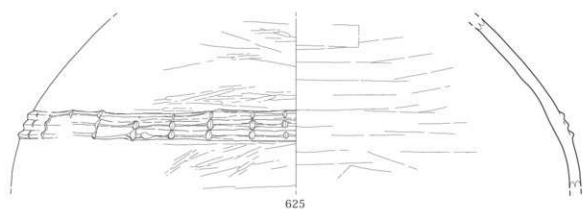


図 115 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 18



0 (5=1/3) 10cm

図116 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 19

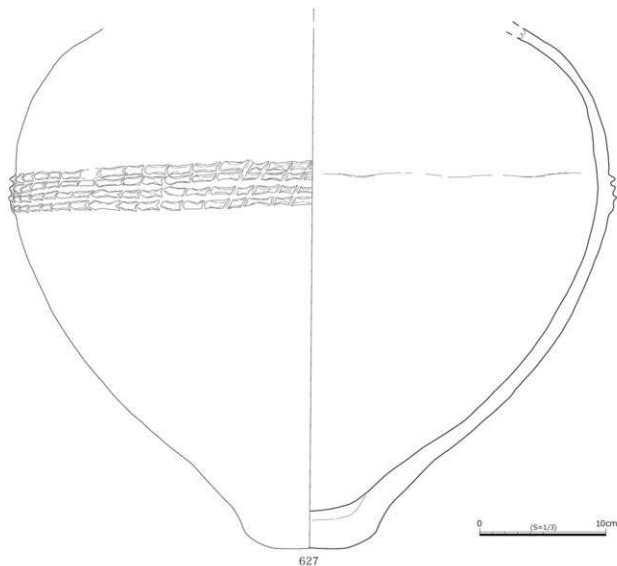


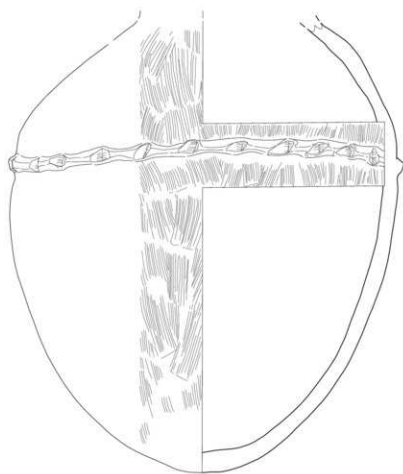
図 117 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 20

り、端部が丸みをもつ。

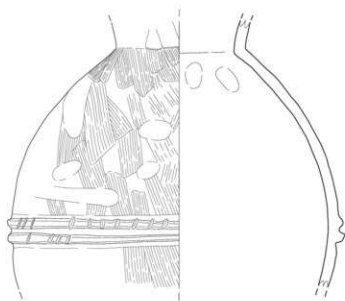
560 は直口気味に口縁部が立ち上がるもので、口径 11.5cm、器高 31.9cm、頸部径 9.6cm、胴部最大径 42.6cm を測る。底部は丸底である。口縁部は端部がわずかに屈曲する。外面全体に工具ナデ調整がみられる。561 は胴部が強く張り出すもので、口径 11.7cm、器高 27.7cm、頸部径 8.4cm、胴部最大径 24.3cm を測る。胴部最大径部分に 1 条の接合しない刻目突帯を有し、右側が下方へのびる。肩部・口縁部は丁寧なハケ調整だが、突帯下はナデ調整で仕上げられる。底部はやや尖り気味の底をもつ。562 は口縁部がすぼまりながら立ち上がるもので、

口径 10.4cm、器高 34.3cm、底径 6.8cm、頸部径 9.0cm、胴部最大径 26.7cm を測る。口縁部はヨコナデがみられる。肩部内面には成形時のユビオサエが残る。563 は口径 20.0cm、頸部径 12.3cm を測り、頸部内面には強い稜線をもつ。肩部はなで肩で丸みを持ちながらのびる。564 は口径 12.0cm、器高 33.3cm、頸部径 9.6cm、胴部最大径 26.7cm を測る無文の壺である。器面全体をナデ調整で仕上げる。底部厚は 2.4cm で、形態は丸底を呈する。

566 は直線的にのびる口縁部を有し、外面は丁寧なハケ調整がみられる。567 は長頸壺で、口径 12.1cm、器高 29.1cm、頸部径 9.0cm、頸部高 8.7cm、



628



629

0 (S=1/3) 10cm

图 118 土器集中廃棄所 出土遺物 (透) 21

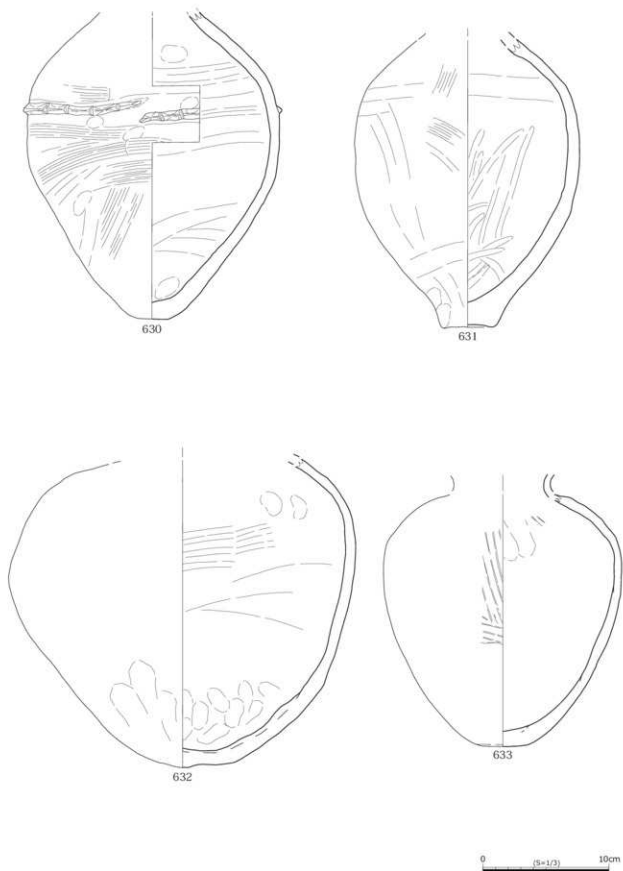


図 119 土器集中廃棄所 出土遺物 (表) 22

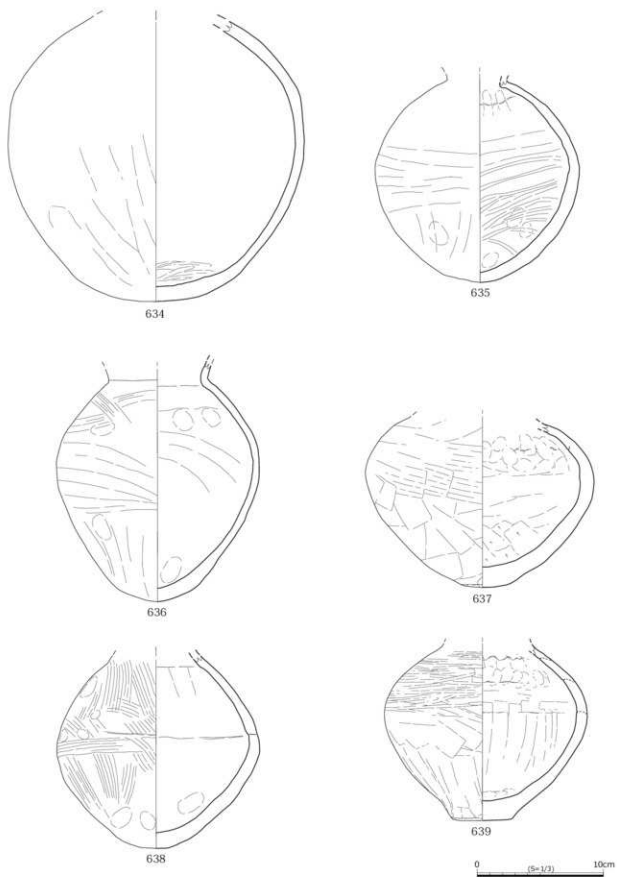


図120 土器集中廃棄所 出土遺物(西)23

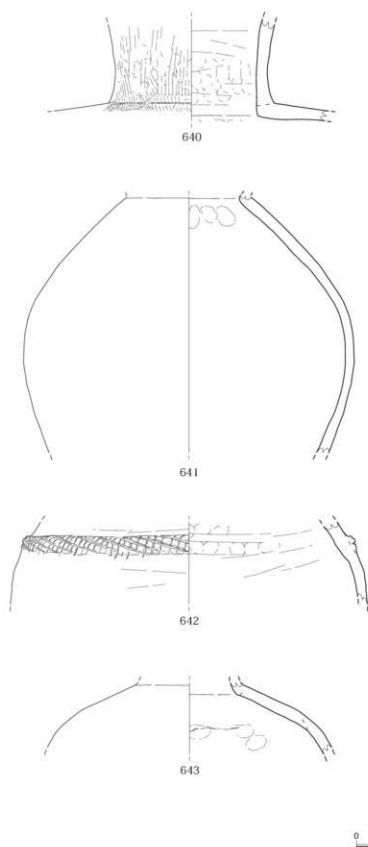


図 121 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 24

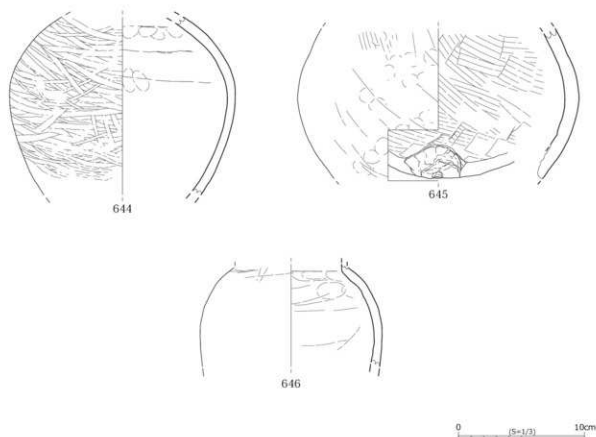


図 122 土器集中廃棄所 出土遺物 (西) 25

胴部最大径 20.1cm を測る。胴部最大径よりやや高い位置に接合しない刻目突帯を有し、右側が下方へのびる。頸部はラッパ状に開く。568 は肩部が張り、口縁部が短く立ち上がる壺で、口縁部に成形時の連続したユビオサエがみられる。

570 はなで肩の壺で、口径 11.8cm を測る。571 は直口気味の口縁部を有し、内面には接合線が明瞭にみられる。572 は直口する口縁部をもつもので、口径 9.8cm、器高 24.2cm、頸部径 9.3cm、胴部最大径 18.9cm を測る。底部は尖底である。573 は口径 8.1cm、器高 20.5cm、底径 5.5cm、頸部径 7.5cm、胴部最大径 14.7cm を測る小型の壺で、口縁部は直線的にのびる。底部はやや厚みがあり、端部がゆるやかな平底である。575 は口径 9.0cm、器高 17.3cm、頸部径 6.3cm、底径 4.5cm、胴部最大径 12.6cm を測る。無文で全体的にナデ調整である。

576 は口径 14.8cm、器高 31.0cm、頸部径 12.0cm、胴部最大径 21.9cm を測る壺で、口縁部は短く開

く。胴部外面にヘラ描による線刻をもつ。577 は口径 8.8cm、器高 25.8cm、頸部径 8.4cm、胴部最大径 21.0cm を測る直口壺で、底部はゆるやかな丸底をもつ。578 は口径 9.6cm、器高 21.2cm、底径 5.4cm、頸部径 7.5cm、胴部最大径 14.1cm を測る。頸部がやや長めで、ゆるやかに反外しながら立ち上がる。底部は上げ底になる。579 は直口する壺で、口径 7.0cm、器高 19.5cm、頸部径 7.5cm、胴部最大径 13.8cm を測る。底部は丸底となる。

580 は内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ小型壺で、口径 5.2cm、器高 14.7cm、頸部径 6.9cm、胴部最大径 12.0cm を測る。底部は尖底気味となり、内面には接合線がみられる。581 は肩部が張る壺で、口径 10.9cm、胴部最大径 22.8cm を測る。胴部は無文だが、頸部には刻目突帯を有する。器面全体が摩滅しているが、内面にはミガキ調整がみられる。582 は頸部がすぼまる壺で、口径 6.7cm、器高 26.0cm、頸部径 6.0cm、胴部最大径 17.7cm を

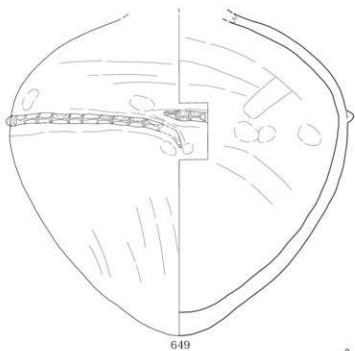
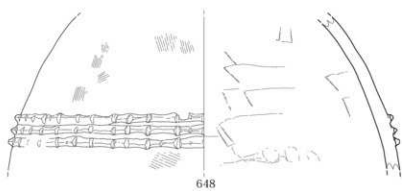
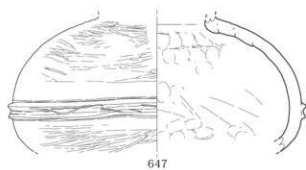
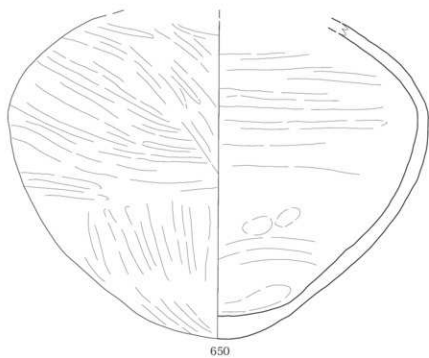


図 123 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 26



650



651



图 124 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 27

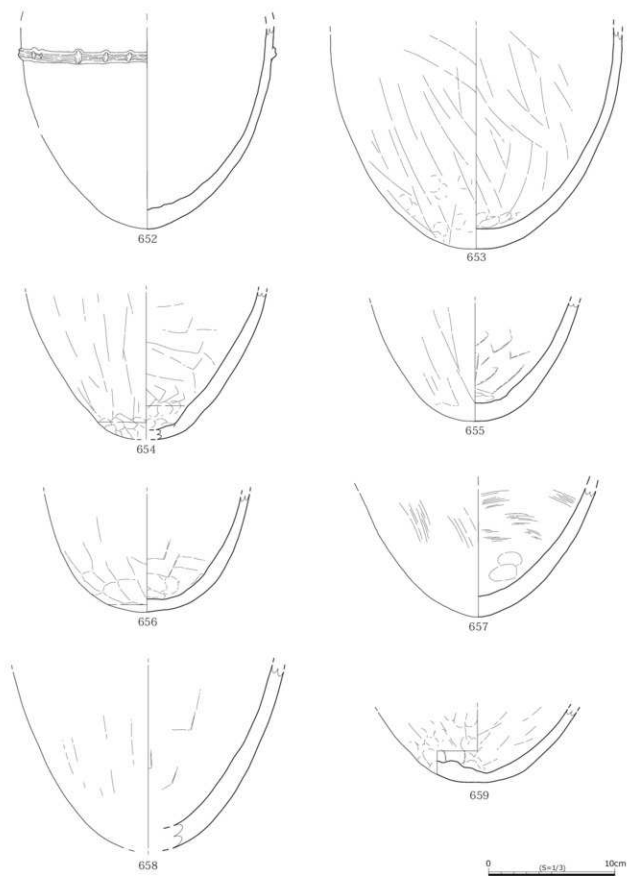


図 125 土器集中廃棄所 出土遺物 (巻) 28

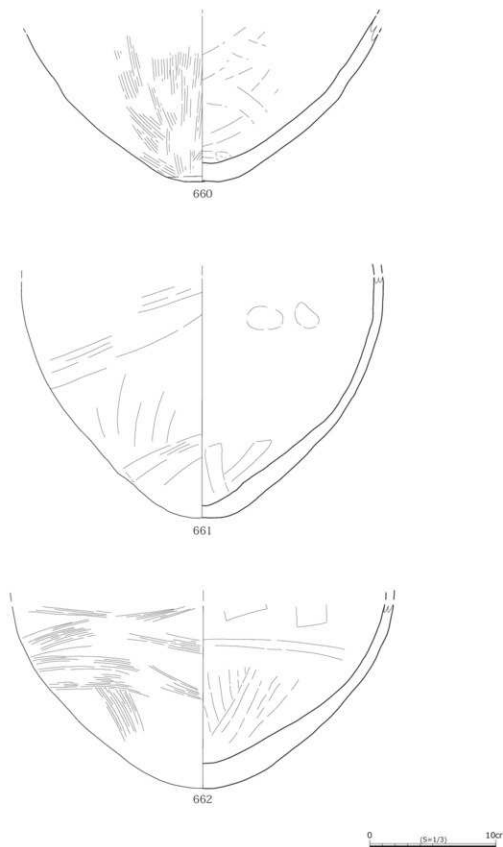


图 126 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 29

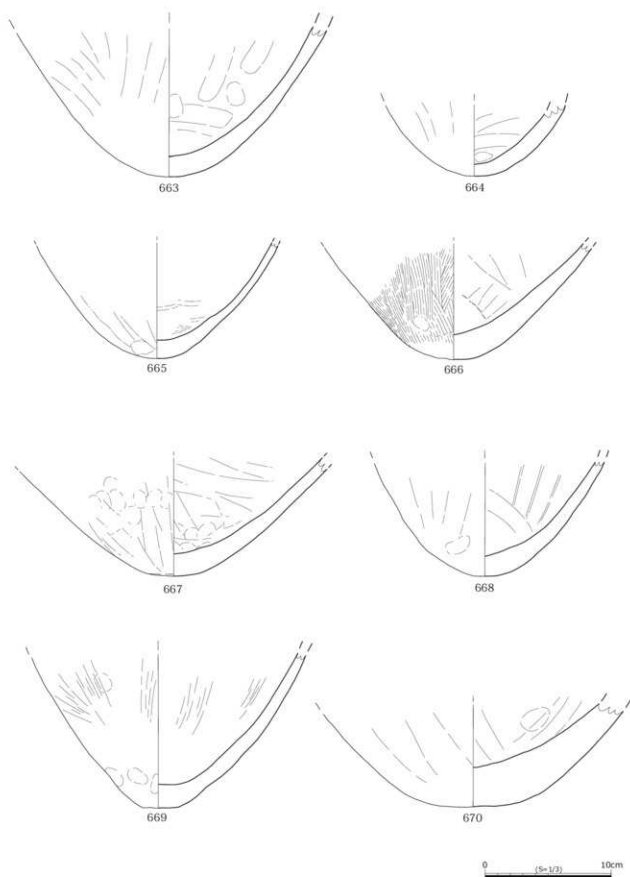


図 127 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 30

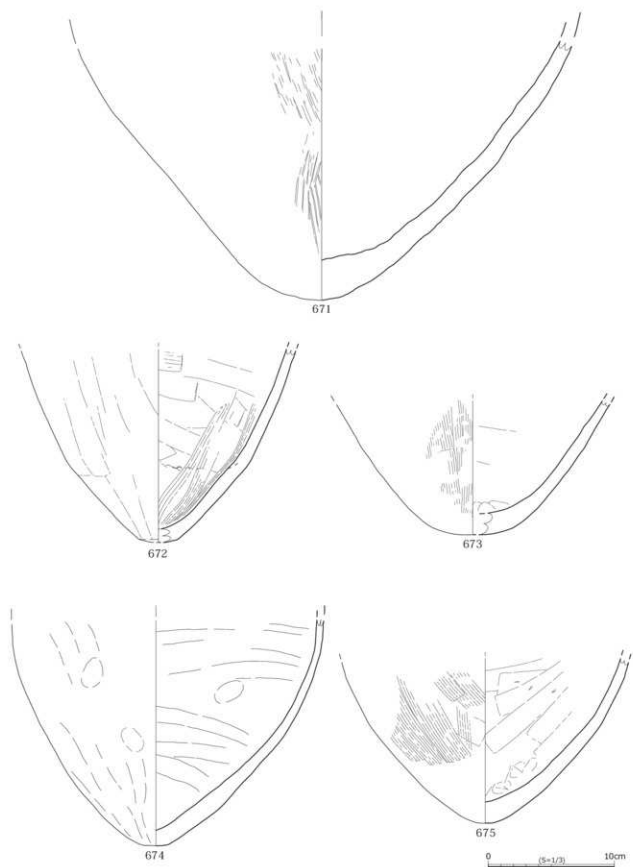


图 128 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 31

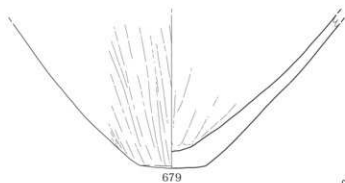
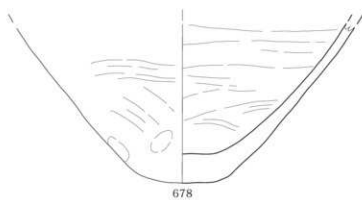
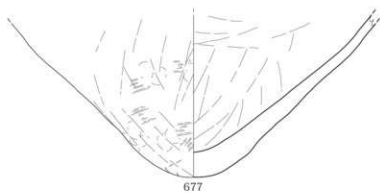
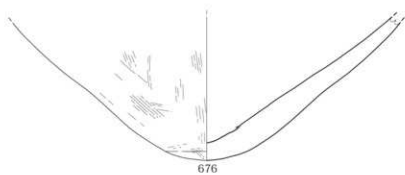


図 129 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 32

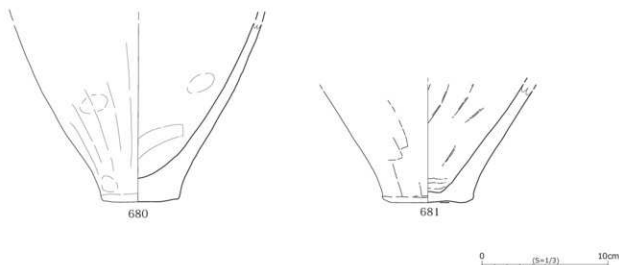


図130 土器集中廃棄所 出土遺物(壺) 33

測る。胴部最大径よりやや高い位置に1条の刻目突帯が貼り付けられる。この突帯は接合せず、右側が下方へびる。底部はゆるやかな丸底を呈する。583は直口壺で、肩部はなで肩になる。肩部内面にはユビオサエが残る。584は直線的に立ち上がる口縁部をもち、頸部はくの字に強く屈曲する。頸部内面には強い稜線を持つ。585は口縁部が開きながら立ち上がり、口唇部付近でわずかに屈曲する。

586はラッパ上に大きく開く口縁部で、口径20.8cmを測る。587は口縁部が反りながら開く。589は頸部から口唇部にかけて縦方向のハケ調整後、口唇部を中心にヨコナデ調整がみられる。

590はゆるやかに外反する口縁部で、口唇部は丸みをもつ。592は短く開く短頸壺で、胴部が大きく丸みをもつと考えられる。593は口縁部が直口するもので、口縁端部は丸みを持つ。594はラッパ状に開く口縁部で、口唇部には丁寧なヨコナデがみられる。596はくの字に屈曲する頸部を持つもので、内面には強い稜線がみられる。口唇部はコの字を呈する。597はやや口縁部が長い壺で、全体的にナデ調整がみられる。598・599は口縁部が直線的に立ち上がる壺である。

601は大きく反りながら立ち上がる口縁部である。602は頸部がやや強くすぼまるもので、内外面ともナデ調整がみられる。604は直線的に長く立ち上がる口縁部をもち、肩部は大きく開く

と考えられる。605は内傾気味に立ち上がる口縁部で、外面は縦方向のナデ調整後に口唇部のみヨコナデ調整がみられる。606は内傾気味に立ち上がる口縁部で、外面には工具ナデ調整が見える。609は短い口縁部をもつ壺で、胴部は球胴状に開くと考えられる。

610は胴部がゆるやかなそろばん玉状に屈曲し、内傾しながら立ち上がる。口径7.2cm、頸部径6.0cmを測る。頸部外面には工具ナデ調整時の工具痕が見える。612は短く開く口縁部をもち、肩部がなで肩になる。614はヨコナデによって口唇部がM字にくぼむ。615は口径18.4cmを測り、口唇部が大きく反り返る。

621は口縁部外面に縦方向のハケ調整が確認できる。622は胴部がはるタイプの壺で、口縁部・底部は欠損している。外面はミガキ調整、内面にはナデ調整がみられる。623は胴部が膨らみをもつもので、口縁部は欠損しているおそらく長頸壺だと考えられる。口縁部と肩部に波状文がみられる。624は壺の胴部で、胴部最大径14.4cmを測る。胴部最大径よりわずかに高い位置に、2条の突帯を有する。この突帯にはやや間隔の広い刻目突帯が施される。625は壺の肩部で、3条の突帯を有する。この突帯にはやや間隔の広い刻目突帯が施される。

626は壺の肩部から底部で、肩部に3条の突帯を有する。一部欠損しているが、突帯には刻目が施

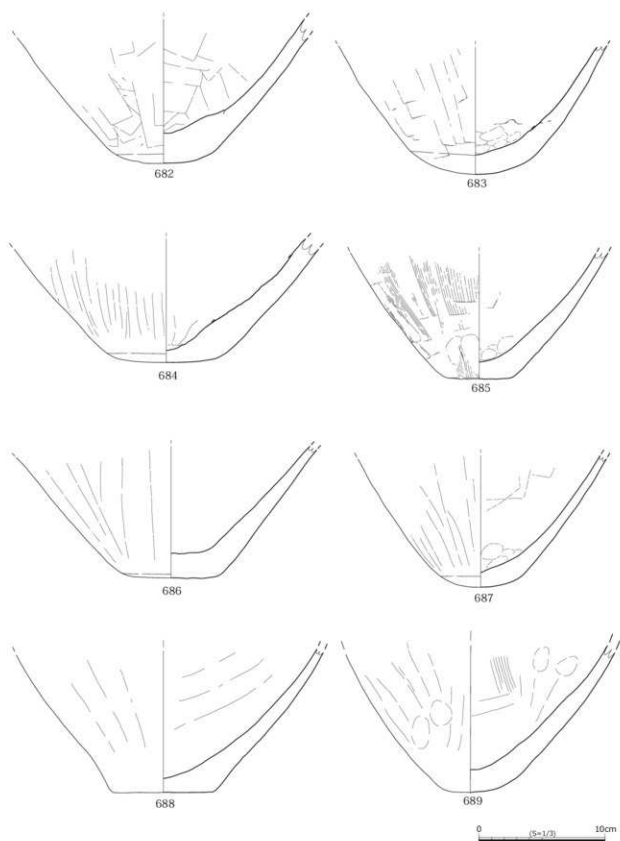
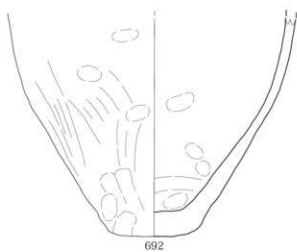
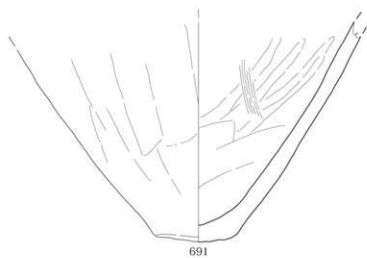
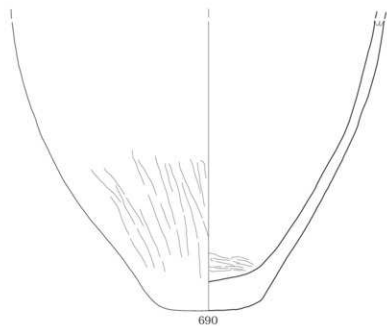


図 131 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 34



0 (5-1/3) 10cm

图 132 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 35

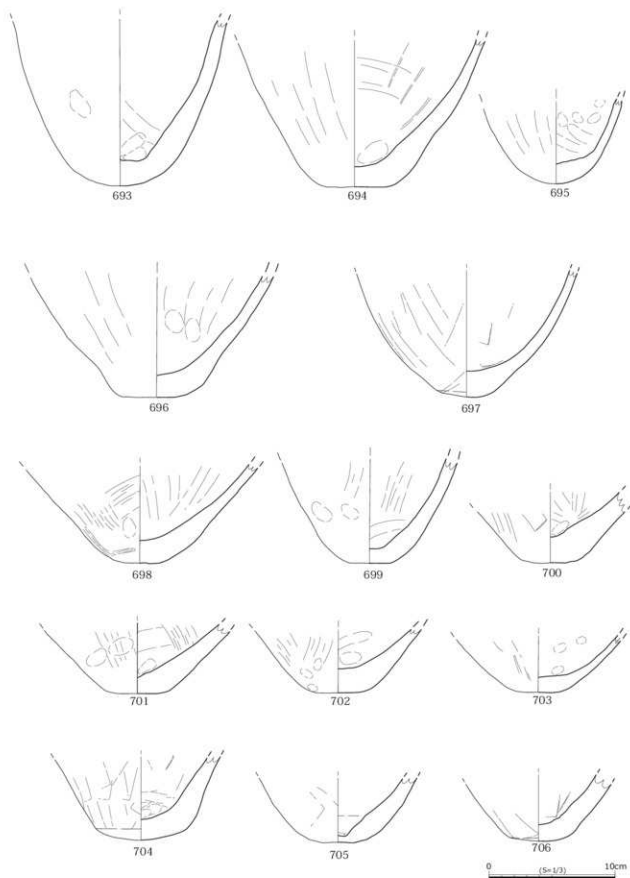


図 133 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 36

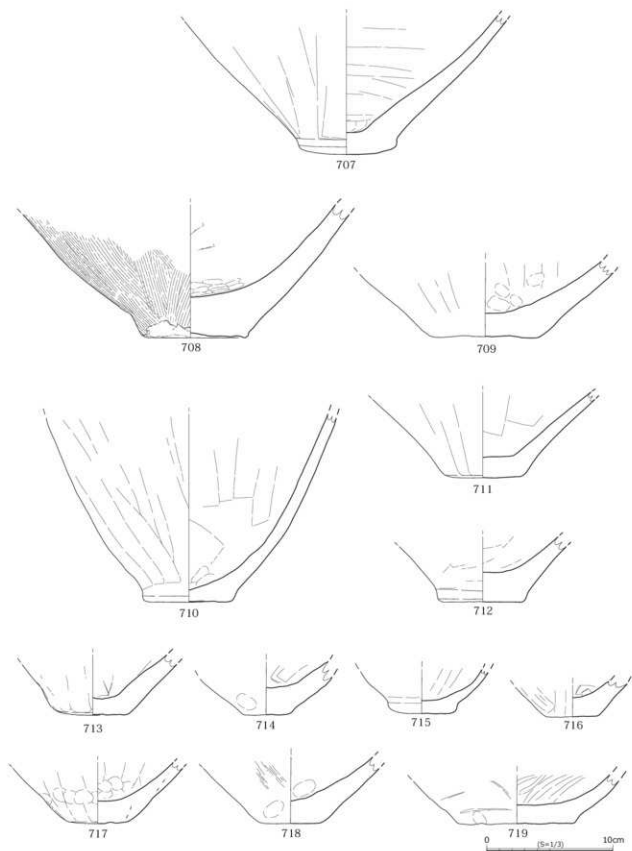


图 134 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 37

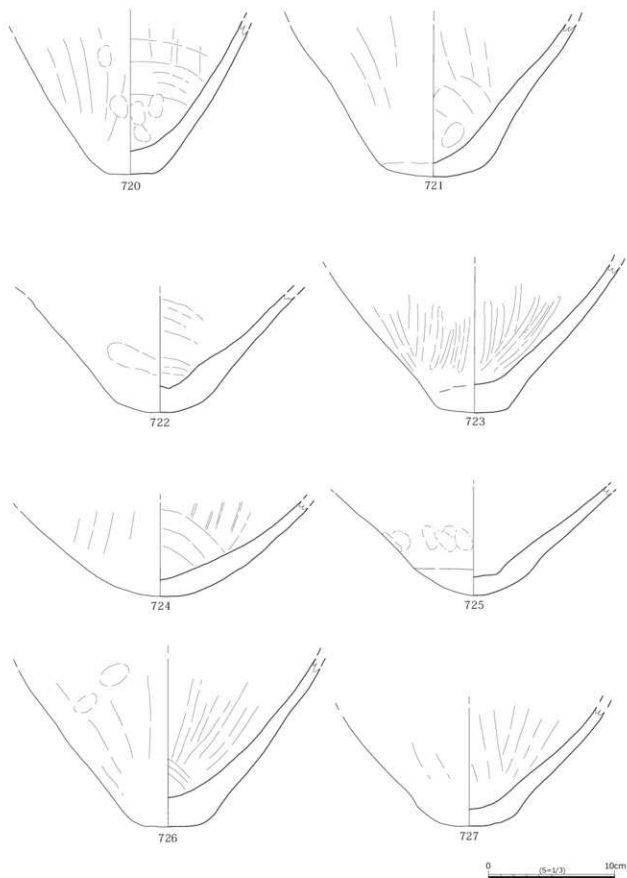


図 135 土器集中廃棄所 出土遺物（壺）38

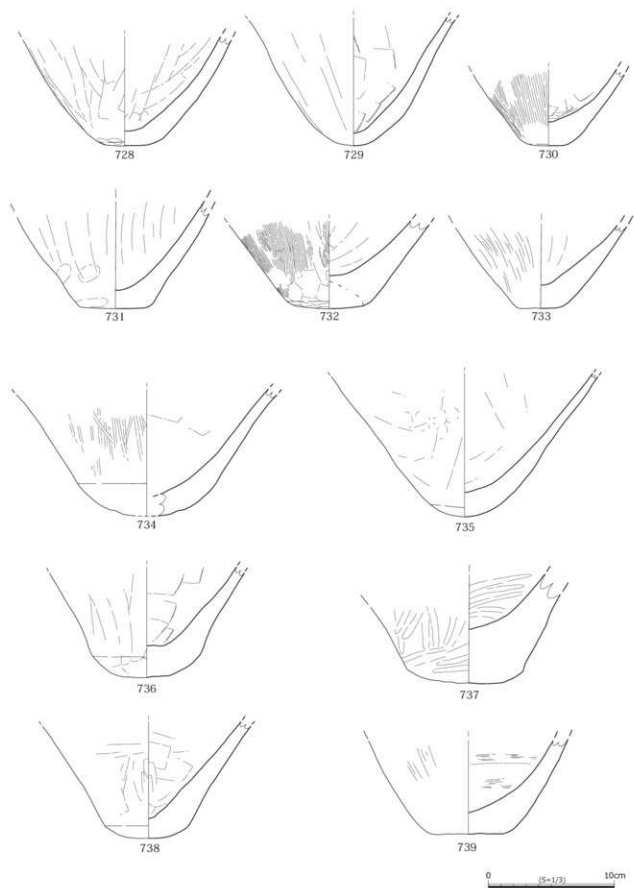


図 136 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 39

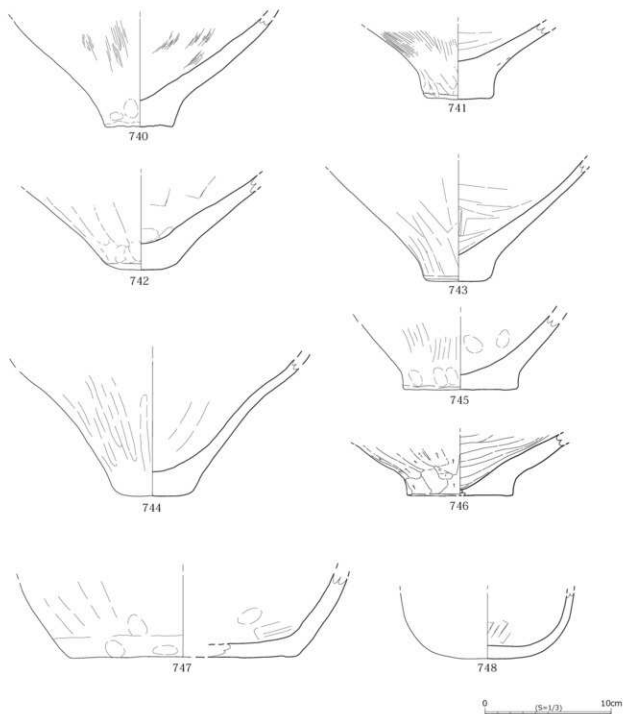


図 137 土器集中廃棄所 出土遺物 (壺) 40

される。胴部最大径 42.0cm を測る。627 は大型壺の胴部から底部で、底部は下方に突出する。胴部最大径部分に 4 条の貼付突帯をもつ。この突帯は粘土帯を貼り付けたのち、ユビナデによって多条突帯をつくりだすいわゆる見かけ多条突帯と呼ばれるもの

である。628 は壺の肩部から底部で、底部は丸底を呈する。胴部最大径 31.2cm を測り、胴部最大径よりやや高い位置に歪みのある刻目突帯をもつ。外面にはハケ調整がみられる。629 はくの字に屈曲する頸部をもつ壺で、外面にはハケ調整がみられる。

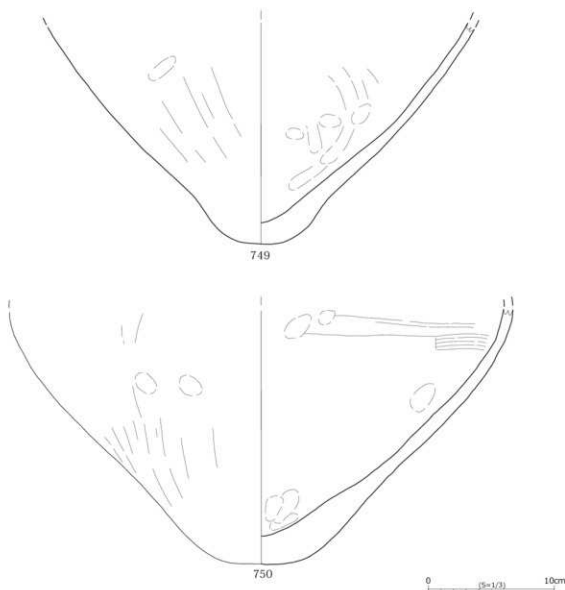


図138 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)41

胴部最大径26.7cmを測り、2条の突帯が貼り付けられる。この突帯には刻みが不定間隔で施される。

630はゆるやかな平底をもつ壺で、底径2.2cm、胴部最大径20.4cmを測る。胴部最大径よりやや高い位置に刻目突帯が貼り付けられる。この突帯は接合せず左側が上方へのびる。631は底部が下方へ突出したもので、底面は上げ底状となる。底径4.5cm、胴部最大径17.7cmを測る。632は器面にゆがみをもつ壺で、胴部は球胴状になる。壺内部の底面には粘土を付加した痕跡があり、ユビオサエの痕が多くみられる。633は肩部が張る壺で、底部はゆるや

かな平底をもつ。底径3.9cm、最大径18.6cmを測る。634は球胴形の壺で、胴部最大径23.4cmを測る。底部は丸底になる。635は球胴形の壺で、頸部の痕跡がわずかに残る。胴部最大径15.9cm、頸部径4.5cmを測る。内面にはミガキ調整がみられる。

637は胴部がはるタイプの壺で、肩部内面には成形時のユビオサエ痕が残る。底部はわずかに下方へ突出する。639は底部が脚台状に下方へ突出するもので、底面は平底となる。底径4.8cmを測る。肩部外面には横方向のミガキ調整、胴部最大径より

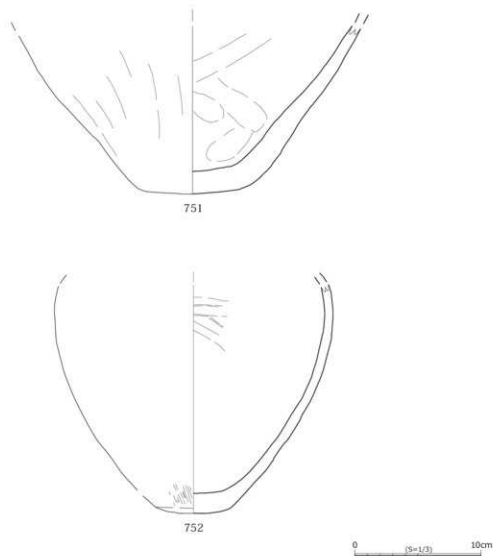


図 139 土器集中廃棄所 出土遺物（壺）42

下は工具ナデ調整がみられる。

640は壺の頸部で口縁部はL字に立ち上がる。頸部内面には強い稜線がみられる。642は壺の肩部で、粘土帯を貼り付けた幅広突帯がみられる。この幅広突帯の表面には斜格子文がみられる。644は壺の胴部で、外面には単位のはっきりしたミガキ調整がみられる。647は胴部がやや潰れた形の壺で、胴部最大径23.4cmを測る。胴部最大径部分に2条の貼付突帯がみられ、不定形の刻目が施される。648はなで肩状の壺で、肩部には3状の貼付突帯がみられる。この貼付突帯には縦方向の連続した刻目がみられる。649は胴部が大きく張る壺で、最大径27.3cmを測る。最大径部分に1状の刻目突帯

がみられる。この刻目突帯は接合することなく、左側が下方へのびる。

650は胴部が張る丸底の壺で、胴部最大径33.0cmを測る。内外面ともミガキ調整がみられる。651は丸底の壺で、頸部がゆるやかにすぼまる形になる。652はやや尖底気味の壺で、胴部に1条の刻目突帯をもつ。653から677は丸底壺の底部である。654は底部内面にユビオサエの痕が多く残り、器壁に歪みがみられる。655は底部内面に連続した工具ナデ痕跡がみられる。656はやや緩やかな丸底で、胴部が球胴状に開く。659は底部内面に成形時の歪みがみられる。

660は底部外面に縦方向のハケ調整がみられる。

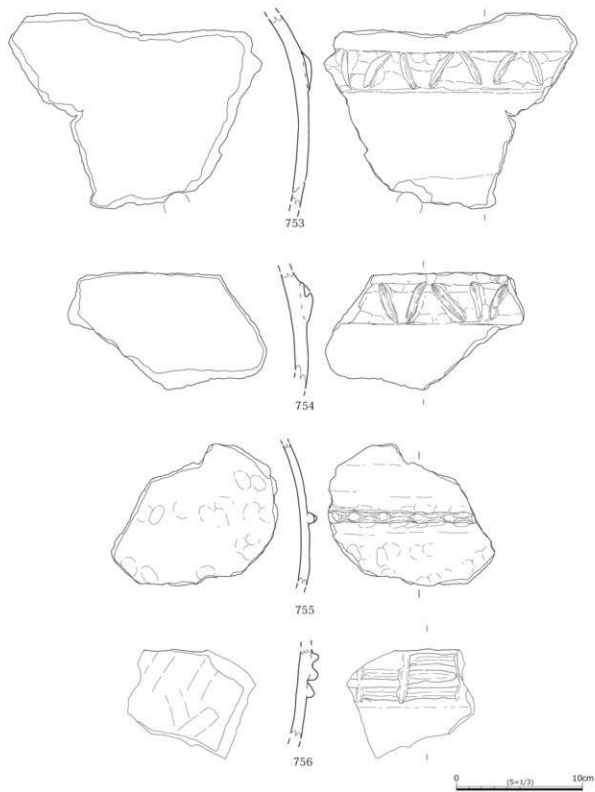


图 140 土器集中廃棄所 出土遺物 (巻) 43

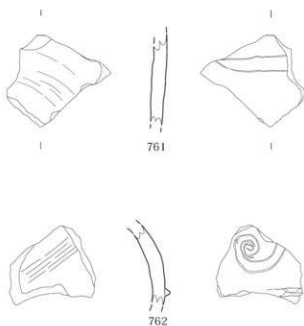
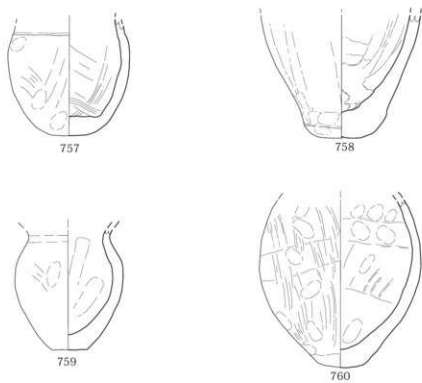


図141 土器集中廃棄所 出土遺物(壺)44

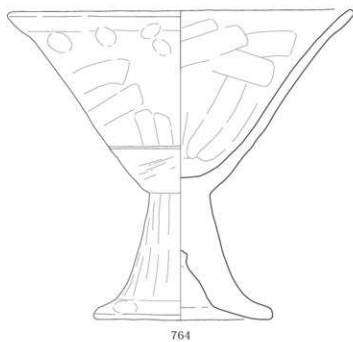
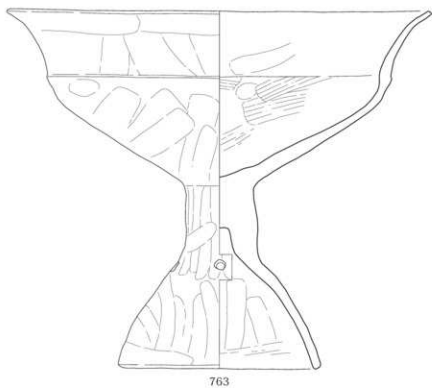


图 142 土器集中廃棄所 出土遺物 (高杯) 1

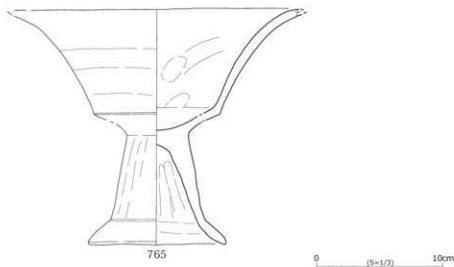


図 143 土器集中廃棄所 出土遺物 (高杯) 2

662は胴部が球胴状に立ち上がるもので、外面には不定方向のナデ調整がみられる。666はやや厚みのある底部で、外面にはハケ調整が残る。667は底部から胴部にかけて大きく開きながら立ち上がるもので、内外面ともナデ調整がみられる。

670は厚みのある底部で、大型壺の底部と考えられる。671はやや尖り気味の底部で、底部厚は厚い。674はやや尖り気味の底部を持つ壺である。677は丸底だが、下方に突出した部分をもつ。底部厚は厚い。678は分厚い平底を持つもので、底端部は丸みをもつ。679は直線的に開く胴部で、外面には縦方向のナデ調整がみられる。底部は底径5.2cmを測る平底である。

680は底部厚の厚い平底で、底径6.2cmを測る。681はやや上げ底状を呈する底部で、底端部にナデ調整がみられる。682はやや厚みのある底部で、ゆるやかな平底を呈する。685は底部外面にハケ調整が残り、底端部はややシャープになる。688は底径8.0cmを測る平底である。

690は厚みのある底部が下方へ突出する形態を呈しており、外面は縦方向のミガキ調整がみられる。691は底面に歪みがみられる底部で、胴部が直線的に立ち上がる。694は底端部が丸みをもつ平底で、内面には成形時のユビオサエの痕が残る。696は底部の立ち上がり付近で歪みをもつもので、底部は端部が丸みを持つ平底である。698は厚みのある

底部をもつもので、内外面ともナデ調整がみられる。

700は底径4.7cmを測る底部である。707は底部外面に段を有し、底面が下方へ突出するものである。底径7.7cmを測る。708は底部厚2.7cmを測るもので、底部外面には縦方向のハケ調整がみられる。

710は底部がわずかに上げ底状を呈するもので、底径7.4cmを測る。内外面とも工具ナデ調整がみられる。715は平底で底部厚0.9cmを測る。715は椀状に開く胴部をもつもので、底部が突出している。

720は砲弾状の底部で、胴部はやや細身である。底径3.9cmを測る。721は胴下部に歪みを持ち、底面はゆるやかな丸底を呈する。725は尖底気味の底部で、底部厚が分厚い。727は底面が突出するもので、内外面ともナデ調整がみられる。729は尖底気味の底部形態を呈する。

732は底部外面にハケ調整がみられる。底部厚2.4cmを測り、土饅頭状に粘土を付加した痕跡が確認できる。734は外反しながら立ち上がる胴部をもつ壺である。737は底部厚4.2cmと分厚い底部をもち、端部は丸みをもつ。内外面ともミガキ調整がみられる。

740は底部が大きく突出するもので、胴部は大きく開きを持ちながら立ち上がる。底径5.3cmを測る。741は底部が下方へ突出し、脚台状になる。

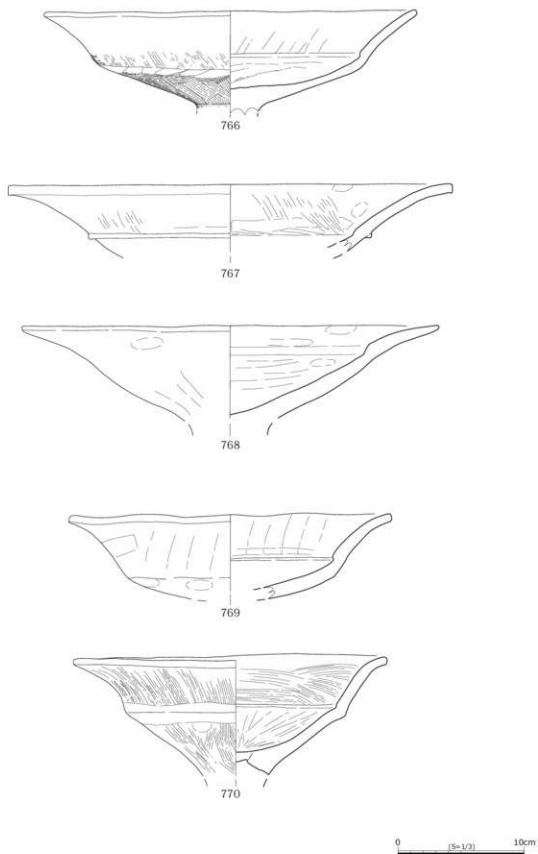


图 144 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）3

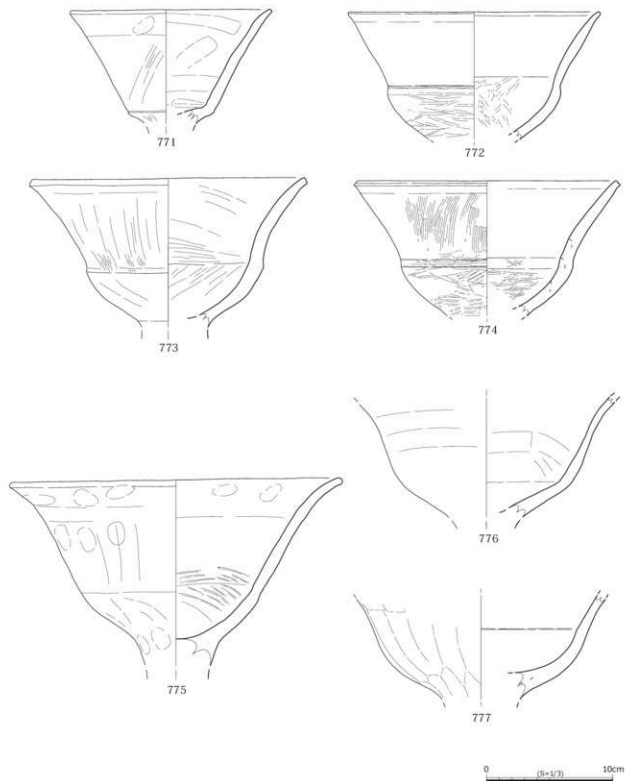
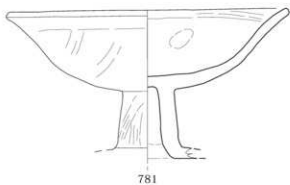
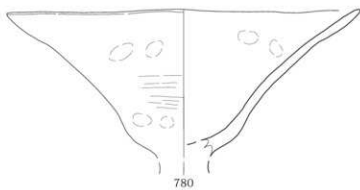
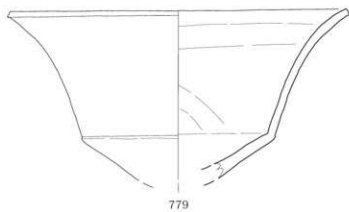
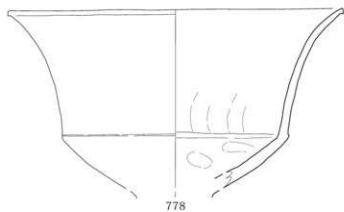


図145 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）4



0 (5=1/3) 10cm

图 146 土器集中廃棄所 出土遺物 (高杯) 5

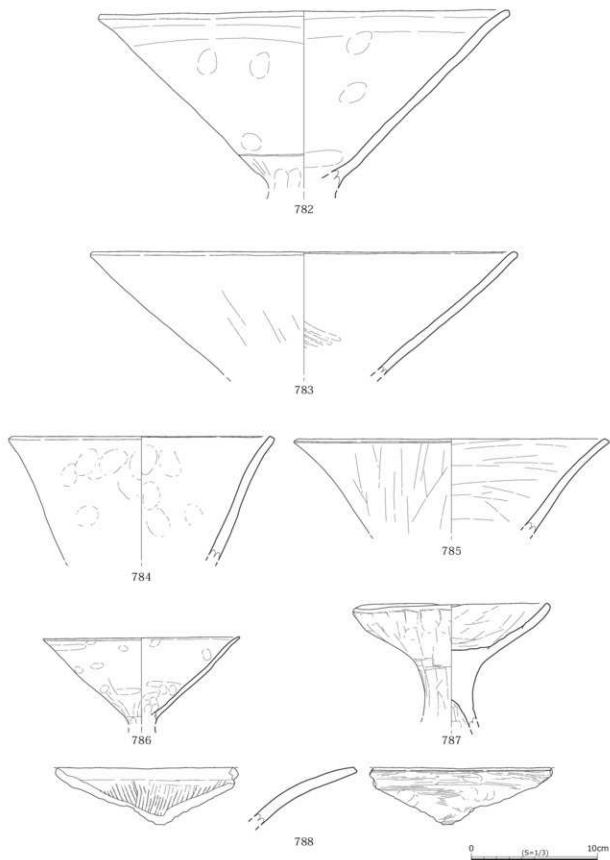


図 147 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）6

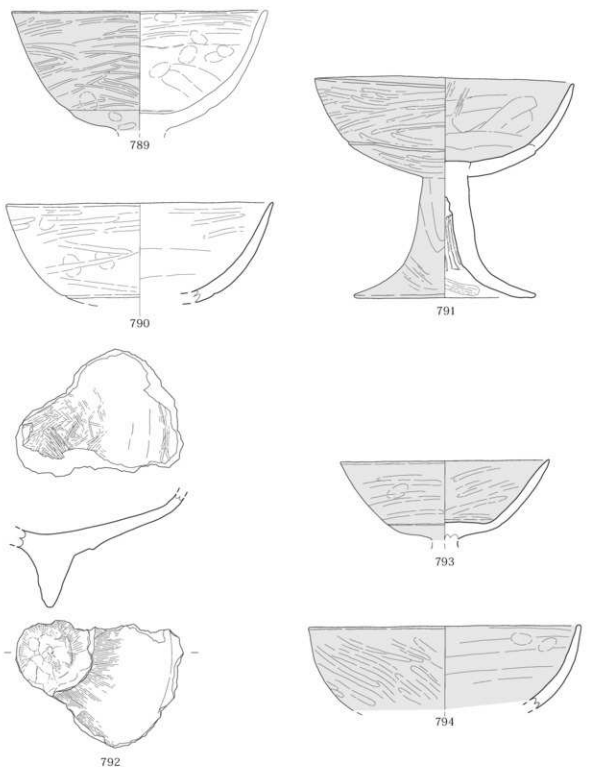


图 148 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）7

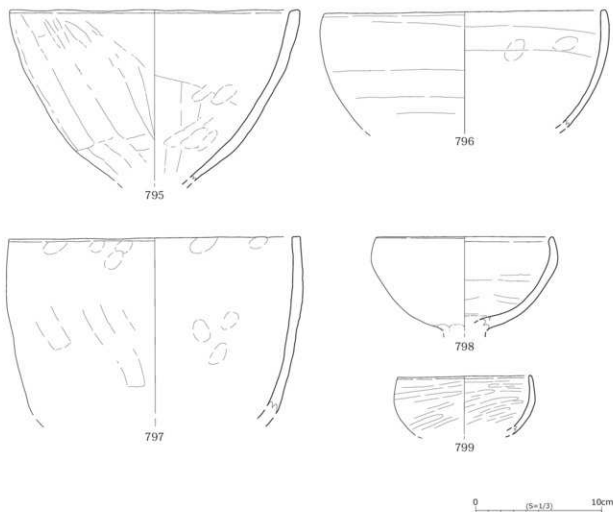


図149 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）8

底部厚 3.0cm, 底径 5.6cm を測る。743 は底部が大きく突出するもので, 底径 5.2cm を測る。底端部は丸みをもつ。744 は胴下部が歪みを持ちながら立ち上がるもので, 底部はゆるやかな平底となる。外面はミガキ調整がみられる。745 は平底の底部で, ゆるやかなくびれをもつ。底径 9.1cm を測る。746 は底面が突出するもので, 底部外面にはケズリ調整がみられる。747 は底径 18.4cm を測る大型の壺底部で, 底部から緩やかなカーブを描きながら立ち上がる。748 はボール状の底面を持つもので, 胴部は椀状に立ち上がる。749 は底部が突出する壺で, 底部は丸底を呈する。751 は緩やかな平底で, 底径 7.0cm を測る。753 は肩部に貼り付けられた幅広突帯で, 幅 3.0cm を測る。表面には木製工具による刻目が鋸歯文状に刻まれる。754 も肩部に貼り付けられた幅広突帯で, 幅 3.0cm を測る。刻

目の内部には木製工具の木目が残る。755 は胴部に貼り付けられた刻目突帯である。756 は 3 条の突帯がめぐり, 刻目が施される。757 から 762 は小型の壺である。757 は緩やかな平底をもち, 頸部付近に段をもつ。758 は底部厚が 1.8cm と厚く, 底部はやや歪みがみられる。759 は平底の壺で, 頸部径 6.3cm, 底径 2.8cm, 胴部最大径 8.4cm を測る。760 は全体形が砲弾状になる壺で, 底部はゆるやかな丸底になる。胴部最大径 12.6cm を測る。761 は壺外面に 2 本の線刻がみられるものである。762 は壺の肩部に渦巻の線刻があるもので, 突帯も一部みられる。

(3) 高杯

763 は器高 28.2cm, 口径 33.7cm, 脚部高 14.4cm,

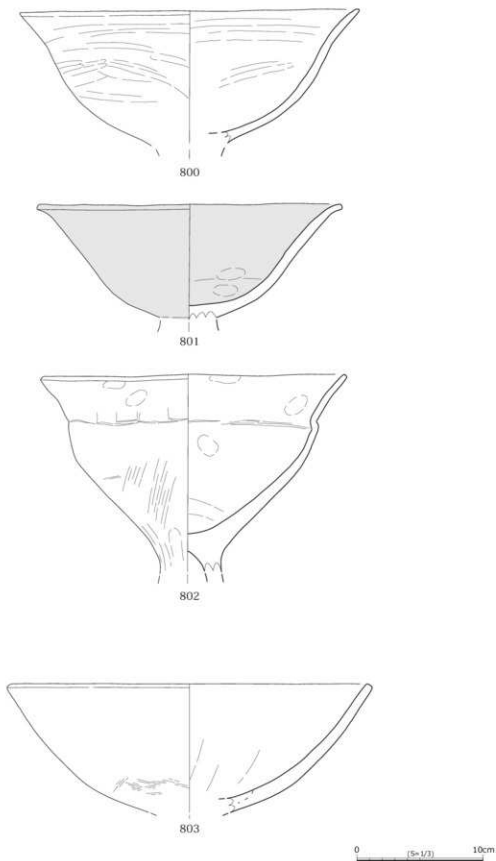


图 150 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）9

筒部径 5.1cm, 脚部径 16.0cm を測る。杯部は外面に段を有し, 内面にはゆるやかな稜線がみられる。杯部はやや深みがあり, 口縁部は外反しながら開く。脚部は杯部から伸びる筒部から端部に向かって袋状に開く。脚部の屈曲部には焼成前穿孔がみられ, 合計で4孔確認することができる。全体的に淡赤色に発色しており, 一般的にみられる甕や壺と胎土が類似している。764は逆三角形に開く杯部をもつ高杯である。口径 27.4cm, 器高 24.5cm, 脚接合部径 4.8cm, 脚部高 10.1cm を測る。杯部はほぼ直線状にひらき, 杯下半部にはわずかに段をもつ。脚部はスカート状に広がりながら, 途中でわずかに屈曲し, 稜線を有する。

765は口径 23.0cm, 器高 18.7cm, 脚接合部径 4.8cm, 脚部高 8.6cm, 脚部径 10.8cm を測る。杯部は下半部で強く屈曲し, 段を形成している。口縁部は大きくラッパ状に開くが, 口唇部は欠損している。脚部は直線的に開き, 途中で短く屈曲する。766は杯部が途中で屈曲し, 口縁部が直線的に開くものである。屈曲部内面には段を有する。杯部下半部には丁寧なハケ調整がみられる。767は口縁部が大きく外反するもので, 口唇部はコ字を呈する。杯部外面には突帯状の張り出しを有する。769は杯部の途中で屈曲部を有する高杯である。

770は屈曲が強く, 杯部の深さも深い。外面は全体的にナデ調整だが, 屈曲部にはヨコナデ調整がみられる。771は台形状の杯部をもつもので, 口径 16.0cm を測る。杯部外面には明瞭な屈曲部をもち, 段を形成している。772は杯部下半が丸みをもつもので, 口縁部は直線的に開く。口径 20.0cm を測る。774は直線的に開く口縁部をもつ高杯で, 口唇部はM字にこぼむ。

775は口縁部が大きく外反するもので, 杯部途中でゆるやかに屈曲する。杯部外面はナデ調整である。778は口縁部が大きく外反し, 杯部が途中で強く屈曲する。内面にも強い稜線をもつ。779は口径 26.6cm を測り, 口縁部が大きく外反する。

780は器面に歪みがみられる高杯で, 杯部が大きく開く。781は杯部が椀状を呈するもので, 口径 22.4cm, 脚接合部径 3.9cm を測る。杯部は屈曲部をもち外反し, 脚部は強く屈曲する。脚端部は欠損のため不明である。782は杯部が直線的に開

く高杯で, 杯下半部にはわずかに屈曲部をもつ。外面には屈曲による段が形成される。口径 32.4cm を測る。783から785は口縁部が大きく外反するもので, 内外面ともナデ調整である。789は椀形の高杯で, 口径 20.4cm, 杯部高 9.3cm を測る。杯部下部には屈曲による段を有する。内外面とも横方向を基調とするミガキ調整がみられる。

791は口径 20.2cm, 器高 17.0cm, 脚接合部径 3.6cm, 脚部高 9.4cm, 脚部径 14.5cm を測る。杯部は椀形で, 下部には屈曲による段を有する。外面はミガキ調整である。脚部はハの字に開く。792は高杯の脚接合部で, 接合に使用した粘土塊が杯部に張り付いた状態がみられる。外面には丁寧なハケ調整がみられる。796は大型の椀形高杯の口縁部で, 口径 22.4cm を測る。798は椀形の高杯で, 口縁部は内湾しながら立ち上がる。799は小型の椀形高杯で, 口径 10.6cm を測る。内外面ともミガキ調整がみられる。

804は直線的に開く高杯で, 脚部はエンタシス状になる。口径 13.4cm, 脚接合部径 3.0cm を測る。806は大きく外反する小型の高杯で, 杯部に大きな屈曲部をもつ。807は椀形の高杯で, 口唇部近くで小さく内傾する。

810から906まで高杯の脚部である。810は脚接合部径 4.5cm, 脚部高 8.0cm, 脚部径 11.5cm を測る。筒部はエンタシス状になり, 強く屈曲したのち, やや内湾した形で開く。811は直線的な筒部をもつもので, 筒部径 5.7cm を測る。脚部は袋状に開きながら広がり, 屈曲部には強い稜線を持つ。812は直線的な筒部から脚端部にかけて袋状に開くものである。813は筒部径 6.0cm, 脚部径 14.5cm を測るもので, 外面にはミガキ調整がみられる。814は大きく袋状に開く脚部で, 屈曲部には穿孔が5孔みられる。脚部径 14.5cm を測る。

815は筒部がハの字に開くもので, 脚端部に向かって短く屈曲する。脚部径 15.0cm を測る。816は筒部がわずかにエンタシス状を呈するもので, 脚端部に向かって強く屈曲する。脚部径 15.3cm を測る。817は大きく袋状に開く脚部で, 屈曲部に穿孔を2+α孔有する。外面にはユビオサエがみられる。

820は筒部が丸みをもつもので, 脚端部に向かっ

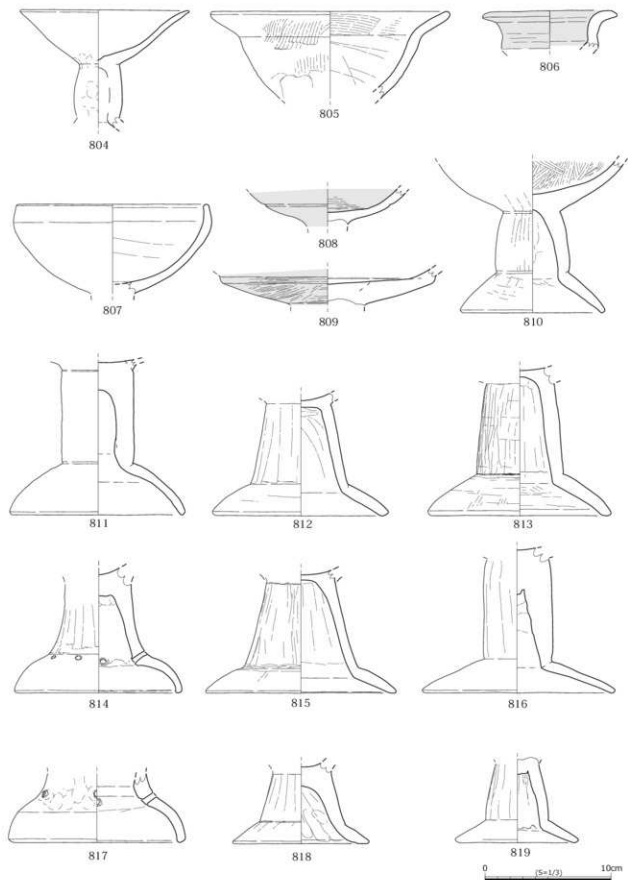


图 151 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）10

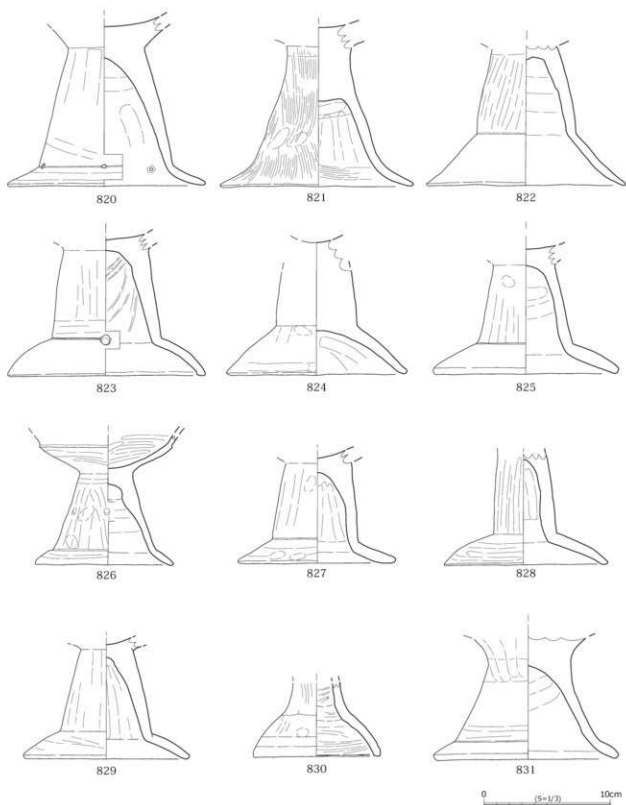


図152 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）11

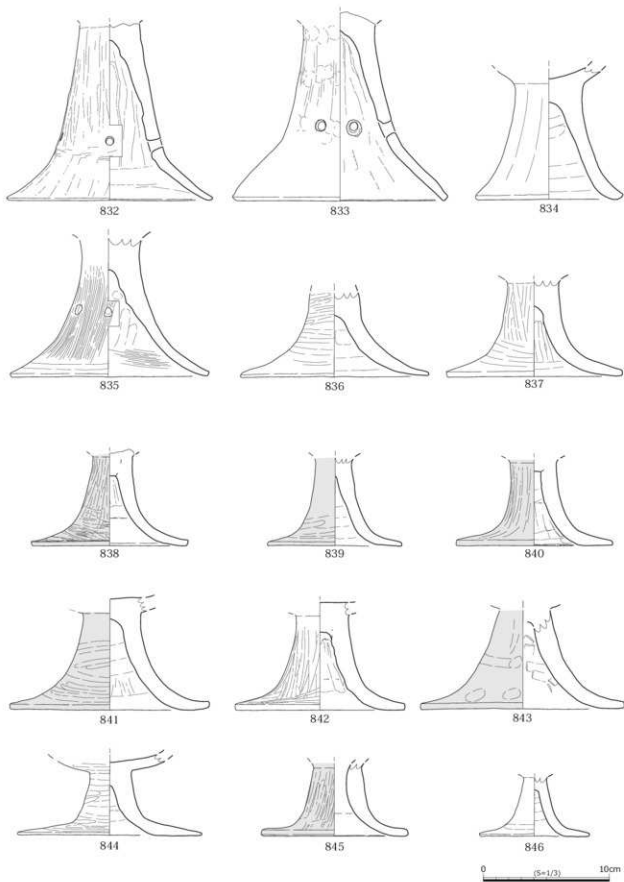


图 153 土器集中廃棄所 出土遺物(高杯) 12

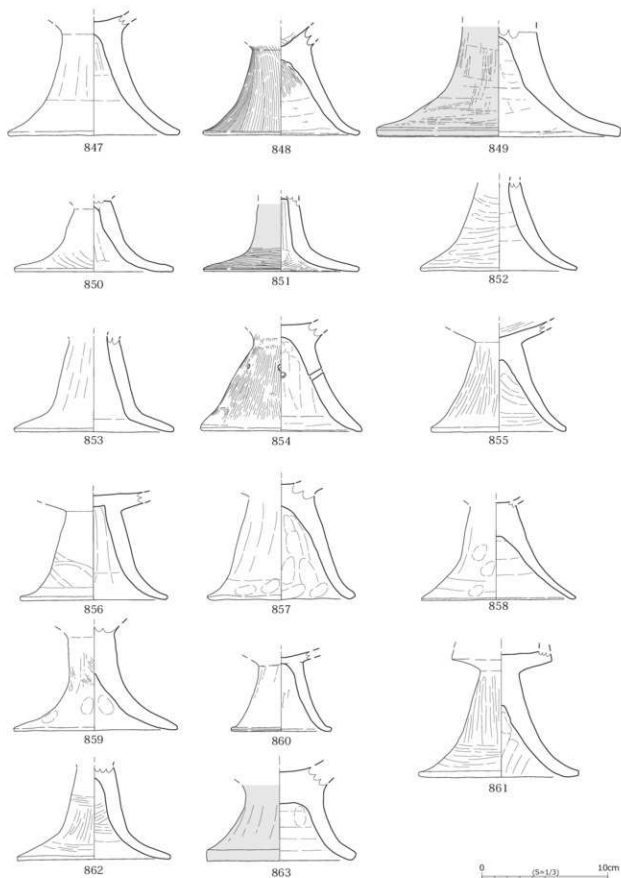


図154 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）13

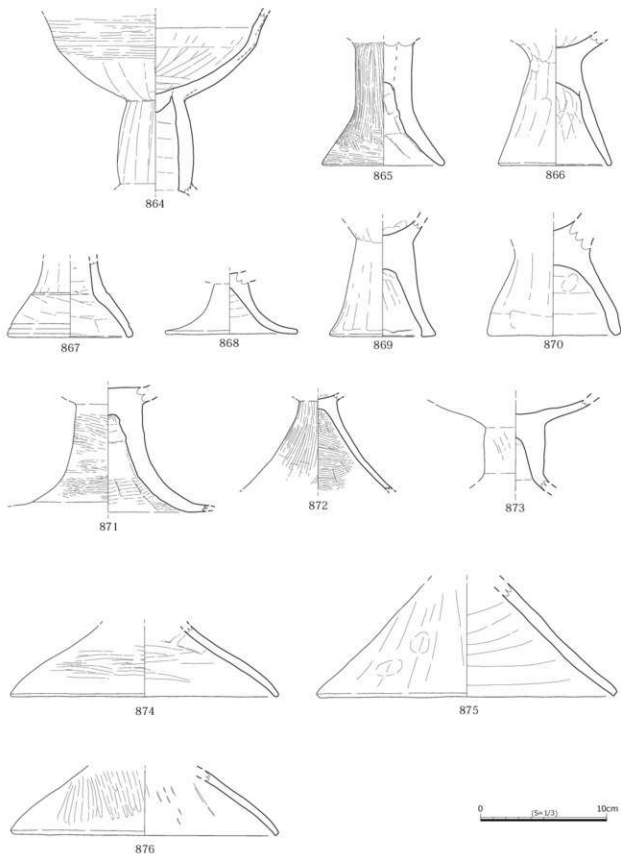


图 155 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）14

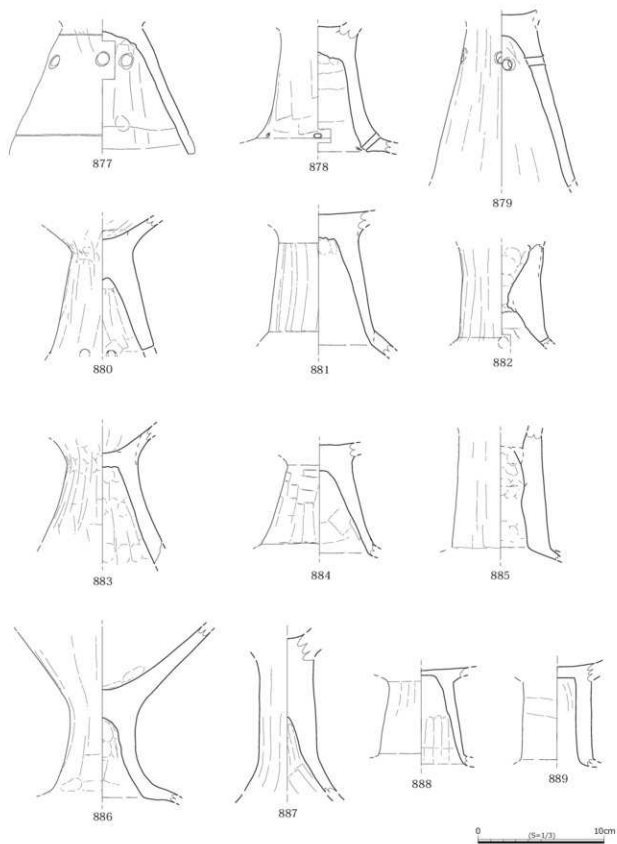


図 156 土器集中廃棄所 出土遺物 (高杯) 15

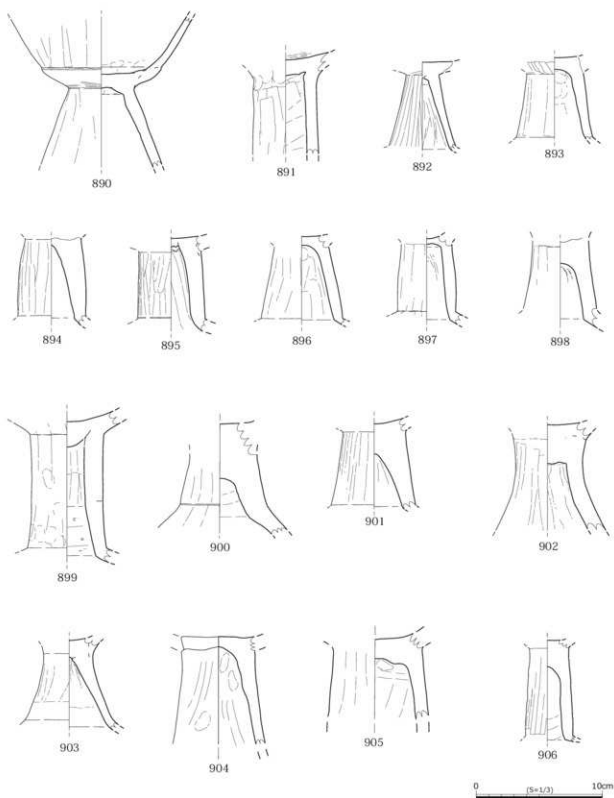


図157 土器集中廃棄所 出土遺物（高杯）16

て短く屈曲する。屈曲部には焼成前穿孔を4孔有する。脚部径15.6cmを測る。821はやや歪みを持つ脚部でゆるやかに開く。杯部との接合部は分厚い。外面にはナデ調整がみられる。脚部高11.1cm, 脚部径15.3cmを測る。822はエンタシス状の筒部から直線的に伸びる脚部で、脚部高10.5cm, 脚部径15.8cmを測る。823は筒部径7.7cmを測るもので、筒部から脚端部にかけて大きく袋状に開く。屈曲部には4孔の穿孔がみられる。脚端部は接地面が平らになる。脚部高10.0cm, 脚部径15.8cmを測る。824は筒部径5.9cmを測り、筒部は中実になる。脚端部に向かって丸みを持ちながら開く。

826はハの字に開く脚部をもつもので、脚端部近くでわずかに屈曲する。脚部高7.2cm, 脚部径11.0cmを測る。筒部は4孔の穿孔がみられる。828は筒部に縦方向のミガキ調整、袋状に開く部分に横方向のミガキ調整がみられる。

830は漏斗状の脚部で、脚端部は丸みをもつ。脚部径10.0cmを測る。831は大きく開く脚部で、脚部高7.7cm, 脚部径14.6cmを測る。脚端部近くでゆるやかに屈曲する。832はスカート状に開く脚部で、ゆるやかなカーブを描きながら開く。脚部径16.3cmを測る。筒部との境目あたりに4孔の穿孔を有する。833は弱く屈曲しながら開く脚部で、屈曲部に4孔の穿孔を有する。端部はコの字になり、脚部径17.0cmを測る。

835は大きくハの字に開く脚部で、穿孔を有する。脚部高11.0cm, 脚部径15.7cmを測る。836は大きくハの字に開く脚部で、外面にはミガキ調整がみられる。脚部径14.9cmを測る。838は端部がコの字になるもので、筒部には縦方向のミガキ調整、裾部には不定方向のミガキ調整がみられる。脚内部はヘラケズリ調整がみられる。脚部径12.4cmを測る。

840は脚裾部から端部にかけて接地面をもつもので、接地面の幅は2.3cm, 脚部径12.4cmを測る。841は脚端部がわずかに反り返るもので、脚部高7.5cm, 脚部径16.9cmを測る。842は筒部に縦方向のミガキ調整、裾部に横方向のミガキ調整がみられるもので、端部はコの字になる。脚部内面にはヘラケズリ調整がみられる。脚部径14.0cmを測る。843は大きくハの字に開く脚部で、脚部径16.1cmを測る。844は裾部から端部にかけて先細

りになるもので、裾部から端部にかけて接地面を有する。接地面の幅は3.5cm, 脚部高4.9cm, 脚部径14.6cmを測る。外面には横方向のミガキ調整がみられる。

847はハの字に開く脚部で、端部にかけて先細りする。脚部高8.0cm, 脚部径13.6cmを測る。848は外面に明瞭なハケ調整を持つもので、脚部径12.4cmを測る。849は大きく開く脚部で、端部はコの字になる。脚部径19.3cmを測る。内面にはヘラケズリによる段がみられる。

851はL字に近い形で開く脚部で、裾部は平たく開く。脚部径12.4cmを測る。854はハの字に開く脚部で、端部にかけて先細りする。外面にはハケ調整がみられ、5孔の穿孔がみられる。脚部径12.8cmを測る。857は端部近くで折れ曲がる脚部で、内面にはユビオサエが明瞭に残る。端部にはゆがみがある。脚部高8.2cm, 脚部径11.7cmを測る。

860は端部がくぼむもので、脚部径8.0cmを測る。861は箱型の杯部が想定されるもので、外面には強い稜線を持つ。脚部はハの字に開き、わずかに接地面をもつ。脚部高8.5cm, 脚部径12.6cmを測る。筒部には縦方向のナデ調整、裾部には横方向のナデ調整がみられる。864は椀形の杯部をもつ高杯で、脚部はエンタシス状を呈する。筒部径5.9cmを測り、裾部にかけて強く屈曲すると考えられる。脚部との接合部は粘土塊の接合面がみられる。

865は直線的な筒部から短く開く裾部をもつもので、外面には細かいミガキ調整がみられる。筒部は大半が中実である。脚部径9.7cmを測る。866は直線的に開く脚部で、端部に向かって先細りとなり、端部はゆるやかなコの字になる。脚部径9.0cmを測る。867は裾部が袋状になるもので、筒部と裾部の境には段をもつ。端部近くには凹線状のくぼみをもつ。脚部径10.0cmを測る。869はやや細身の脚部で、接地面は平坦になる。脚部径8.4cmを測る。

870は袋状の脚部で、端部にはゆがみが見られる。脚部高6.5cm, 脚部径10.6cmを測る。871は反り返りながら開く脚部で、端部は欠損のため不明である。外面には横方向のミガキ調整がみられ、内面にはハケ調整がみられる。

874から876は大きく開く脚部である。874は

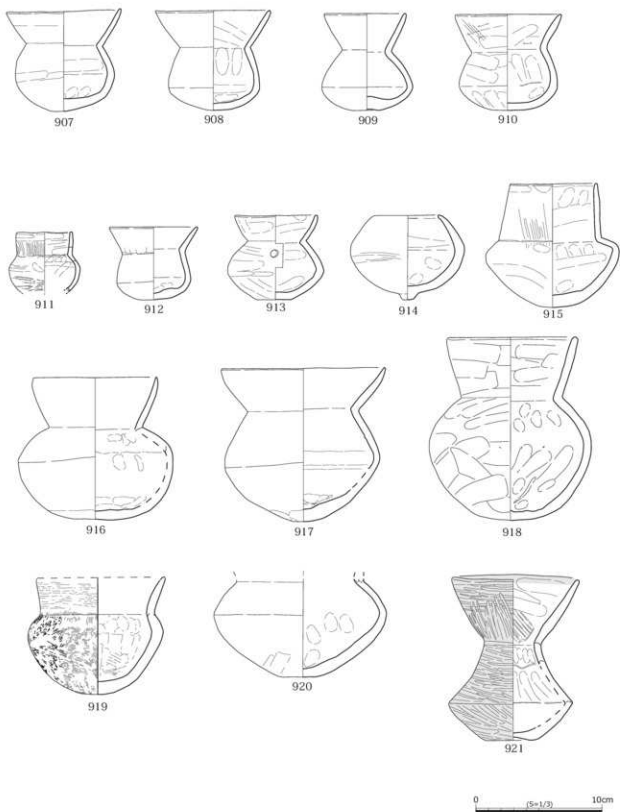


图158 土器集中廃棄所 出土遺物(埴) 1

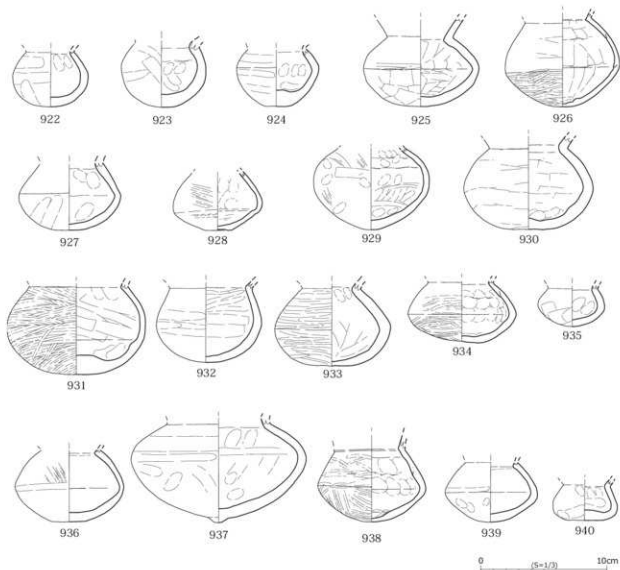


図159 土器集中廃棄所 出土遺物(埴) 2

脚部径21.2cm、875は脚部径24.0cm、876は脚部径21.4cmを測る。877は裾部との接合面で剥落している脚部で、杯部との接合部近くに $2+\alpha$ 孔の穿孔がみられる。878は裾部との境に強い稜線を持ち、 $2+\alpha$ 孔の穿孔がみられる。879は杯部との接合部近くに5孔の穿孔を有する。

886は杯部が斜め上方に立ち上がるもので、脚部は筒部と裾部の境に強い稜線をもつ。887は細身の筒部で、筒部径4.4cmを測る。889は直線的な筒部で、脚部内面の天井部は平坦になる。

890は椀形の杯部をもつ高杯で、胴部下半に段を有する。杯部との稜線は強い。脚部は直線的に開く。894はエンタシス状の筒部で、筒部径5.3cm

を測る。

895は筒部と裾部の境に明瞭な稜線をもつもので、筒部径5.1cmを測る。筒部外面には縦方向のミガキ調整がみられる。897はエンタシス状の筒部で、筒部径4.5cmを測る。899はやや筒部が長い脚部で、筒部径5.6cmを測り、筒部と裾部の境には稜線をもつ。杯部との接合部には粘土塊による突起がみられる。

900は袋状に開く脚部をもつもので、裾部との境には段を有する。906は筒部径3.4cmを測るもので、裾部は平行に開く。

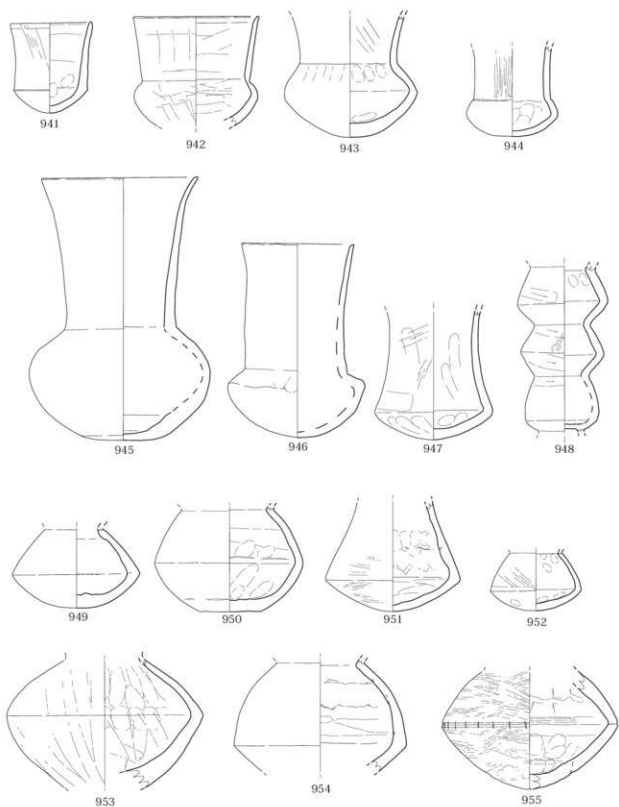


图160 土器集中廃棄所 出土遺物 (埴) 3

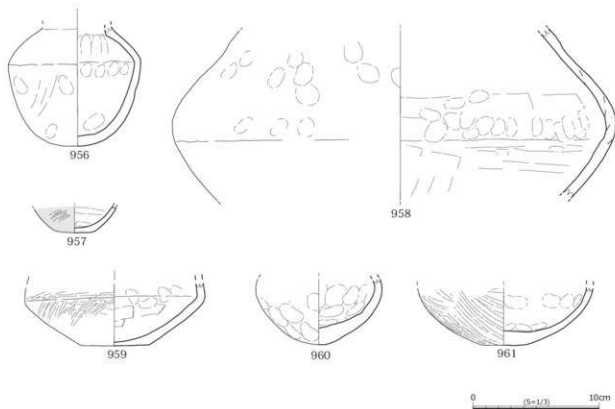


図161 土器集中廃棄所 出土遺物(埴)4

(4) 埴

907から961までは埴である。907は口径9.1cm、器高9.1cm、頸部径6.5cm、胴部最大径7.7cmを測るもので、底部には底径2.0cmを測る小さな底面がみられる。器面全体にはナデ調整がみられる。頸部内面には強い稜線をもち、口縁部は直線的に斜め上方にのびる。908は口径9.1cm、器高7.9cmを測る丸底の埴である。胴部が張る形態で、胴部最大径7.1cmを測る。頸部は強く屈曲し、頸部径5.3cmを測る。口縁部は直線的に開き、端部は丸みをもつ。909は口径6.5cm、器高7.7cm、底径2.1cmを測る。胴部はそろばん玉状を呈し、胴部最大径7.1cmを測る。肩部はやや丸みをもち、底部は上げ底状になる。頸部は強く屈曲し、口縁部は直線的に斜め上方にのびる。

910は口径8.4cm、器高7.7cmを測る。口縁部は短く開き、口唇部に向かって先細りになる。頸部内面には強い稜線をもち、頸部径6.5cmを測る。

胴部は丸みをもち、胴部最大径7.1cmを測る。底部は丸底を呈する。911は口縁部が直口するもので、口径8.8cmを測る。頸部内面は強い稜線を持ち、頸部径4.1cmを測る。胴部は丸みを持ち、胴部最大径5.3cmを測る。912は口径7.0cm、器高5.8cmを測るもので、頸部はくの字に屈曲する。口縁部は直線的に開き、口唇部は丸みをもつ。胴部は下膨れになり、胴部最大径は6.1cmである。底部はゆるやかな丸底になる。913は口径6.6cm、器高6.7cm、底径2.8cmを測る。肩部に円孔がみられ、臆と判断できる。口縁部は受け口状になり、口唇部は丸い。頸部は強く屈曲し、内面には強い稜線を持つ。頸部径は4.4cmを測る。胴部はそろばん玉状に膨らむ。914は口径5.3cm、器高6.8cmを測る無頸の小型壺である。口縁部は内湾し、内面に稜線をもつ。胴部は膨らみをもっており、丸底の底部には径1.0cmの乳頭状突起をもつ。自立はしない。

915は口径7.0cm、器高9.8cmを測る。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり、頸部径8.0cmを測る。肩部は外方に強く飛び出す。916は口径9.7cm、

器高 11.3cm を測る。口縁部は直線的に斜め上方にのび、口唇部は先細りになる。胴部は楕円形を呈し、胴部最大径は 12.0cm を測る。917 は口径 13.0cm、器高 12.2cm を測る。口径と胴部最大径はほぼ同一である。頸部はくの字に屈曲し、口縁部は直線的にのびる。底部は丸底を呈し、内底面にはユビオサエの痕がみられる。918 は口径 10.4cm、器高 14.6cm を測る。胴部は球胴状に膨らみ、胴部最大径 12.5cm を測る。頸部はくの字に屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる。底部は丸底である。内外面ともナデ調整で仕上げられる。919 は口唇部が一部欠損しているが、口径 10.2cm、器高 9.3cm を測る。口縁部は広口で、胴部は丸みをもつ。口縁部外面にはやや摩滅したヨコナデ調整がみられる。

920 は口縁部欠損の埴で、胴部最大径 13.4cm、底径 3.0cm を測る。921 は口径 10.1cm、器高 12.7cm、底径 3.8cm を測る。口縁部はやや受け口状に開く。胴部はそろばん玉状に強く屈曲し、内傾しながら立ち上がる。胴部最大径 9.5cm、頸部径 4.4cm を測る。底部は上げ底になる。外面は丁寧なミガキ調整、丹塗がみられる。922 は胴部最大径 6.0cm を測る丸底の埴である。924 は胴部最大径 6.2cm、底径 2.2cm を測る。内面にはユビオサエがみられる。

925 は扁平な胴部で、頸部が強く屈曲する。頸部径 5.0cm、胴部最大径 9.0cm を測る。926 は膨らみをもった胴部で、肩部が丸い。頸部は強く屈曲し、内面には稜線をもつ。外面は胴部最大径より下がミガキ調整で仕上げられる。928 は胴部最大径 6.9cm、底径 3.2cm を測る。底部はやや上げ底状になる。929 は胴部最大径 9.0cm、底径 2.0cm を測る。胴部は球胴状になる。

930 は丸みをもつ胴部で、頸部はくの字に屈曲する。胴部最大径 10.1cm、底径 3.0cm を測る。底部は平底を呈する。931 は外面に丁寧なミガキ調整がみられる。底部中央はやや厚みがある。933 は胴部最大径 9.0cm、底径 4.0cm を測る。胴部は張り出しており、横方向のミガキ調整がみられる。934 は口縁部欠損のもので、胴部最大径 8.3cm を測る。胴部はそろばん玉状に扁平になる。

936 は胴部最大径 8.3cm、底径 3.9cm を測る。937 は楕円形の胴部をもつもので、胴部最大径

13.7cm を測る。底部は丸底を呈し、底面には直径 1.5cm の乳頭状の突起をもつ。自立しない。938 はそろばん玉状の胴部をもつもので、肩部は直線的に内傾する。胴部最大径 8.3cm を測る。

940 は下膨れの胴部をもつ埴で、胴部最大径 5.1cm、底径 3.5cm を測る。941 は口縁部が直口するもので、底部は丸底になる。口径 6.4cm、器高 7.2cm、口縁部長 5.1cm を測る。942 は口縁部が直口するもので、胴部が丸く外方に飛び出す。口縁部と頸部の境には強い稜線を持つ。943 は口縁部がラッパ状に開くもので、胴部はゆるやかなそろばん玉状になる。頸部径 7.5cm、胴部最大径 10.5cm を測る。944 は頸部が長い埴で、口縁部と頸部の境に段を有する。胴部高は 2.7cm を測る。

945 は口径 12.5cm、器高 20.8cm、底径 6.0cm を測る大型の埴である。口縁部はゆるやかに外反し、頸部には明瞭な稜線がみられる。胴部は丸く、底部は平底になる。内外面ともナデ調整で胎土は粗い。946 は口径 8.9cm、器高 15.5cm を測る。肩部が外方に強く飛び出し、最大径 10.8cm を測る。947 は口縁部が反り反りながら立ち上がるもので、胴部には明瞭な稜線がみられる。底部は丸底を呈する。948 は弧形の埴で、小型の埴が上下に少なくとも 3 つ重なる形態を呈する。口縁部は欠損のため不明。底部形態も不明だが、おそらく脚台状になると考えられる。一段目は胴部最大径 6.9cm、二段目は胴部最大径 6.6cm、三段目は胴部最大径 5.8cm を測り、一・二段目はそろばん玉状、三段目は下膨れ状になる。949 は胴部がそろばん玉状に強く飛び出す胴部で、強い稜線をもつ。胴部最大径 9.9cm を測る。950 は平底の埴で、底径 4.9cm を測る。肩部は丸みを持つ。951 は肩部が内傾しながら立ち上がるもので、胴部最大径 10.5cm を測る。底部は丸底を呈する。953 は胴部が突出するもので、内面には成形時のユビオサエが多く残る。954 は胴部最大径が下にあるもので、肩部が丸みをおびながら立ち上がる。内面には接合線が残る。955 はそろばん玉状の胴部で、胴部最大径 13.8cm を測る。最大径部分は M 字にくぼみ、刻目が施される。外面はナデ調整、内底面にはユビオサエがみられる。956 は小型の壺で、肩部が張る。958 は埴が大型化したもので、胴部最大径 35.1cm を測る。内外面とも

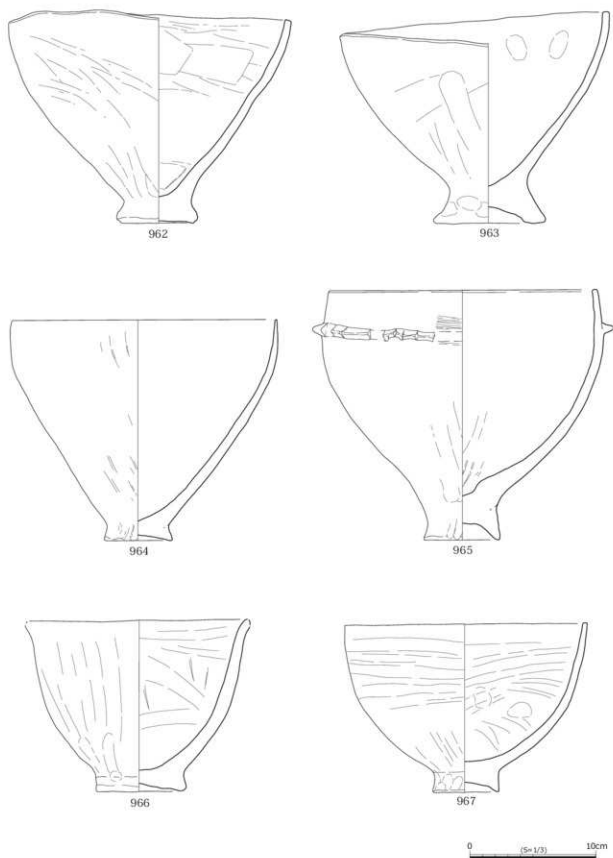


図 162 土器集中廃棄所 出土遺物 (鉢) 1

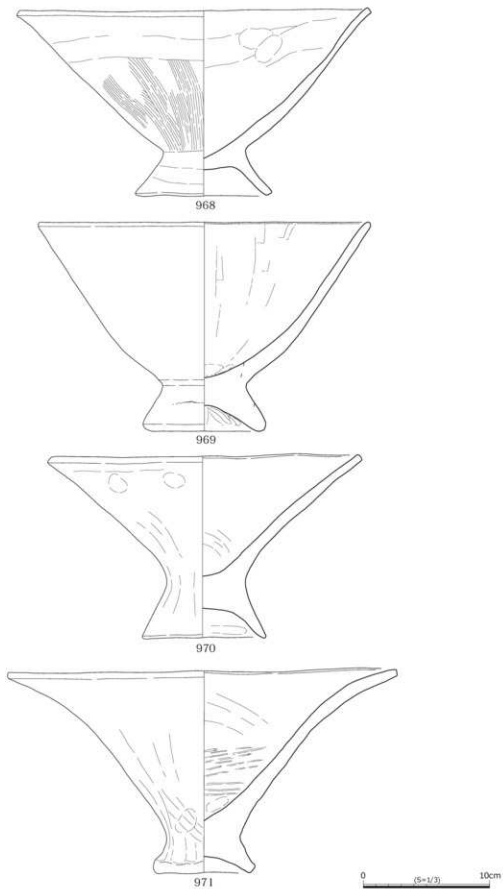


圖163 土器集中廃棄所 出土遺物(鉢) 2

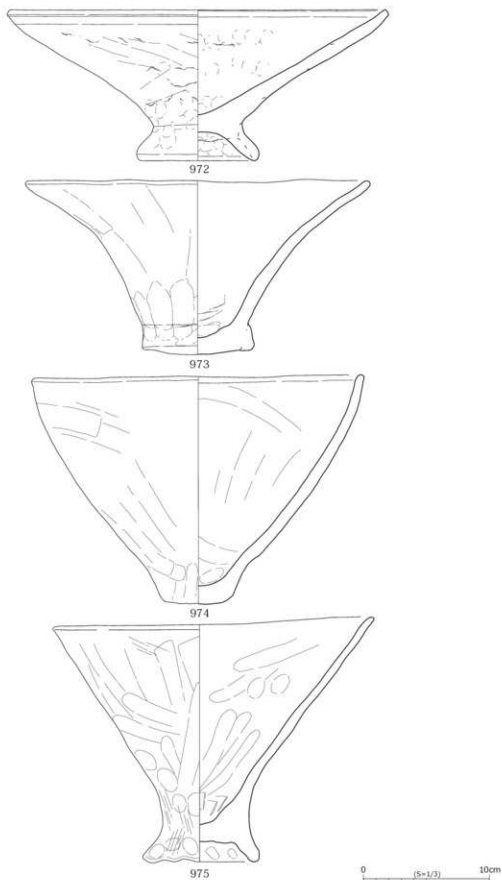


図 164 土器集中廃棄所 出土遺物 (鉢) 3

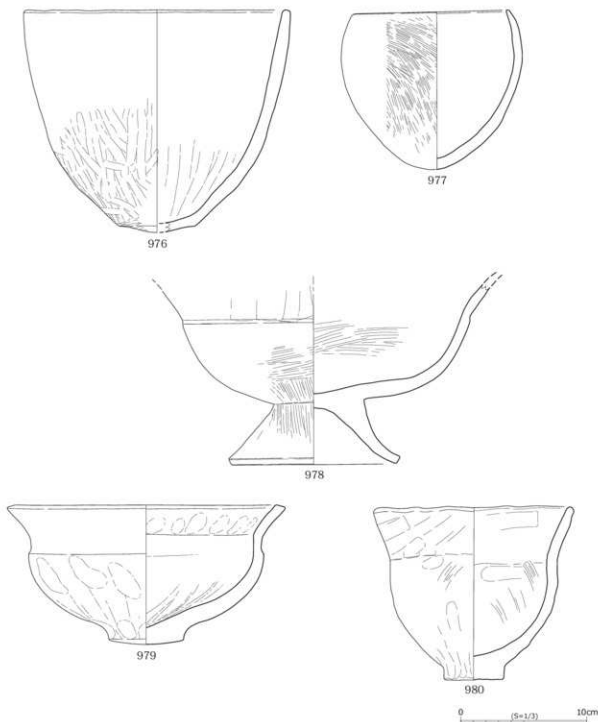


図 165 土器集中廃棄所 出土遺物（鉢）4

成形時のユビオサエが多く見られ、器面の歪みが大きい。胎土はやや粗い。961は底径3.6cmを測る平底の皿で、外面にはミガキ調整がみられる。

(5) 鉢

962から1023は鉢である。962は口径22.4cm、器高27.0cm、底径5.3cm、脚部径6.9cm、脚部高1.8cmを測る。口縁部はバケツ状に開き、口唇部はコの字を呈する。963は口径21.5cm、器高

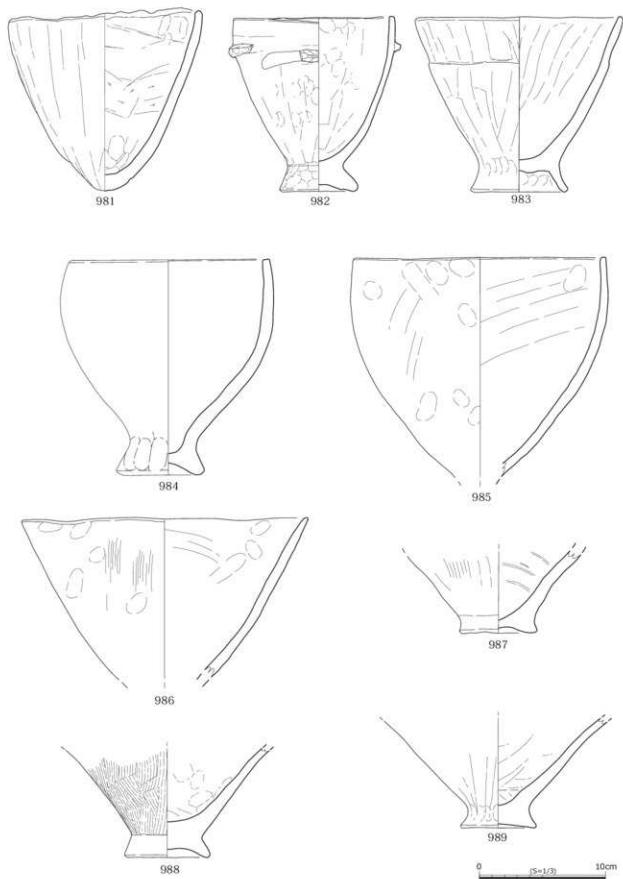


図 166 土器集中廃棄所 出土遺物 (鉢) 5

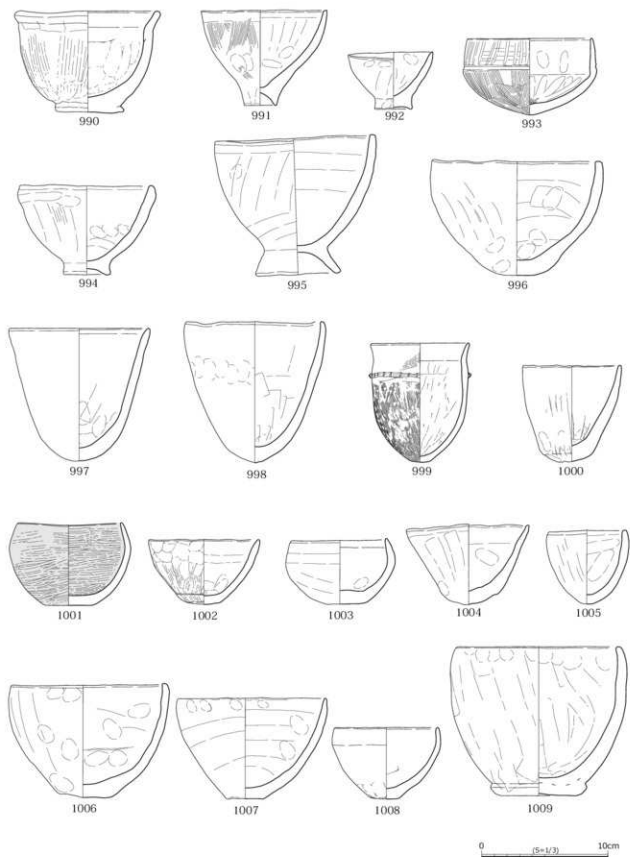


图167 土器集中廃棄所 出土遺物(鉢)6

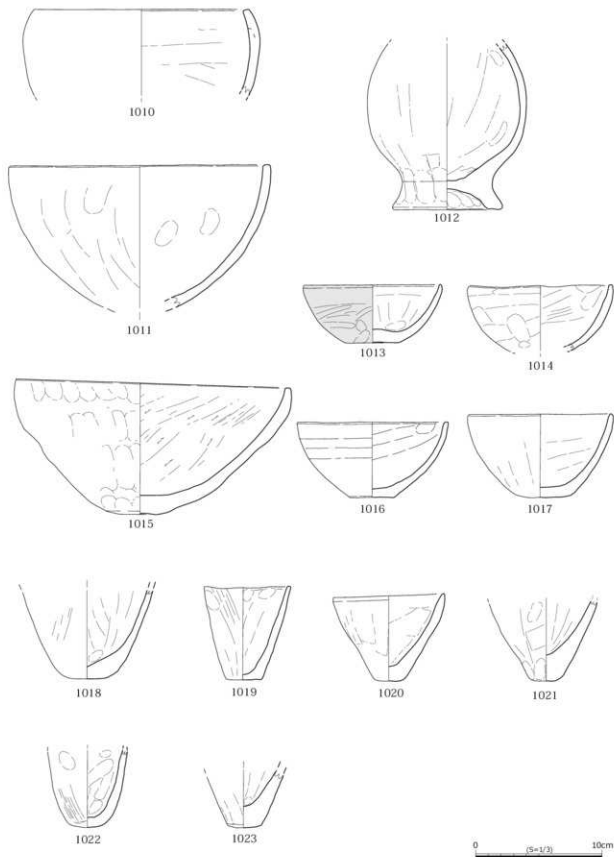


図 168 土器集中廃棄所 出土遺物(鉢) 7

21.8cmを測るもので、口縁部はゆがみがある。脚部はハの字に開き、脚部内面の天井形態はドーム状を呈する。964は内湾する鉢で、口径22.0cm、器高17.5cmを測る。口縁部は先細りする。

965は内湾する鉢で、最大径部分に刻目突帯をもつ。口径21.4cm、器高19.8cm、底径5.6cm、脚部径6.0cm、脚部高2.5cmを測る。脚部は断面三角形を呈する。966は口縁部が外反するもので、口径17.7cm、器高13.6cm、底径7.1cmを測る。967は椀形の鉢で、内外面ともミガキ調整がみられる。口径19.2cm、器高13.4cmを測る。968から975は大きく外反する鉢。968はすり鉢形のもので、ハの字に開く脚部をもつ。口径28.1cm、器高14.9cm、底径6.5cm、脚部径10.8cm、脚部高3.7cmを測る。外面にはハケ調整がみられる。口唇部はコの字を呈する。969は口径26.4cm、器高16.5cmを測る。

970は直線的に開く鉢で、口唇部はコの字を呈する。口径24.8cm、器高14.5cmを測る。971は大きく反り返る鉢で、口径30.7cm、器高16.0cmを測る。脚部は先細りになるもので、底径5.8cm、脚部高2.8cm、脚部径8.0cmを測る。外面には成形時のユビオサエがみられる。972は口縁部に段をもつもので、内外面とも成形時のユビオサエが多く見られる。973は外反する口縁部をもつもので、底部は脚台状の粘土貼り付けがみられる。口径27.4cm、器高13.8cm、底径9.0cmを測る。974はやや内湾気味の鉢で、口径26.3cm、器高18.0cm、底径5.3cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。

975は直線的に開く鉢で、脚部は歪みが大きい。口径25.4cm、器高29.4cmを測る。976は内湾する鉢で、底部は丸底になる。口径21.2cm、器高17.6cmを測る。977はボール状の鉢で、口縁部は大きく内湾する。口径12.1cm、器高12.5cm、胴部最大径14.0cmを測る。978は外反する口縁部に、ハの字に開く脚部をもつ。胴部と口縁部の境に段を有する。底径7.2cm、脚部径13.0cmを測る。979は外反する口縁部をもち、頸部には段を有する。口縁部内面には連続したユビオサエがみられる。底部は脚台状に突出し、底面は丸みをもつ。

981は尖底の鉢で、口径15.4cm、器高14.3cm

を測る。内面にはヘラケズリがみられる。982は甕を小型化したような鉢で、口径12.7cm、器高13.8cm、底径4.9cmを測る。口縁部下には接合しない絡縄突帯がみられ、右側が下方へのびる。突帯は一部剥落している。983は頸部に段を有するもので、口径16.5cm、器高13.9cmを測る。脚部内面の天井形態は突出部をもつ。984は内湾する口縁部をもつ鉢で、口径15.8cm、器高17.1cm、最大径16.9cmを測る。内底面にはくぼみをもつ。

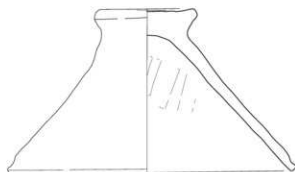
990は口縁部が屈曲するもので、口径11.5cm、器高8.1cm、底径5.5cmを測る。底部には円盤状の粘土貼り付けがみられ、底面にはゆがみが見られる。992は猪口形の鉢で、口径6.6cm、器高4.5cmを測る。993は口縁部が直口するもので、口径10.0cm、器高6.1cmを測る。須恵器杯身を模倣したものと考えられる。口縁部外面はヨコナデ縦方向のミガキ調整がみられ、胴部にはハケ調整がみられる。胎土は混和剤が少なく、精製されたものである。995は口径12.9cm、器高10.8cm、底径5.0cm、脚部径6.7cm、脚部高2.0cmを測る。996はボウル状のもので、底部はゆるやかな平底になる。口径13.4cm、器高9.0cm、底径2.8cmを測る。997・998は尖底鉢である。999は砲弾状の小型鉢で、口径15.7cm、器高18.9cm、底径3.1cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、頸部下に1条の刻目突帯が貼り付けられる。外面には丁寧なハケ調整、内面にはケズリ調整がみられる。

1000はコップ状の鉢で、口径7.9cm、器高7.7cm、底径3.8cmを測る。底部は歪みのある平底になる。1001は椀形の鉢で、口径8.4cm、器高6.3cm、底径3.7cmを測る。底部は平底になる。内外面とも細かなミガキ調整がみられる。1002は直線的に開く小型の鉢で、底部は座りの悪い平底になる。口径8.8cm、器高5.1cm、底径3.0cmを測る。1003は内湾する口縁部をもつ鉢で口径7.6cm、器高5.0cm、底径3.3cmを測る。1005はコップ状の鉢で、底部は尖底になる。1006は椀状の鉢で、底部は座りの悪い平底になる。口径12.3cm、器高9.0cm、底径4.0cmを測る。1009は椀形の鉢で口径13.0cm、器高11.8cm、底径7.6cmを測る。底部には円盤状の粘土を貼り付け、底面は上げ底状になる。

1011は椀形の鉢で、口径20.8cmを測る。口



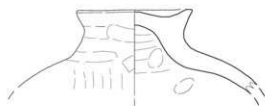
1024



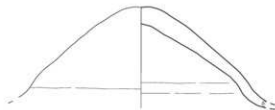
1025



1026



1027



1028

0 (5-1/3) 10cm

図 169 土器集中廃棄所 出土遺物(蓋) 1

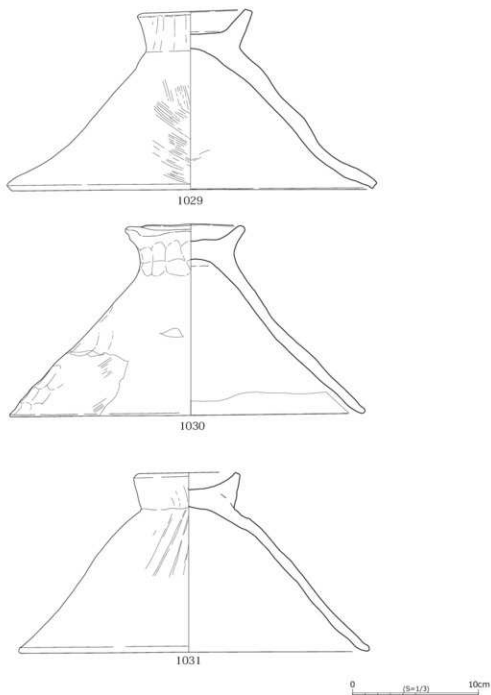


図170 土器集中廃棄所 出土遺物（蓋）2

唇部は上端に平坦面をもつ。底部は欠損しているが、丸底になると考えられる。1012は卵形の胴部に、直線的な脚部が貼り付けられるもので、脚部には平らな接地面をもつ。1013は平底の椀で、口径11.0cm、器高4.6cm、底径4.2cmを測る。1015は大型の鉢で、外面は成形時の歪みが大きい。口径

21.2cm、器高10.5cmを測る。1016は平底の椀で、底端部はシャープである。1018から1023はコップ状の鉢である。1019は平底で、口縁部は直線的に立ち上がる。口径7.0cm、器高7.4cm、底径2.9cmを測る。

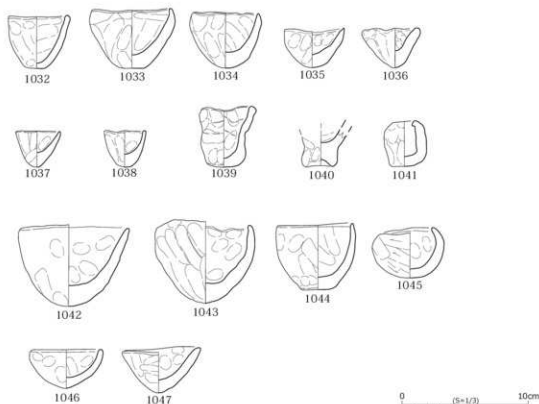


図 171 土器集中廃棄所 出土遺物（手捏）

(6) 蓋

1024 から 1031 は蓋である。1024 は口径 34.2cm, 器高 17.0cm, つまみ部径 6.6cm を測る。直線的に開く。1025 はつまみ部の上面がわずかにくぼむもので、口径 23.1cm, 器高 13.0cm を測る。口縁部がわずかにくぼみをもつ。1026 は器高が低く直線的に開くもので、口縁部は先細りになる。1027 は蓋内面上部が大きくくぼみを持つもので、つまみ部上面は突出する。やや椀状に開くと思われる。1028 はつまみをもたない蓋である。1029 はハの字に開く蓋で、器壁は大きく歪む。つまみ部上面は平坦になる。口径 28.9cm, 器高 15.0cm, つまみ部径 9.1cm をはかる。1030 は直線的に開く蓋で、口径 30.0cm, 器高 15.8cm を測る。1031 はやや膨らみをもつ蓋で、端部に向かって直線的に開く蓋である。つまみ部は断面三角形形状になる。口径 28.7cm, 器高 14.2cm を測る。

(7) 手捏

1032 から 1047 は手捏土器である。1032 は底部が平底になるもので、口径 4.7cm, 器高 4.1cm, 底径 1.6cm を測る。1033 は椀形を呈するもので、底部は端部が丸みを持つ平底になる。口径 6.5cm, 器高 4.8cm, 底径 2.0cm を測る。1034 は丸底になるもので、口縁部は内湾する。口径 5.3cm, 器高 4.4cm を測る。内外面ともユビオサエの痕が明瞭に残る。1036 は尖底気味になる底部をもつもので、全体形が V 字形を呈する。口径 4.6cm, 器高 3.1cm を測る。1039 は円筒形になるもので、口径 4.5cm, 器高 4.9cm, 底径 2.0cm を測る。器壁はユビオサエによる歪みが顕著で、接合線も残る。1040 は手捏土器の脚部で、底径 2.7cm, 脚部径 2.4cm, 脚部高 1.5cm を測る。1041 はコップ状のもので、口縁部は内面に突出する部分をもつ。外面にはユビオサエが残る。1042 は底部が丸くなるもので、口径

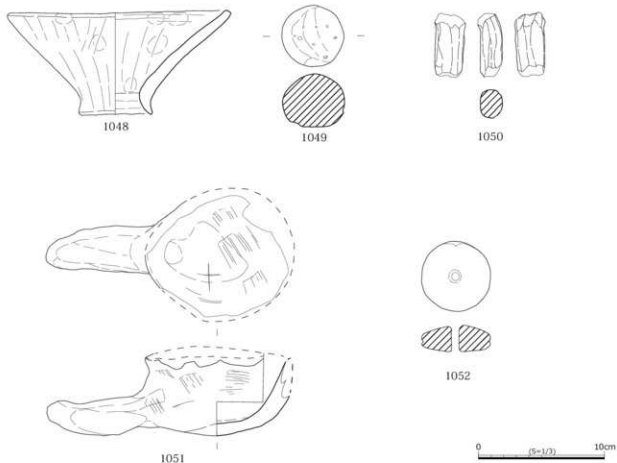


図172 土器集中廃棄所 出土遺物（その他）

8.8cm、器高6.5cmを測る。1043は口縁部の歪み
 が大きいもので、外面には成形時のユビオサエ痕跡
 が縦方向に残る。1045は椀形のもので、口径4.4cm、
 器高4.0cmを測る。1047は浅く開くもので、底部
 は尖底気味になる。

(8) その他

1048は底部が筒抜けになるもので、形態は鉢に類
 似する。口縁部は直線的に開き、端部はコの字を呈
 する。底部は脚台状にやや開く。口径18.2cm、器
 高8.2cm、底面の穿孔径5.9cmを測る。底部がない
 ためその用途は不明だが、漉し器、あるいは甕の
 可能性も考えられる。1049は土製投弾である。やや
 歪みのある円形を呈しており、最大長4.2cmを

測る。非常に硬質である。外面には刺突と考えられ
 るくぼみが複数確認できる。1050は断面が楕円形
 を呈する土製品である。外面は成形時のままで、平
 滑にはなっていない。土器に付けられた把手とも考
 えられるが、類例が少ないため、杓子状土製品の柄
 であると考えられる。1051は大型の柄杓形土製品
 で、器の部分は口径11.4cm、器高6.2cmを測る。
 柄の長さは8.0cmで断面形は楕円形を呈する。上
 面観は把手を左においた場合、把手は直線的ではな
 く手前にわずかにカーブしている。1052は土製紡
 錘車である。ほぼ正円形であり、中心には径0.6cm
 を測る穿孔が1つみられる。側面はM字にくぼむ。

(9) 石器

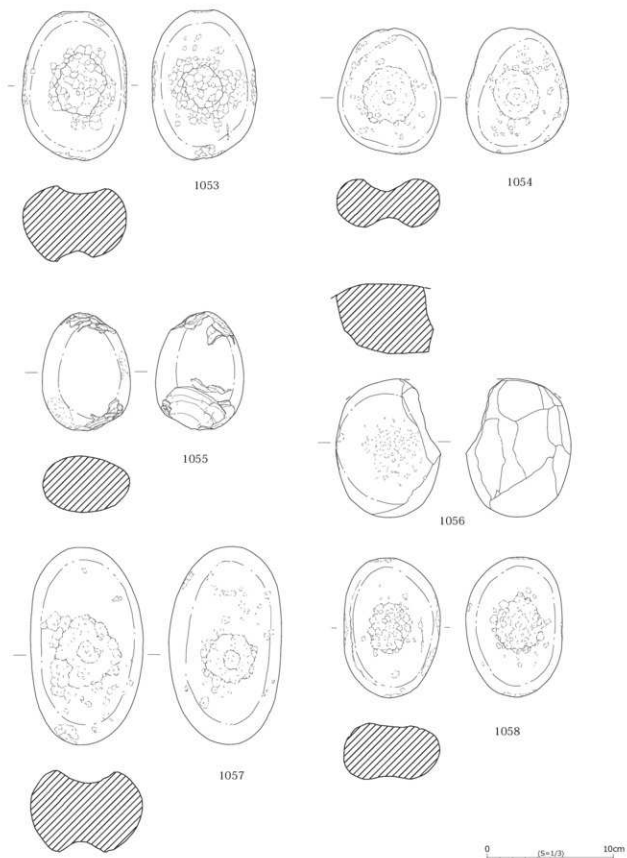


図 173 土器集中廃棄所 出土遺物（石器）1

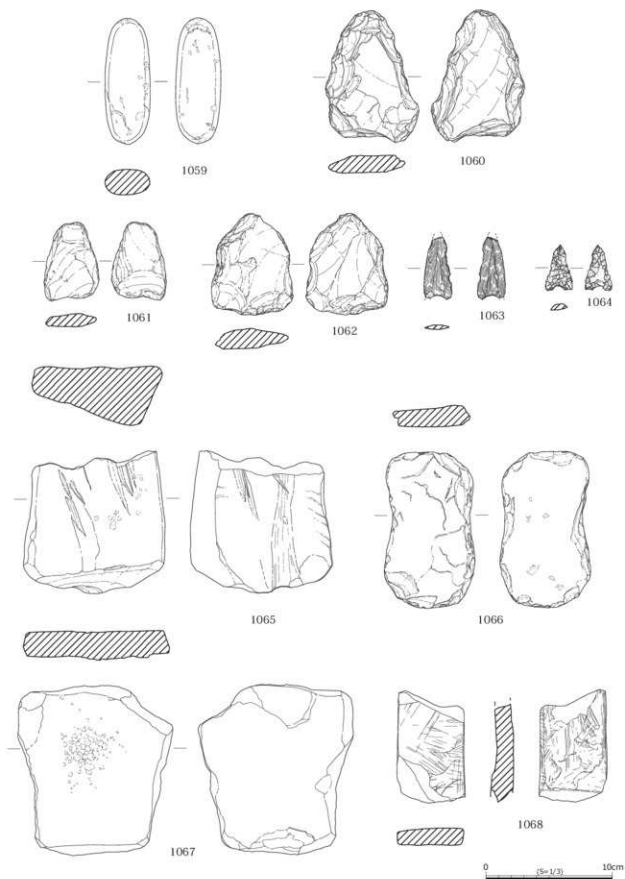


図174 土器集中廃棄所 出土遺物(石器)2

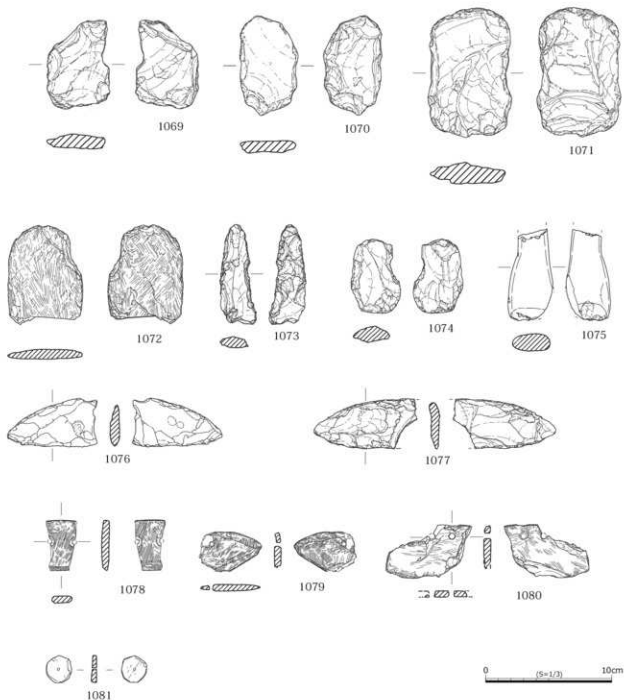


図 175 土器集中廃棄所 出土遺物(石器) 3

1053から1089は石器である。1053から1059は敲石である。

1053は安山岩製の磨敲石で、長さ11.9cm、幅8.3cm、厚さ6.0cmを測る。両面中央、側面に敲打痕をもつ。1054も安山岩製の磨敲石で、長さ10.0cm、幅8.2cm、厚さ3.8cmを測る。1056は砂岩製の敲石で、敲打痕は摩滅しているため、はっ

きりとは確認できない。長さ11.0cm、幅8.3cm、厚さ5.6cmを測る。1057はサイズの大きな磨敲石で安山岩製である。長さ15.6cm、幅8.9cm、厚さ6.5cmを測る。1059は棒状の磨敲石である。長さ10.0cm、幅3.6cm、厚さ2.0cmを測る。

1060から1062は周辺加工石器である。すべて頁岩製である。1060は断面がやや扁平になるもの

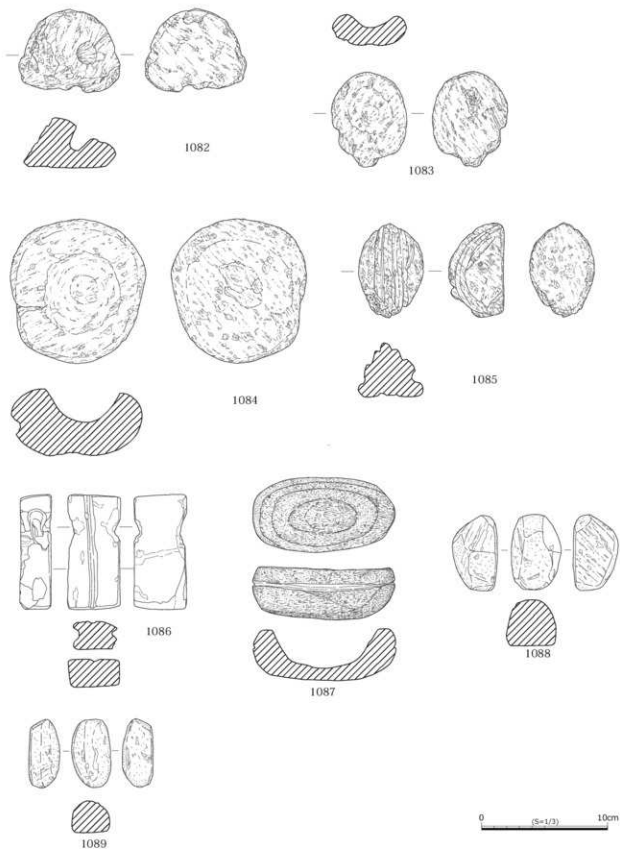


図176 土器集中廃棄所 出土遺物(石器)4

で、長さ10.4cm、幅7.4cm、厚さ1.4cmを測る。1063は磨製石鎌で、先端部は欠損している。頁岩製で、長さ5.0cm、幅2.2cm、厚さ0.3cmを測る。1064は打製石鎌で、安山岩製である。

1065は砥石である。欠損しているため、全体形は復元することができないが、長さ11.3cm、幅11.2cm、厚さ4.7cmを測る。両面に筋状のくぼみをもつ。1066は打製石斧で、ホルンフェルス製と考えられる。長さ12.4cm、幅7.2cm、厚さ1.7cmを測る。1068は長方形の砥石で、全体形は復元できないが、長さ8.9cm、幅5.4cm、厚さ1.8cmを測る。頁岩製である。1069・1070は礫石器でいずれも頁岩製である。

1070は長さ7.9cm、幅4.6cm、厚さ0.9cmを測る。1071・1072は打製石斧である。いずれも頁岩製である。1071は長さ10.3cm、幅6.6cm、厚さ1.6cmを測る。1073は両面加工石器である。

1074・1075は楔形石器で、1075は欠損しているため、全体形を把握できないが、長さ7.3cm、幅3.5cm、厚さ1.4cmを測る。頁岩製である。1076・1077は鎌形石斧である。いずれも頁岩製

である。1078から1080は石庖丁である。1078は穿孔が2孔確認できる。1079は片側の先端部が残るもので、穿孔は1孔確認できる。長さ3.2cm、幅4.9cm、厚さ0.5cmを測る。

1080は穿孔を2孔確認できる。1081は有孔円盤状石製品で、径2.0cm、厚さ0.4cmを測る。滑石製である。1082から1089は軽石製品・加工品である。1082は貫通しない円孔をもつものである。1083は円形のくぼみをもつもので、長さ6.6cm、幅8.0cm、厚さ4.0cmを測る。1084は大型の軽石中央に円形のくぼみをもつものである。

1085は鶏頭形の軽石製品で、断面は底面が平滑な三角形になる。三角形の頂点を中心に、左右に3条ずつの溝をもつ。上面観は楕円形である。長さ7.5cm、幅5.1cm、厚さ4.4cmを測る。1086は軽石を長方形に削り出した製品で、長さ9.2cm、幅4.2cm、厚さ2.5cmを測る。表面には1条の溝がみられる。また、側面には左右からの挟りがみられる。1087は舟形軽石製品である。側面に線刻を施しており、準構造船を模した表現と考えられている。1088と1089は底面を平滑にし、断面が半円形を呈するものである。

表3 建物觀察表1

樓別	區	樓	編號	種類	用途	樓層	坪數	佔地	樓高	完成日期	總樓高	用途	備註
1	153	3	1-208	住居用	住居	4	153.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
2	148	3	1-209	住居用	住居	4	148.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
3	147	3	1-210	住居用	住居	4	147.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
4	147	3	1-211	住居用	住居	4	147.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
5	145	3	1-212	住居用	住居	4	145.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
6	147	3	1-213	住居用	住居	4	147.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
7	147	3	1-214	住居用	住居	4	147.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
8	105	3	1-215	住居用	住居	4	105.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
9	105	3	1-216	住居用	住居	4	105.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
10	103	3	1-217	住居用	住居	4	103.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
11	117	3	1-218	住居用	住居	4	117.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
12	115	3	1-219	住居用	住居	4	115.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
13	117	3	1-220	住居用	住居	4	117.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
14	118	3	1-221	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
15	118	3	1-222	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
16	118	3	1-223	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
17	118	3	1-224	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
18	118	3	1-225	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
19	118	3	1-226	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
20	118	3	1-227	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
21	118	3	1-228	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
22	118	3	1-229	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
23	118	3	1-230	住居用	住居	4	118.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
24	117	3	1-231	住居用	住居	4	117.00		13.50m	1982.01	23.00m	住居用	住居用, 住居用, 住居用
25	120	3	F032	F03014	商業	2	26.00	103.00	33.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
26	120	3	F033	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
27	118	3	F034	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
28	118	3	F035	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
29	118	3	F036	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
30	118	3	F037	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
31	118	3	F038	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
32	118	3	F039	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
33	118	3	F040	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
34	118	3	F041	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
35	118	3	F042	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
36	118	3	F043	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
37	118	3	F044	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
38	118	3	F045	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
39	118	3	F046	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
40	118	3	F047	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
41	118	3	F048	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
42	118	3	F049	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
43	118	3	F050	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
44	118	3	F051	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
45	118	3	F052	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
46	118	3	F053	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
47	118	3	F054	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業
48	118	3	F055	F03014	商業	2	26.00	103.00	30.30m	1987.12	43.50m	商業	住居用, 商業

表4 遺物調査表2

町区	番	面積	地種	用途	地目	面積	1区			2区			3区			備考	
							延べ面積	延べ体積	延べ重量	延べ面積	延べ体積	延べ重量	延べ面積	延べ体積	延べ重量		
50	138	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), HI
50	427	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), FOR, A(20), HI
51	138	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), FOR, A(20), HI
52	138	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), HI
53	138	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), HI
54	138	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), HI
55	138	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), HI
56	138	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), HI
57	138	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), HI
58	138	0	1,200㎡(0.86%)	第1種	138	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	FOR, A(10), FOR, A(20), FOR, A(30), FOR, A(40), FOR, A(50), FOR, A(60), FOR, A(70), FOR, A(80), FOR, A(90), FOR, A(100), FOR, A(110), FOR, A(120), FOR, A(130), FOR, A(140), FOR, A(150), FOR, A(160), FOR, A(170), FOR, A(180), FOR, A(190), FOR, A(200), FOR, A(210), FOR, A(220), FOR, A(230), FOR, A(240), FOR, A(250), FOR, A(260), FOR, A(270), FOR, A(280), FOR, A(290), FOR, A(300), FOR, A(310), FOR, A(320), FOR, A(330), FOR, A(340), FOR, A(350), FOR, A(360), FOR, A(370), FOR, A(380), FOR, A(390), FOR, A(400), FOR, A(410), FOR, A(420), FOR, A(430), FOR, A(440), FOR, A(450), FOR, A(460), FOR, A(470), FOR, A(480), FOR, A(490), FOR, A(500), FOR, A(510), FOR, A(520), FOR, A(530), FOR, A(540), FOR, A(550), FOR, A(560), FOR, A(570), FOR, A(580), FOR, A(590), FOR, A(600), FOR, A(610), FOR, A(620), FOR, A(630), FOR, A(640), FOR, A(650), FOR, A(660), FOR, A(670), FOR, A(680), FOR, A(690), FOR, A(700), FOR, A(710), FOR, A(720), FOR, A(730), FOR, A(740), FOR, A(750), FOR, A(760), FOR, A(770), FOR, A(780), FOR, A(790), FOR, A(800), FOR, A(810), FOR, A(820), FOR, A(830), FOR, A(840), FOR, A(850), FOR, A(860), FOR, A(870), FOR, A(880), FOR, A(890), FOR, A(900), FOR, A(910), FOR, A(920), FOR, A(930), FOR, A(940), FOR, A(950), FOR, A(960), FOR, A(970), FOR, A(980), FOR, A(990), FOR, A(1000)

表10 遊歩観察表 8

Table with 11 columns: 観測区 (Observation Area), 区 (District), 観測日 (Observation Date), 観測時刻 (Observation Time), 観測者 (Observer), 観察項目 (Observation Item), 結果 (Result), 観察項目 (Observation Item), 結果 (Result), 観察項目 (Observation Item), 結果 (Result). The table contains 30 rows of detailed observation data, including species names, counts, and locations.

表 15 遺物觀察表 13

層	區	層	遺物	種類	數量	位置	規格	寸法	重量	製造法	素材	用途	備考	出所
372	C18	3	1.200F(複製品)	壺	JEIJC26	4537	50596	17.5x6	35.5g	35.5x5.5x4.5	35.5x5.5x4.5	35.5x5.5x4.5	35.5x5.5x4.5	福岡県 貝
373	C19	3	1.200F(複製品)	壺	268	5436	118.8x68	31.0x6	19.3g		18.8x4.1x4.3	18.8x4.1x4.3	18.8x4.1x4.3	福岡県 貝
377	C28	3	1.200F(複製品)	壺	714	5536	88.0x6	25.8x6	15.7g		25.8x6.5x6	25.8x6.5x6	25.8x6.5x6	福岡県 貝
378	F10	3	1.200F(複製品)	壺	372	4960	56.0x6	21.2x6	5.4x6		21.2x6.1x4.2	21.2x6.1x4.2	21.2x6.1x4.2	福岡県 貝
379	F10	3	1.200F(複製品)	壺	372	4972	56.0x6	19.2x6	5.3x6		19.2x6.1x4.2	19.2x6.1x4.2	19.2x6.1x4.2	福岡県 貝
380	C18	3	1.200F(複製品)	壺	372	4972	52.0x6	24.2x6	14.1x6		24.2x6.1x4.2	24.2x6.1x4.2	24.2x6.1x4.2	福岡県 貝
381	D15	3	1.200F(複製品)	壺	17-180	5535	103.0x6	20.3x6	15.3x6		20.3x6.1x4.2	20.3x6.1x4.2	20.3x6.1x4.2	福岡県 貝
382	C18	3	1.200F(複製品)	壺	527	3423584	43.0x6	26.0x6	2.1x6		18.0x4.6	18.0x5.0	18.0x5.0	福岡県 貝
383	C18	3	1.200F(複製品)	壺	118-180	4632	40.2	33.0x6			23.0x5.6x4.6	23.0x5.6x4.6	23.0x5.6x4.6	福岡県 貝
384	C18	3	1.200F(複製品)	壺	17-180	5244	33.0x6				33.0x4.2x4.6	33.0x4.2x4.6	33.0x4.2x4.6	福岡県 貝
385	C17	3	1.200F(複製品)	壺	188	3741	145.0x6				33.0x7.1x4.2	33.0x7.1x4.2	33.0x7.1x4.2	福岡県 貝
386	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4281	20.8x6				19.0x3.8x6	19.0x3.8x6	19.0x3.8x6	福岡県 貝
387	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4038	117.0x6				19.0x3.8x6	19.0x3.8x6	19.0x3.8x6	福岡県 貝
388	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4273	103.0x6				5.0x5.5x6	5.0x5.5x6	5.0x5.5x6	福岡県 貝
389	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4465	49.0	15.3x6			19.2x4.6x6	19.2x4.6x6	19.2x4.6x6	福岡県 貝
390	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4695	15.3x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
391	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4479	112.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
392	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4478	112.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
393	C18	3	1.200F(複製品)	壺	118-180	4636	—	11.4x6			23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
394	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4694	117.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
395	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4264	117.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
396	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4311	113.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
397	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4251	114.0x6				10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	福岡県 貝
398	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	5236	113.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
399	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4471	113.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
400	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4462	113.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
401	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4284	113.0x6				10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	福岡県 貝
402	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4694	113.0x6				10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	福岡県 貝
403	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4956	12.6x6				10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	福岡県 貝
404	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4955	16.0x6				10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	福岡県 貝
405	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4271	101.0x6				19.2x7.1x4.2	19.2x7.1x4.2	19.2x7.1x4.2	福岡県 貝
406	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4448	103.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
407	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4265	13.0x6				10.0x5.8	10.0x5.8	10.0x5.8	福岡県 貝
408	C18	3	1.200F(複製品)	壺	11-180	4476	111.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
409	C18	3	1.200F(複製品)	壺	118-180	5438	16.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
410	C18	3	1.200F(複製品)	壺	19-400	—	172.0x6				10.0x5.2x6	10.0x5.2x6	10.0x5.2x6	福岡県 貝
411	C18	3	1.200F(複製品)	壺	403	4668	16.0x6				10.0x5.2x6	10.0x5.2x6	10.0x5.2x6	福岡県 貝
412	C18	3	1.200F(複製品)	壺	118-180	5449	16.0x6				10.0x5.2x6	10.0x5.2x6	10.0x5.2x6	福岡県 貝
413	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	5427	105.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
414	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	—	156.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
415	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	—	118.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
416	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	5231	113.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
417	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	5090	11.1x6				10.0x5.8	10.0x5.8	10.0x5.8	福岡県 貝
418	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4661	112.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝
419	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	5362	112.0x6				10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	10.0x6.4x4.2	福岡県 貝
420	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4471	114.2x6				10.0x5.8	10.0x5.8	10.0x5.8	福岡県 貝
421	C18	3	1.200F(複製品)	壺	188	4462	114.2x6				19.2x7.1x4.2	19.2x7.1x4.2	19.2x7.1x4.2	福岡県 貝
422	C18	3	1.200F(複製品)	壺	403	4646	114.0x6				23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	23.0x6.4x4.2	福岡県 貝

表 20 遺物埋蔵表 18

行	区	番	面積	地種	用途	埋蔵品	年代	埋蔵品	数量	調査日	調査者	備考
815	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5762	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
816	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4747	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
817	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4537	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
818	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4538	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
819	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5204	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
820	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	6050	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
821	D16	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4419	113.00	11/16	11/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
822	C25	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5053	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
823	C24	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4620	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
824	C24	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5205	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
825	C24	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4938	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
826	C24	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4438	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
827	C17	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4642	123.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
828	D16	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5176	133.00	11/16	11/16	10/16(1.2.2.古)	10/16(古)
829	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	3571	133.00	11/16	11/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
830	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4010	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
831	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4208	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
832	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4063	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
833	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	2002	113.00	11/16	11/16	10/16(1.2.2.古)	10/16(古)
834	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4718	113.00	11/16	11/16	10/16(1.2.2.古)	10/16(古)
835	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4410	113.00	11/16	11/16	10/16(1.2.2.古)	10/16(古)
836	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4206	113.00	11/16	11/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
837	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	3	143.00	7/16	7/16	10/16(古)	10/16(古)
838	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5053	123.00	11/16	11/16	10/16(古)	10/16(古)
839	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5654	123.00	7/16	7/16	10/16(古)	10/16(古)
840	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4652	123.00	6/16	6/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
841	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4200	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
842	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5051	105.00	7/16	7/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
843	C19	6	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5206	60.00	10/16	10/16	2,3100(古)	2,3100(古)
844	C19	6	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4479	105.00	6/16	6/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
845	C19	6	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4643	113.00	5/16	5/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
846	C19	6	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5200	105.00	10/16	10/16	2,3100(古)	10/16(古)
847	D01	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4702	122.00	6/16	6/16	10/16(古)	10/16(古)
848	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4702	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
849	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5202	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
850	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5650	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
851	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5052	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
852	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5653	123.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
853	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	5654	123.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
854	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4938	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
855	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4010	105.00	10/16	10/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
856	D16	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4718	113.00	11/16	11/16	10/16(1.2.2.古)	10/16(古)
857	C17	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4642	123.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
858	D14	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4014	223.00	7/16	7/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)
859	C19	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	3614	105.00	10/16	10/16	2,3100(古)	10/16(古)
860	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4201	105.00	10/16	10/16	10/16(古)	10/16(古)
861	C18	9	1,000㎡(埋蔵)	畑	畑	805	4	113.00	6/16	6/16	2,3100(1.2.2.古)	10/16(古)

第4章 総括

第1節

土器集中廃棄所の「廃棄単位」について

Ⅳ区土器集中廃棄所は、調査区で確認された規模が長軸（略東西）約13m、短軸（略南北）は全体を検出していないため不明であるが、Ⅳ区及び南側の平成2・3年度における下水道調査に伴う⑧トレンチを含めて約8.5m程度が検出されている。廃棄所の外形からみると、全体としては北西-南東を軸とした形状であったことが推定できる。

遺物の分布については、本体とみなせる中心部分（記号ロ～メの範囲）において特に顕著に遺物が集中している。そして、この西辺では分布限界ラインが明瞭で北西-南東方向となる。一方、東辺においては、分布限界ラインが略東西をとるとともに、中心部分とやや間隔が空いて遺物が分布している。また、中心部分については、万遍なく遺物が分布しているわけではなく、所々に直径1m前後で遺物がほとんど見られない部分（例えば、記号のア・オ・ク・ニ・ル等）が存在する。合わせて、例えばこの北西隅、あーケ、シ、ヒーキ、ユーム、系の東隅、チーヨ等のように、特に遺物が集中している「遺物集中部」が複数存在している。遺物集中部のサイズは個別にまちまちであり、統一性は見受けられない。

ただ、本遺構は、上記のような遺物集中部が重なり合い、それが繋がりながら一まとまりの土器集中廃棄所を形成していることが見て取れる。したがって、土器集中廃棄所の形成は無作為の廃棄行為の結果ではなく、複数の遺物集中部が集めた結果、形成されたことを示していると考えられる。

それでは、それぞれの遺物集中部は、一度の廃棄で形成されたのであろうか。本土器集中廃棄所の東隅の部分では、上記の遺物集中部よりさらに小型の遺物のまとまりが複数みられる。図中に示した①～⑭である。この遺物のまとまりは、長軸サイズが32cm～97cm程度であるが、それらのうち、最も小型のもの（④・⑤・⑩・⑪・⑫・⑬・⑱・⑳）は長軸で32cm～37cm程度に収まり、平均値は35cm程度となる。廃棄された遺物のうち土器に関

しては、大部分が破片であること、廃棄後に雨水等で原位置から移動したことを考慮しても、そのサイズが限定されていることから、一度の廃棄行為を示す「廃棄単位」を示しているものと考えられ、この程度分量で一度の廃棄が行われたと考えられる。

このサイズの廃棄単位は、中心部分においても⑮・⑯の例がみられるため、上記の解釈は蓋然性が高いと考えられる。また小型の遺物のまとまりのうち、①・②・③・⑥・⑦・⑧・⑨・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰については、廃棄単位のおよそ2～3倍程度の法量であり、2～3回程度の廃棄単位の集積とみなすことも可能であろう。遺物集中部は、廃棄単位が同一箇所を繰り返されることで、形成されたと考えられるのである。そう考えると、遺物集中部のサイズの相違は、廃棄単位の相違、つまり廃棄回数の違いを反映していることになる。

一方、複数の遺物集中部が併存する状況に関しては、廃棄年代の相違か、集落内の何らかの集団の反映かが想定でき、土器集中廃棄所の性格を検討する上でも最も重要な観点であるが、ここでは遺物を踏まえた分析が十分にできなかったことを付記したい。（中摩浩太郎）

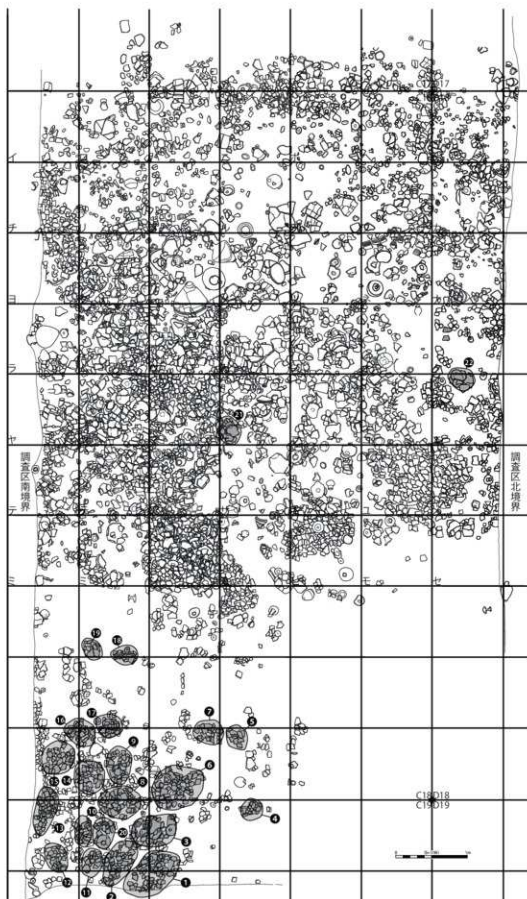


図 177 土器集中廃棄所のグルーピング

第2節 土器集中廃棄所の年代的位置づけ

土器集中廃棄所の年代を知る手がかりとして、もっとも出土量の多い土器がある。ここでは出土土器の分類を通して、土器集中廃棄所の年代について検討したい。遺構の年代を検討するには、出土遺物を総合的に分析した上で、年代を導き出すことが望ましいが、本文では年代的な位置づけに有効と考えられる器種について記述したい。なお、土器編年については、弥生時代のものについては、中園聡の編年（中園 1997）を、古墳時代のものについては中村直子の編年（中村 1987）、松崎の編年（印刷中）を使用する。

土器集中廃棄所から出土した甕は大きく弥生時代中期に位置づけられるものと、古墳時代に位置づけられるものに分類できる。前者の出土数は限定的であり、主体は古墳時代のものである。

弥生時代の甕については、入来式に位置づけられるもの、山ノ口式に位置づけられるものがあり、概して、弥生時代中期に位置づけられることができる。問題はこれらの土器を廃棄した集団の生活エリアが特定されていないことである。

これまで橋牟礼川遺跡の発掘調査では、弥生時代に該当する遺物は包含層出土のものがほとんどで、明確に弥生時代中期に位置づけられる遺構は確認されていない。その理由としては2点考えられる。

一つ目に発掘調査で古墳時代の竪穴建物跡で遺構検出を終えているため、さらに下層に弥生時代の建物跡がある場合が考えられる。ただし、橋牟礼川遺跡の竪穴建物跡は、縄文時代の包含層を基盤にしているため、弥生時代の遺構があったとしても古墳時代の遺構群によって削平を受けている可能性がある。

二つ目に弥生時代の集落は隣接する周辺にあるという場合が考えられる。これは、橋牟礼川遺跡の東側にある南丹波遺跡において、弥生時代終末から古墳時代初頭の集落および土器集中廃棄所が検出されていることもあるため、集落の中心が時期によって変遷した可能性が指摘されていることから導き出さ

れたものである。

いずれにしても、弥生時代中期における遺物廃棄はごく短期間で小規模であるため、これらの遺物が集中的に廃棄されたかについては可能性が低い。

続く古墳時代の土器の観察結果について記述する。結論としては、古墳時代前期後葉から飛鳥時代まで、廃棄量の多寡はありながらも、連続と廃棄されていることがわかった。指宿市内には橋牟礼川遺跡のほか、南丹波遺跡、宮之前遺跡、敷原遺跡などで土器集中廃棄所が確認されている（図 178）。また、確認調査のためその規模は明らかではないが、迫田遺跡においても土器集中廃棄所が確認されている。いずれも古墳時代後期を中心とする時期の土器集中廃棄所である。以下からは各器種の様相について検討する。

まず甕について、口縁部形態をみると、頸部がゆるやかに屈曲するものから、口縁部が徐々に立ち上がり、直口、内湾するものが確認された。また、無文の甕は少なく、口縁部下や頸部外面に貼り付け突起帯を有する資料が多いこともわかった。

脚台をみると、脚部内面の天井形態がドーム状になるものは少なく、脚部が直線的に開き、脚部内面の天井形態が平坦になるものが多勢であった。以上の点を考えると、これらの土器群は、筆者の分類の甕 8 類から甕 16 類に位置付けられる。

壺については、口縁部が強くくの字に屈曲するものから直口するものまでバリエーションが多く確認できた。口唇部はコの字を呈するものから、丸みを持つものがある。

また、底部形態をみると、やや厚みのある丸底や底部部が丸みを持つ平底が確認できた。これらは筆者の分類の壺 K4 ~ 6 類、壺 Ya4 ~ 7 類、壺 Yb4・5 類に位置付けられるものであった。

高杯は様々なバリエーションがある。一つは杯部が中程で屈曲する大型高杯。二つ目に口縁部が碗形を呈する高杯。三つ目に杯部が脚部との接合部と近い位置で短く屈曲し、ラッパ状に開く高杯である。一つ目の高杯については、筆者の分類で、杯部の屈曲がそこまで強くないことから、高杯 A3・4 類に位置付けられる。二つ目の高杯は、杯部形態が碗形を呈するものが多く、脚部もゆるやかに開くものが

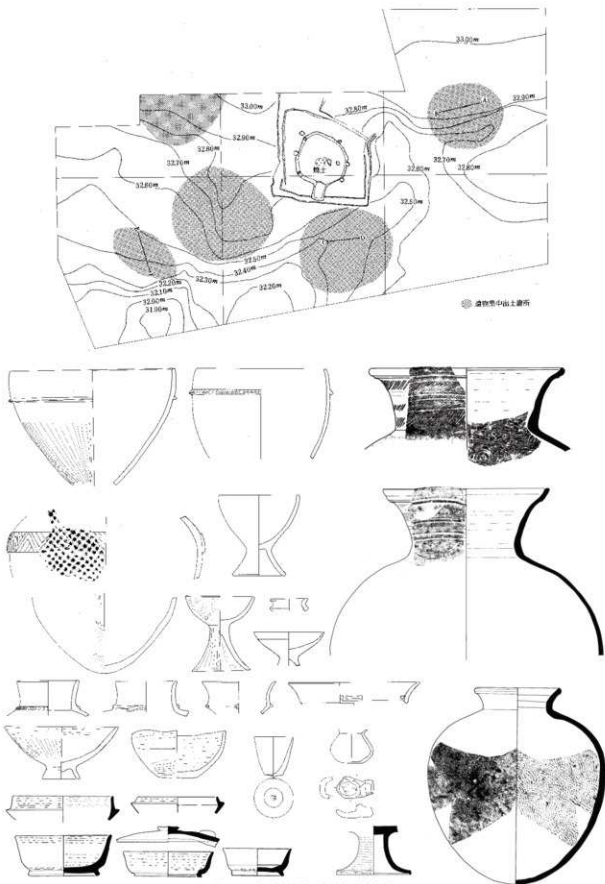


図178 宮之前遺跡の土器集中廃棄所

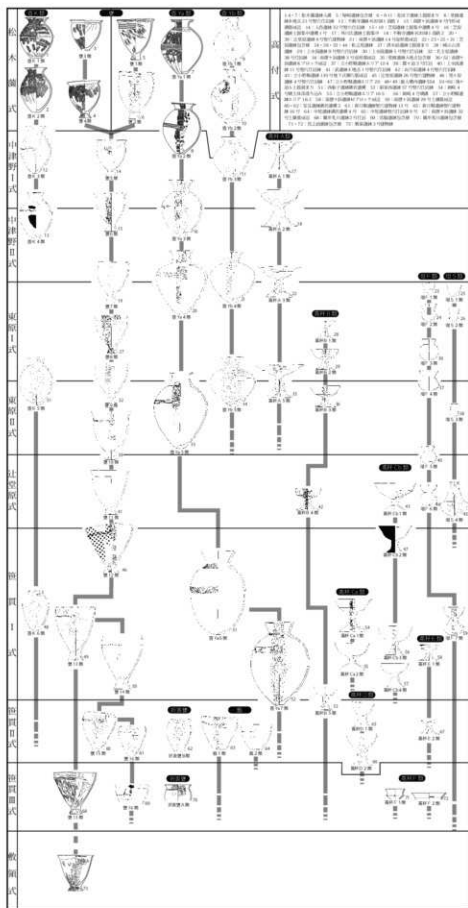


図 179 成川式土器編年

多いことから、高杯B3・4類に位置付けることができる。三つ目の高杯については類例が少ないため、検討できていない。今後の課題としたい。

埴は先行研究では大きく2つの系統があることが指摘されている(甲斐 2015)。一つは布留系の小型丸底壺の影響を受けて成立したと考えられる、胴部と頸部の境界が明瞭で深みのある胴部を有するタイプ(F類)である。もう一つは瀬戸内海周辺、特に阿波・讃岐地域の弥生時代終末期～古墳時代初頭の小型壺に近似する、口縁部と胴部の境界がわずかな屈曲や段で表現され、器高に比して胴部が浅いタイプ(S類)である。

橋牟礼川遺跡においても上記2つの系統が確認できる。F類については、口縁部が直線的に開き、胴部が丸みを持つもの、口縁部が受け口状を呈し、ソロバン玉状に強く屈曲するものが確認できる。これらの資料は筆者の分類の埴F4～7類に位置付けられる。S類については、胴部が丸みをもち、直線的に口縁部が長く伸びるものが確認できる。これらは埴S3類に位置付けられる。また、橋牟礼川遺跡では瓢状に埴の胴部を連結させた資料や、胴部径30cmを超えるほど大型化した資料もみられる。これらは本来あった小型丸底壺を在地化しデフォルメ

した結果であると考えられる。

以上の点から、橋牟礼川遺跡の土器集中廃棄所の年代は東原Ⅰ式から笹貫Ⅱ式に位置付けられることがわかった。これらの資料は7世紀後半に噴火した開聞岳の噴出物(青コラ火山灰層)以前に廃棄されたものであるが、橋牟礼川遺跡では青コラ火山灰降下後も竪穴建物がつくられたり、貝塚の形成がみられるなど生活活動が連続と続いている。そのため、青コラ降下後の集落の土器廃棄場所は他所にある可能性も考えられる。この点については、今後の調査報告書の中で分析・検討したい。(松崎大嗣)

参考文献

- 中園聡 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号 pp.104-119
 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 pp.57-76

